



— 終わりと始まり —
アクセル・ワールド15

川原 礫



電撃文庫

アクセル・ワールド15

— おはじ 終わりと始まり —

レジェンド
神獣級エネミー《大天使メタトロン》
を撃破したハルユキ。この世界を汚染する
《ISSキット》本体の破壊まであと
少し……と思った矢先、加速研究会メン
バー、ブラック・バイスとアルゴン・ア
レイが現れ、赤の王スカーレット・レイ
ンを拉致してしまう。

ニコを守ると約束したハルユキは、戒
めを解かれた大天使メタトロンの加護を
受け、ブラック・バイスを追跡する。

いっぽう黒雪姫は、現実世界からニコ
クロユキヒメ
の回線を切断するため、楓子、謡、あき
フーゴ ウタイ
らとともに、ミッドタウン・タワーのポ
ータルへと向かうが……。

《最強のカタルシス》で贈る、次世代
青春エンタテインメント！



15

終わりと始まり

accel world 15

|||||:▶||| ||| ||| |||
— ||| : ||| ||| + ||| ◀ : ▼
||| ||| ||| ||| ||| ||| ||| |||



電撃文庫



終わりと始まり
アクセセル・ワールド15

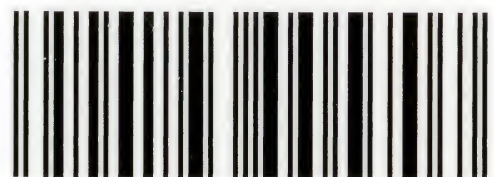
川原 礫



電撃文庫



9784048660051



1920193005707

ISBN978-4-04-866005-1
C0193 ¥570E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス

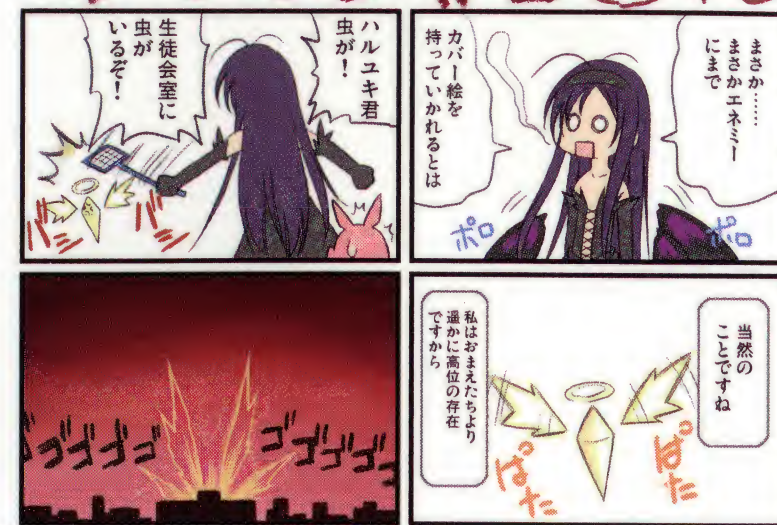
KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価: 本体 **570円**

※消費税が別に加算されます



アクセセル・ワールド 15 れき



かわはら れき
川原 礫

火山ステージかってくらい暑かった夏がようやく終わりましたね……。しかし私は、秋の気配がした時点で早くも来年の夏が近づきつつあることを考えてウヘーとなってしまう人なのです。そろそろ第五氷河期が来てもいい頃合いですよ！

【電撃文庫作品】

アクセセル・ワールド1～15

ソードアート・オンライン1～13

ソードアート・オンライン プログレッシブ1

イラスト:HIMA

10月3日生まれ。挿絵は今シリーズが初のイラストレーター。『電撃萌王』小冊子への寄稿を見た文庫編集者が、今回の挿絵依頼をオファーしたことがきっかけ。本業仕事の合間を縫って、ブログやSNSサイトなどでイラストを発表している。

川原 礫
イラスト/HIMA
デザイン/ビビィ



「……………」

ニコ

赤のレギオン《プロミネンス》の
レギオンマスター。
《メタトロン》戦の直後、
ブラック・バイスに拉致される。
デュエルアバターは
《スカーレット・レイン》。

「二代目赤の王は、
今日で加速世界から
退場して頂く」

ブラック・バイス

《加速世界》で暗躍する
《加速研究会》の副会長を務める。
その素性は謎に包まれている。

「……レイン！」

「なにを為すべきかは、
おまえ自身が
決めねばなりません」

✕

メタトロン

《加速研究会》にタイムされていた
《大天使》。
シルバー・クロウによって解放され、
彼に《翼》を与えた。

どこにいるんだ!!

ハルユキ

スクールカースト
中学内格差最底辺の少年。
黒雪姫率いる新生《ネガ・ネビュラス》のメンバー。
デュエルアバターは《シルバー・クロウ》。

ブラッド・レパード

赤のレギオン《プロミネンス》の
サブマスター。《三獣士》の一角。
ニコに忠誠を誓っている。

「絶対、絶対に、守る」

「しっつこいわあ！
あんた猫科やのうて犬科やろ！」

アルゴン・アレイ

《加速研究会》メンバー。
《四眼の分析者(クアッドアイズ・アナリスト)》の異名を持つ。
関西弁が特徴の女性型アバター。

本体……?」

「……ISSキットの、

クラ サキ フウ コ
倉崎楓子

黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》所属の
バーストリンカー。《四元素》の《風》。
デュエルアバターは
《スカイ・レイカー》。

「私も、そう感じるのです……」

シ ノ ミヤ ウタイ
四埜宮謡

黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》所属の
バーストリンカー。《四元素》の《火》。
デュエルアバターは《アーダー・メイデン》。

「……本物、だと思っの」

「……まさか、あれが……」

黒雪姫

黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》の
レギオンマスター。梅郷中学副生徒会長。
デュエルアバターは
《ブラック・ロータス》。

ヒ ミ
氷見あきら

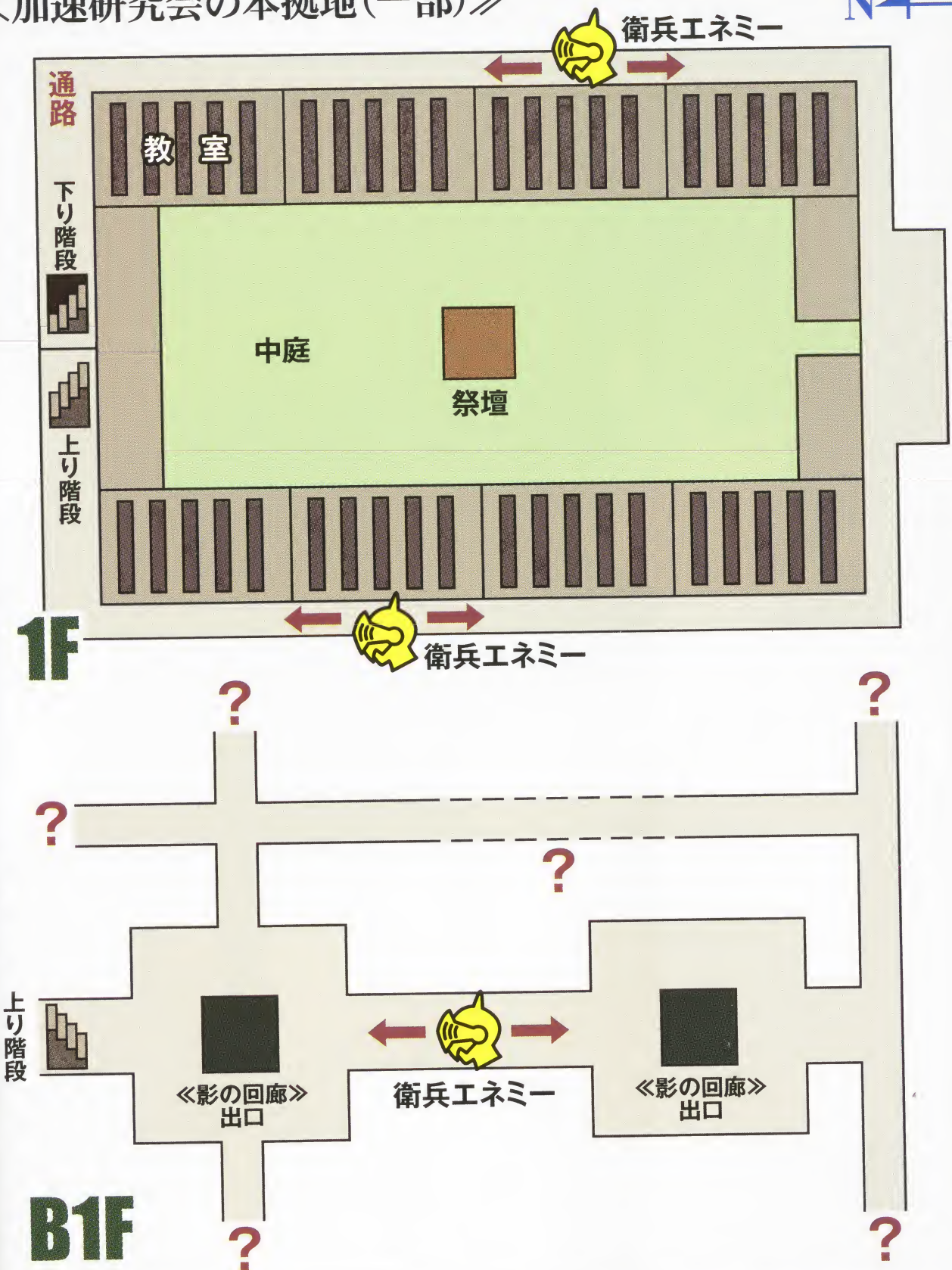
黒のレギオン《ネガ・ネビュラス》所属の
バーストリンカー。《四元素》の《水》。
デュエルアバターは
《アクア・カレント》。

アクセル・ワールド 15 終わりと始まり

川原 礫
イラスト/HIMA
デザイン/ビィピィ



《加速研究会の本拠地(一部)》



《加速研究会の本拠地(一部)》

加速世界に感染を広げるISSキットの《本体》が潜むと目される《東京ミッドタウン・タワー》。そこは同時に、ISSキット事件の黒幕《加速研究会》の本拠地でもあると予想されていた。しかし、ニコを救出するためにブラック・バイスを追跡したハルユキが、《影の回廊》を通過してたどり着

いた場所はミッドタウン・タワーではなく、どこか奇妙な既視感の残る場所だった。《旧東京タワー》から南西に約二キロメートル離れた場所に存在する《学校》。地下に巨大なダンジョンを持ち、内部を騎士型エネミーが警護するその学校こそが、加速研究会の本拠地だったのだ。

「と……………べええええええええええ——ッ!!」

ハルユキは叫んだ。

意志に呼応するかのよう、背中から伸びる新たな翼が白銀の輝きを進らせ、黄昏ステージの空を眩く照らした。

1

真なる加速世界、すなわち無制限中立フィールドから、自分の意志で現実世界へ戻る方法はたった一つしか存在しない。

ランドマーク的な大型建築物の中に設置されている《離脱ポイント》、別名《ポータル》に飛び込むこと。それ以外の方法は皆無だ。たとえ体力ゲージがゼロになって死んでも、幽霊状態で死亡マーカー周辺に拘禁され、六十分後に蘇生するだけ。通常攻撃一発に耐えられないほど強力なエネミーのテリトリイ深くで死んでしまうと、バーストポイントが尽きるまで死亡と蘇生を繰り返す羽目にもなりかねない。

正確には、ポイントを全損すればポータルを使わずともフィールドから離脱できるのだが、その場合はブレイン・バースト・プログラムおよび加速世界にまつわる記憶も失ってしまう。そんなことになるくらいなら、加速世界に閉じ込められたまま何年も過ごすほうがまだマシだ、と大抵のバーストリンカーは考えるだろう。

ゆえに、無制限フィールドで高難易度のミッションに挑む時は、現実世界側で自動的に加速停止させてくれる仕組み、いわゆる自動切断セーフティを用意することが常識となっている。

具体的には、ニューロリンカーを有線でグローバル接続し、一定時間が経過すると回線が強制

的に切断されるよう設定しておくのだ。

ネガ・ネビュラス総員にプロミネンスのニコとバドさんを加えた九人で《大天使メタトロン 攻略ミッション》に挑むにあたって、黒雪姫はセーフティ発動を十分後とした。短いようだが、現実比一千倍の時間が流れる加速世界では、百六十六時間四十分——約七日間に相当する。

これは相当に余裕を持たせた設定で、実際、激闘の果てにどうにかメタトロンを撃破した時にも自動切断までは六日以上も残っていた。

だが、突如。その余裕は、誰もが予想すらしなかった陥穽と化した。

メタトロン戦の直後、ニコ——赤の王スカーレット・レインが、加速研究会副会長ブラック・パイスに拉致されてしまったのだ。

たとえどこに連れ去れようと、現実世界でグローバル接続が断たれればその瞬間に加速世界からデュエルアバターは消滅し、ひとまず危機を脱することができる。だが、セーフティの発動は遠く先の六日後。ゆえにハルユキは、パイスを追って飛び立つ直前、仲間たちに向けて叫んだ。最寄りのポータルから離脱して、ニコのケープルを抜いて、と。

メタトロン攻略戦の舞台となった東京ミッドタウンは、二十三区内でも有数のランドマークなので、必ずどこかにポータルが配置されているはずだ。恐らくは、ミッドタウン・タワーの内部に。

しかし問題は、必ずしもビルの一階エントランスにポータルが存在するとは限らないことだ。

事実、ミッドタウン・タワーと対を成すようにそびえ立つ六本木ヒルズ・タワーのポータルは五十階付近にあった。もし同程度の高さだとすると、そこまで上るのに何分かかかるか……いや、ミッドタウン・タワーは加速研究会の重要拠点なのだから、トラップの類に阻まれてポータルまで辿り着けないことすら有り得る。

だから、ニコの救出を、回線切断だけに頼るわけにはいかない。逃げるブラック・パイスに何としても追いつき、戦って取り戻すのだ。

ニコは、ハルユキが守ると誓った、大切な友達なのだから。

「もつと……!! もつ……!! と……!!」

かつて経験したことのない速度域に突入してもなお、ハルユキはスピードを求めて声を絞り出した。

背中では、シルバー・クロウ本来の翼である十枚の金属フィンに加えて、その上部に新しく装着された《メタトロン・ウイング》という名の純白の翼が、高周波の咆哮を迸らせている。大天使の名を冠した強化外装のパワーは途轍もないもので、前に伸ばした両手が仮想の大気を圧縮し、発生した高熱が指先を真っ赤に焼く。しかしハルユキは、超加速された知覚の中で、もつと、もつとと念じ続けた。

メタトロン攻略戦直後のニコを捕獲したブラック・パイスは、ミッドタウン・タワーの影にその身を沈め、逃走した。連続する影の中ならばどこまでも身を隠したまま移動できる能力を

持つバイスだが、幸い黄昏ステージは建築物が少ない。タワーから直線距離で約五百メートル離れた交差点で影は途切れていて、そこを渡るために姿を現した漆黒のアバターを、ハルユキは見逃さなかった。

しかし五百メートルと言えば、東京ミッドタウンの差し渡し以上の倍にも相当する距離だ。加えて、バイスが交差点を横切り、次の影に潜るのにかかる時間は、どんなに長く見積もっても三秒。影は少し先で首都高速三号線と接していて、高架下の影に逃げ込まれたらもう追跡は不可能だ。三号線の高架は、東は都心環状線、西は東名高速に接続し、事実上無限に広がっているからだ。

五百メートルを、わずか三秒で移動する。

静止状態からそれを実現せんとするなら、三秒後には時速千二百キロメートルものスピードに達している必要がある。求められる加速度は、約11G。デュエルアバターの限界を遥かに超えた機動だ。

しかし、やらねばならない。

飛行アビリティ単独での最高速度は、時速五百キロ。第二段階心意技（光速翼）を発動して、時速千キロ。更に、強化外装メタトロン・ウイングの推力を加えて、時速千二百……千三百……。

「お……おとおおお——ッ!!」

引き延ばされた時間の中で、ハルユキは叫んだ。

高密度の液体の如く変容した空気の壁を、シルバー・クロウの鋭い指先が貫いた。

発生したリング状の衝撃波が、下方の建物群を粉々に砕いた。

もう目と鼻の先にまで迫った交差点では、道路を渡り終えたブラック・バイスが、再び四角い板に変貌していく。両腕に抱えられた小さなアバターの、真紅の装甲が夕闇の底で鮮やかに輝く。しかしその色も、すぐに漆黒の薄板に呑み込まれてしまう。

再び影に沈み込んでいく仇敵を凝視し、ハルユキは残された力の全てを振り絞った。

飛行速度は、恐らくすでに時速千二百二十五キロ——すなわち音速を超えている。もう正常な着地はおろか減速すら不可能。フルスピードのまま、ブラック・バイスに突っ込むしかない。激突の衝撃でハルユキとバイスは瞬時に死亡し、あるいはバイスの中に閉じ込められているニコもそうなるだろう。しかし、どこかに連れ去られてしまうよりははずとマシだ。蘇生待機中に仲間たちが追いついてくるはずだし、ニコには全てが解決してからたくさん謝ればいい。シルバー・クロウは、急角度の降下によって後方に瓦礫混じりの大嵐を引き起こしながら、目指す交差点に突入した。

沈降していく漆黒の板まで、あと十メートル……五メートル……。

「ニコを……」

三メートル。二メートル。

「……………返せ——ッ!!」

一メートル。

バイスの全身が影に没したのとまったく同時に、ハルユキの両手がその地点に触れた。天地を揺るがすような巨大な爆発は——起きなかった。

代わりに、どぶん、という異様な感覚がハルユキの全身を包んだ。

あらゆる光が消え、音も途切れた。地面に大きなクレーターを作るはずだった超音速突撃のエネルギーすら、あたかも異次元に吸い込まれたかの如く消滅した。仮に水面へ飛び込んだのなら、翼が停止しても数十メートルは移動し続けるはずなのに、慣性エネルギーそのものがキャンセルされてしまったらしい。

まるで、真つ黒なインクを満たした底無し沼に突入したかのようだ。視界に存在するのは、残り五割の体力ゲージだけ。コンマ一秒前までアバターを軋ませていた振動も消え去り、五感に入力される情報がゼロへと変わる。

——いや。

突然、横向きの力がハルユキを襲う。引つ張られている……のではなく、流されているようだ。高密度の間は、あたかも地下水流のように一方向へと動き、ハルユキをいずこへか運んでいく。

「……レイン！ どこにいるんだ!!」

叫んだ声すらも即座にかき消されてしまうのを感じながら、ハルユキは必死に手を伸ばした。だが、指先には何も触れない。流れに抗うべく背中の翼を震わせようとするが、粘度のある間がまとわりついて邪魔をする。一寸先も見えない暗闇の中を、ただ押し流されていくことしかできない。

——光……何か、光源を……。

アイテム欄の中に、光を出すものが入っていなかったかしばし考えてから、ハルユキはようやくアイテムなど必要ないことに気付いた。右手を高く掲げ、精神を集中する。りいいん、という澄んだ振動音がアバターを伝わって響き、生まれた銀色の光——心意システムの過剰光——が闇をわずかに透さける。

視界にそれが浮かび上がった瞬間、鋭く息を吸い込んだ。

ほんの数メートル先を、流れに乗って移動する長方形の板。間違いないブラック・バイスだ。つまりこの無明の空間は、バイスが逃走通路として利用している《影の中》なのだ。接触したタイミングか、それとも音速すら上回る超スピードのせいか、ハルユキもまたバイスに続いて影に飛び込んでしまったらしい。

「待て……!! レインを放せ……!!」

まったく反響しない声で叫び、ハルユキは光を宿した右手を振りかぶった。

「——《光線》……」

ランス、と技名を発声しようとした瞬間、先を行くパイイスが突然右に転ずる。背後からの攻撃に気付いて避けたわけではなく、影の回廊そのものが鋭角にターンしているらしい。ハルユキも否応なくその流れに吞まれ、体勢を崩してしまふ。右手の光が不規則に明滅し、懸命にイマジネーションを保とうとするが、漆黒の激流に翻弄されてままならない。やむなく手足を縮め、翼も折り畳んで、流れに身を任せる。ここでパイイスに引き離されれば、最悪、影の回廊から追い出されてしまいかねない。

……ニコ、もう少しだけ耐えてくれ。

かつて、同じようにブラック・パイイスの板に閉じ込められた時の苦しさを思い出しながら、ハルユキは心の中で呼びかけた。

……必ず助けるから。必ず……必ず……

答えは聞こえなかった——それ以前にただの思考が届くはずもなかったが、黒い奔流に運ばれるあいだ、ハルユキはひたすらニコに向けて念じ続けた。

影の中では時間感覚すら失われてしまうのか、パイイスを追って飛び込んでから何分が経過したか解らなくなってきた頃、ようやく流れが緩やかになり始めた。出口が近いことを察知し、ハルユキは折り畳んでいた四肢を伸ばしてから、再び心意の光を右手に宿した。

距離が少し広がっているものの、直方体の輪郭が再び闇の奥に浮かび上がり、安堵と緊張を同時に覚える。パイイスを見失うわけにはいかないが、追跡が終われば、次は必然的にあの奇怪

な積層アバターと戦うことになる。

ハルユキはこれまで、加速研究会副会長を名乗るブラック・パイイスと、合計三回接近遭遇している。

最初は、《略奪者》ダスク・テイカーとの最終決戦。無制限中立フィールドでは困難なはずの待ち伏せを、B I C を利用した減速能力によってたやすく成功させたパイイスは、ハルユキを薄板二枚の間に閉じ込めて大いに苦しめた。もし黒雪姫が、修学旅行先の沖繩から駆けつけてくれなければ、タクムともどもポイント全損していた可能性が高い。

二度目は、軌道エレベーター《ヘルメス・コード》を舞台にしたレースイベントの最中だった。レース用シャトルごと影の中に潜んでいたパイイスは、加速研究会のメンバーであるラスト・ジグソーをイベントに乱入させると自分は即座に撤退してしまい、ハルユキたちに追撃の機すら与えなかった。

そして三度目は、十日前、災禍の鎧を装備してしまつたハルユキが、黒雪姫とともに無制限フィールドにダイブした時。パイイスは、ハルユキを六代目クロム・ディザスターとして完全に覚醒させるため、黒の王ブラック・ロータスの姿に化けて六本木ヒルズ・タワーの屋上に出現した。一時は鎧に支配されかけたハルユキだが、ぎりぎりのところで辛うじて自分自身を取り戻し、黒雪姫との融合心意攻撃によってついにパイイスに一矢を報いた。

つまり、これまでブラック・パイイスとの戦いをなんとか切り抜けてこられたのは、黒雪姫や

レギオンの仲間たちの助力があつたればこそなのだ。

しかし四度目の遭遇となる今回は、ハルユキ単独でバイスを撃破せねばならない。仲間たちを置き去りにして一人で突貫してしまつた結果だが、あの時は、他の選択肢はなかった。仲間を待つていたら、こうしてバイスを追うことはできなかっただろう。

——恐れるな。やるしかないんだ。

いよいよ終わりに近づいてきたらしい黒い水脈の中で、ハルユキは怖じ気づきそうになる自分と言ひ聞かせた。

——たとえばどんな相手でも……それこそ純色の王の誰かだろうと、ニコを守るためなら僕は戦う。だって、僕は約束したんだ。ここで魔病風に吹かれて逃げ帰つたりしたら、バーストリンカーでいる資格はない。

強く両手を握り締めると、仄かな畏れも蒸発するように消えた。

まるでそれを待つていたかのように、ついに影の流れが止まった。少し先で直方体がすうつと浮き上がり、ハルユキもそれに続く。

再び、どばん、という気味の悪い感覚を通り抜けて、ハルユキは冷たい平面上に飛び出した。直後に足許の出口は跡形もなく消え去り、硬質の床へと着地する。素早く周囲に視線を走らせ、状況を確認する。

屋外ではなく、かなり広い部屋の中だ。四方の壁と天井、床は黄昏ステージ特有の大理石製。出入り口は、前後に二箇所。窓は存在せず、光源は壁の高いところに据え付けられた幾つかのランプだけ。

部屋はがらんとしていて、十メートル離れた場所で静止する漆黒の直方体とハルユキの間を遮るものは何もない。片膝立ちのまま右手で床を押してみるが、指先は滑らかな石材に跳ね返される。やはり、ミッドタウン近くの交差点でハルユキが影の通路に突入できたのは、バイスの能力発動に便乗したからと考えるべきか。

そのバイスが変身した姿である直方体は、突然真ん中から二枚に分かれると、くるくる回転しながら分割を繰り返して、極薄の板を人型に並べた積層アバターへと戻った。ハルユキに背を向けて立つバイスの両腕には、小さなF型アバターが抱かれている。意識を失つたままらしく、手足はだらりと垂れ、アイレンズにも光はない。板に無理やり閉じ込められた時のダメージだらう、真紅の装甲は各所でひび割れ、剥落した小さな破片があたかも出血しているかのように床に零れ落ちていく。

満身創痍のニコを眼にした瞬間、ハルユキの胸に火が入った。青白い高温の炎に衝き動かされ、立ち上がりざま叫ぶ。

「——ブラック・バイス！」

今度こそ、声は四方の壁に跳ね返り、深いエコーを伴って響いた。積層アバターは、ハルユキの存在に気付いていたのかいないのか、音もなく振り返ると軽く

首を傾げた。薄板を並べただけの頭部には眼も口も存在しないが、空隙から放たれる磁力的な視線がシルバー・クロウの銀甲を撫でる。

一秒後、ブラック・バイスは、どこか教師めいたところのあるソフトな低音で言った。

「おやおや、これは驚いた。こんなところで何をしているんだい、クロウ君？」

「……決まってる！ お前を追いかけてきたんだ！」

「失礼、愚問だったね。しかし、ということは、わたしが二回目に《潜影》を使った瞬間をミッドタウン・タワーから捕捉したわけか。いかにきみでも、とうてい追いつける距離ではなかったはずだけだね。どうやってそんなに速く飛んだんだい？」

のんびりとした声で訊ねられるとつい引き込まれそうになるが、ハルユキは答えなかった。バイスの位置からは、背中に折り畳まれていた新たな翼——《メタトロン・ウイング》は見えない。切り札はぎりぎりまで伏せておくべきだ。

代わりに、低く張り詰めた声で反問する。

「そっちこそ、どうやって僕らを待ち伏せしたんだ。お前一人ならともかく、アルゴン・アレイは長期間の待ち伏せには耐えられないはずだ。それとも、あいつも《減速》できるのか」

「その質問に答えたら、きみの秘密も教えてくれるかな？——と言いたいところだけれど、残念ながらそればかりはわたしの口からは答えられないな。どこかで本人に会ったら訊いてみてくれたまえ」

「そうするよ。あんたから、レインを取り返したらな」

ありったけの意志を込めて宣言すると、ハルユキは右足を一步前に踏み出した。

まったく同じタイミングで左足を引いたバイスは、肩をすくめながら答えた。

「うーん、済まないが、その要求にも応じかねるね」

両腕に抱える真紅のアバターをちらりと見下ろし――。

「二代目赤の王は、今日で加速世界から退場して頂く予定になっているんだ」

あくまで滑らかな声音で発せられたその言葉に、ハルユキはすぐには反応できなかった。

一瞬白く飛びかけた意識を、たちまち純粹な怒りが満たす。強燃性の気体にも似たその感情は、小さな火花ひとつで着火、いや爆発し、ハルユキを仮借なき戦闘へと駆り立てるだろう。

「……貴、様……」

アバターの装甲が帯電していくような感覚を味わいながら、喉から掠れ声を押し出す。

「そんなこと、絶対にさせない。退場するのはお前だ、ブラック・バイス。もう二度と薄汚い悪巧みをできなくしてやる」

「悪巧みは酷いなあ。これでもわたしなりに頑張っているんだよ、我が会長殿の仰せのままにね。きみの行動原理も同じだろう、クロウ君？」

「一緒にするな！ 黒の王は、自分ひとりだけ安全な場所に隠れたまま、レギオンメンバーを戦わせたりなんか絶対にしない！」

ハルユキがバイスと対峙しているこの瞬間も、黒雪姫とネガ・ネビュラスのメンバーたちは、ニコを強制バーストアウトさせるために最寄りのポータルを目指しているはずだ。どんな障害が現れようと、黒雪姫は先頭に立ってそれを斬り伏せ、ニコを救うために全力を尽くすだろう。まったく姿を現さず、名前すら定かでない加速研究会のトップとは違う。

そしてハルユキも、レギオンマスターの命令に盲目的に従っているわけではない。黒雪姫の求めるものを知り、同じ道を行きたいと願ったからこそ騎士として剣を捧げたのだ。そもそも、ハルユキが単独でバイスを追ったのは、黒雪姫に命令されたからではない。大切な友達であるニコを助けたかったから——そして同じ気持ちで、ネガ・ネビュラスのメンバー全員が共有していると信じたからだ。

爆発寸前の感情をぎりぎりのところでコントロールしつつ、ハルユキはもう一歩前に出た。今度も、積層アバターはその動きを読んでいたかのように後退り、距離を保つ。

ひと思いに飛びかかり、ニコを取り返したいという衝動は影らむばかりだが、バイスがハルユキを焦らそうとするなら今はそれに乗らねばならない。現状のまま時間を稼げば稼げほど、黒雪姫たちがニコの強制切断に成功する確率も高まるのだから。いっぽう、一対一で戦闘して勝てる確率は、残念ながら高いとは言えない。バイスの能力は《捕獲》と《逃走》に特化して

いるはずだが、何と言ってもレベル8のハイランカーであり、最古参の《オリジネーター》でもあると推測される相手なのだ。

感情と理性をせめぎ合わせるハルユキの内心をどこまで察しているのか、バイスはのんびりと笑ってみせた。

「はは、確かに、言われてみればわたしも長いこと会長殿の姿を見ていないな。でも、だからと言ってあの人が何もしていないというわけではないよ。さっききみたちが戦った神獣級エネミー、あれをタイムしたのは会長殿だからね」

その言葉が耳に届いた瞬間、背中の強化外装が鋭く震えた気がした。危うくそのまま翼を広げて突進しようになるが、今度もなんとか踏みとどまる。大きく息を吸い、

「……でも結局、メタトロンを無理やり戦わせてただけじゃないか。悪いけど、会長とやらがタイムに使った道具は破壊したぞ。もう、拠点をエネミーに守らせるなんて真似はできないからな」

ミッドタウン・タワーを守護していた、いや守護させられていた大天使メタトロンの頭部に、食い込む銀冠を思い出しながらハルユキが言うと、ブラック・バイスは軽く首を傾げてから、なぜか小声で笑った。

「ふふ、なるほど、まだ気付いていないのか。クロウ君、きみが破壊したのは……—おっと、お喋りはここまでかな」

「……僕が何を気付いてないっていうんだ？」

「答えはすぐに解るよ。そう、一秒後にね」

「何を言ってる……」

パイスに向けて三たび足を踏み出そうとした、その瞬間。

ハルユキは、背中にひんやりとした冷気を感じ、本能的に右へと跳んだ。直後、鈍い銅色の輝きが後方から降り注ぎ、寸前まで踏んでいた床を激しく叩いた。衝撃と風圧に押されてよろめきながら、ハルユキは両眼を見開いた。

それは、空恐ろしいほど巨大な、一本の剣だった。青の王ブルー・ナイトが持つ大剣《ジ・インパルス》よりも、長さで一・五倍、厚さで二倍はありそうだ。当然、柄を握る手も大きい。鋼鉄の装甲に包まれた腕や肩も異様に逞しく、騎士ふうの兜を被る頭は見上げるほど高い場所にある。身長は、シアン・パイルはおろかアボカド・アボイダすらも遥かに上回るだろう。

「誰だっ……！」

更に大きく飛び退きながら、ハルユキは誰何した。この状況で攻撃してくるからには加速研究会のメンバーなのだろうが、これまでに遭遇した研究会所属のバーストリンカーは例外なく中型以下だったので、よもやこんな超大型アバターが在籍しているようとは……

否、違う。

ぶんつ、と横薙ぎに襲ってくる剣を、壁際まで下がって回避したハルユキは、ようやく気付いた。重装騎士の、天頂部に長いツノのついた兜を取り巻く、白銀の円冠。C字形の鉤を無数に連ねたようなそのデザインは、サイズこそ違えど、メタトロンの頭に嵌められていたものとまったく同じ。

「デュエルアバターじゃない……こいつも、タイムされたエネミー……!?」

ハルユキの掠れ声を、少し離れた場所に立つブラック・パイスはあつかりと肯定した。

「その通り。しかもステータスは巨獣級レベルだよ。わたくしもソロで戦うのはちょっと御免こうむるねえ」

のんびりした口調で言いながらも、パイスは一步、また一步と下がっていく。後方の壁には、扉のない出入り口がぼつかりと口を開けている。ここで逃がすわけにはいかないが、騎士型エネミーが再び剣を振りかぶりつつあり、今はおいそれと動けない。

「……レイン！ 眼を覚ましてくれ、レイン!!」

巨剣の切っ先を睨みながら、パイスは抱えられたニコに大声で呼びかけるが、アイレンズは光を失ったままだ。加速世界では、物理ダメージや属性ダメージが原因で長時間失神することはほぼ有り得ないので、恐らくはパイスが何らかの手段で劣化現象に近い状態を強いているのだろうが、それをどうすれば破れるのかも解らない。

「……………レイン!!」

ハルユキの絶叫が引き金になったかのように、騎士型エネミーが動いた。右手に握る巨剣を

上から下へ、すかさず左から右へと振る。刃が激突した床から膨大な火花が噴き上がり、切り裂かれた空気が熱く灼ける。

騎士のステータスは巨獣級、というバイスの言葉が本当ならば、レベル5のハルユキは一撃喰らっただけで即死しかねない。六十分の蘇生待機のあいだにニコが何をされるか解らないし、騎士がずっと部屋に留まれば、ハルユキ自身が無限 E.K. に陥ってしまう可能性すらある。連続攻撃を必死にかいくぐるハルユキの視界の端で、ついにバイスが出入り口に達した。

「では、わたしはここで失礼させて頂こう。健闘を祈るよ、クロウ君」
戸口の奥の暗闇に溶けていくブラック・バイスを、ハルユキは何とか追おうとした。しかし騎士エネミーが剣を振り回しながら移動し、巨体で戸口を完全に隠してしまう。

「く……！」

ハルユキは歯噛みをしながらかうなったら一か八かの突進でエネミーをすり抜け、部屋から脱出するしかないと考えた。身を屈め、床を蹴りつけようとした、その刹那。

………違ふ。

頭の中で、もう一人の自分が囁いた。

ピンチの時こそ、落ち着いて視野を広く。自分、敵、戦場、それら全てをちゃんと見れば、成すべきことも現えるはず。

たとえ最弱の小獣級であっても、今のハルユキではエネミーをソロで倒すことはまだまだ難



しい。ましてや、眼前に立ちかはる騎士は、野獣級の更に上位たる巨獣級相当。破れかぶれで突つ込めば、カウンターの一撃を喰らって即死という展開も充分に有り得る。といって、普通に戦って倒すのは、すり抜けるよりもいっそう困難だ。

しかし、今の状況なら、騎士エネミーには明々白々な弱点が存在する。

無論、頭に嵌る円冠だ。メタトロンと同じく騎士がああ冠に支配されているなら、そこにはんの一発でも攻撃をヒットさせれば動きを止められるはず。その際に部屋から脱出し、バイスを追う。

この作戦の問題は、見上げるような巨軀を持つ騎士といえども、頭部の直径がセメートルもあつたメタトロンと比べれば遙かに小さいことだ。必然、頭を取り巻く冠もそのぶん縮小している。幅はわずかに五センチ、そこをピンポイントで痛撃しなくてはならない。

騎士の身の丈はシルバー・クロウの二倍もあるので、地上からのパンチやキックは当然届かない。ならば遠隔型心意技の《光線槍》で、と一瞬考えるがすぐに却下する。《光線剣》よりも深いイマジネーションを必要とする《槍》は、発動前と発動後の隙が大きい。万が一狙いを外せば、やはりカウンター攻撃を浴びてしまう。と言つて、メタトロン戦でやつたような頭部に肉薄しての直接攻撃は、足許をすり抜けるよりもずっとハイスクダ。

途切れることのない斬撃を回避するために後退を余儀なくされながら、ハルユキは懸命に考え続けた。何か、まだ何か方法があるはず……。

不意に、背中の翼——クロウ本来の銀翼ではなく、その上部に装着された白翼の片方が再び震えた。まるで、何かを伝えようとするかのように。

——お前……やれるのか……？

脳裏の問いかけに応じる声は聞こえなかったが、ハルユキは確信した。強化外装メタトロン・ウイングにはまだ秘められた力がある。背中に伝わる熱は、未知なるアビリティ発動の予兆だ。四枚の翼を一気に展開し、腰を落として構える。

ハルユキの挙動に反応してか、ここで初めて、鎧騎士がエネミー特有の奇怪な唸り声を漏らした。

「……ルヴォウ……」

兜に刻まれた細いスリットの奥で、青黒い眼光が瞬く。大剣を両手で握り、太い腕にぎりぎり力を溜め——。

「ヴォロワアアア——ッ!!」

野太い咆哮を轟かせつつ、猛然と振りかぶり、斬り下ろす。

巨体には合わない疾速の一撃を、ハルユキはありつただけの意志力を振り絞って待ち受けた。今までのように、余裕を持って避ければ反撃の機も失う。最大のスピード、最小のモーションで回避する。

超加速感覚の中で、轟然と迫り来る致死の刃を凝視し、タイミングを計る。

「だっ!!」

磨いてきた《空中連続攻撃》のテクニクを応用し、地面を蹴る力に翼の瞬間推力を加えて、右に一メートルだけスライドダッシュする。至近距離を擦過した金属塊が大理石の床を打ち据え、噴き上がった大量の火花がクロウの装甲にばちばちと跳ね返る。

無害な熱と光のエフエクトを無視して、ハルユキはぐつと右腕を引いた。

メタトロンに与えられた翼が、この状況でどんな力を発揮するのかわからなかった。伝わってくるのは、《できる》という声なき意志だけ。しかし、事ここに至れば、ただ信じて撃つだけだ。

「オオオッ!!」

短い気合いを放ちながら、ハルユキは右拳を突き出した。

その動作に呼応して、右上の翼が高く伸び上がった。鋭利な剣を思わせるフォルムの薄翼は、空中で九十度折れ曲がると――

ジャッ! と空気を切り裂き、稲妻の如く突進した。騎士は予想外の敏捷さで上体を傾けて避けようとしたが、一条の光線と化した翼はその動きに追従し、緩やかな弧を描いて兜の側面を直撃した。

眩い光が迸り、視界を白く染めたが、眼を細めつつもハルユキは見た。兜に食い込む銀色の

冠が、極薄の刃と化した翼に断ち切れ、ばらばらに分解していくのを。

「……いち、げきで……」

自分の行った攻撃ながら、その恐ろべき威力に戦慄し、ハルユキは掠れ声で呟いた。メタトロン戦の時は、冠を何十回と殴ってようやく破壊できたのだ。サイズがまったく違うからそのぶん耐久力に差があったのかもしれないし、拳による打撃属性攻撃と刃による切断属性攻撃の違いもあるが、それにしても恐ろべき切れ味だ。

一瞬の驚きから覚め、慌てて大きくバックジャンプしたが、騎士エネミーは不自然な体勢のまま硬直している。銀冠を構成していたリングが次々に兜から抜け、ばらばらと床に落ちて消滅すると、ようやく緩慢に動き出す。

たとえタイムが解けたとしても、全てのエネミーは原則としてバーストリンカーに敵対的だ。タイムからの解放を《借り》と判断し、ハルユキに力を貸してくれたメタトロンは例外中の例外で、騎士エネミーが再び攻撃してくる可能性は高い。その前に部屋から離脱し、ブラック・パイプを追うべきだと判断したハルユキは、即座に地面を蹴った。隠蔽とした様子のエネミーの横をすり抜け、広い床を横切って、パイプが通過したほうの出口に飛び込む。

そこは、左右に伸びる長い通路になっていた。部屋と同じく窓は存在せず、数少ないランプが放つオレンジ色の光だけが弱々しく揺れている。パイプが去ってから数十秒しか経っていないが、通路は見渡す限り無人だ。

「く……」

ハルユキは強く歯噛みした。一刻も早くニコを取り戻さねばならないのに、右に行くべきか、左に行くべきかを判断する材料が何もないのだ。ぐずぐずしていたら、背後の騎士エネミーが動き出してしまふ。

——右か、左か……いや、違ふ。

「上だ！」

小声で叫び、ハルユキは高い天井を睨んだ。空からならパイプを見つけれられるかもしれないし、現在地が無制限フィールドのどこなのかは確かめられる。もちろん天井には窓も煙突もないが、黄昏ステージの脆い建物くらい、今のハルユキなら何階だろうとぶち抜けるはずだ。

四枚の翼を広げ、腰を落とし、最大速度で飛び上がろうとした——

その、寸前。

しゃらららんと、鈴の音に似た軽やかな音を立てて、上側の双翼——強化外装メタトロン・ウィングが、光の粒と化して消滅した。バランスを崩し、ハルユキは床に尻餅をついた。

「な……………」

呆然と喘ぎながら、左右の肩越しに何度も振り向く。だが、見えるのは、クロウ本来の金属翼だけだ。体力ゲージのすぐ下に極小のフォントで表示されていた、装備中の強化外装を示す「METATRON WINGS」の文字列までもが、右端から微細なピクセルに溶けて消え

去る。

空中に舞い散る純白の粒子を見上げ、ハルユキは必死の声で呼びかけた。

「ま……待ってくれ、まだニコが捕まったままなんだ！ もう少し……あと少しだけでいい、僕に力を貸してくれ！」

しかし、もちろん答える声は……………

存在した。

「落ち着くのです、小さき鳥よ」

「……………へっ？」

「私は、まだここに居ます」

そんな言葉が頭の中で響いた直後、空中を漂う粒子が、ハルユキの眼前の一点に凝集した。白い小球は、たちまち複雑な形に変化する。

下に向かって鋭く尖る紡錘と、その上に浮く薄べったいリング。紡錘の両側からは、流線型の羽根が伸びる。全体が白く発光するそれは、あたかもニューロリンカーが視界に表示させるARアイコンのようだ。サイズは、上のリングから、紡錘の下端まで、わずか十五センチ程度。

「な……なんだ、これ……」

謎のアイコンに見入りながらそう呟くと、再び冷ややかな声が聞こえた。

「これではない。メタトロン様と呼びなさい」

「めた……とろん、さま……？」 つて……ええええ!?」

思わず叫んでしまっただけで、慌てて口を塞ぐ。背後の部屋を振り返り、エネミーの巨大なシ

ルエットがまだ停止しているのを確認すると、もう一度謎の発光体をまじまじと凝視する。

「メタトロンって、ミッドタウンで戦った、大天使メタトロン……の本体のヒト？ ずっと、

僕の背中にいたの？ 翼だけくれたんじゃないの……？」
驚きのあまり《様》を付け忘れたが、幸いそこは見逃してくれたようで、立体アイコンは淡

い光をランダムに明滅させながら答えた。

「言っただけです、いつとき力を貸すと。おまえに貸し与えた翼は私という存在の一部。ゆえに、我が本体と双方方向通信することも可能なのです。そのためには、こうして一時的に端末化する必要がありますが」

「……え、ええと……つまり、その……《メタトロン・ウィング》は、強化外装であると同時に、メタトロンそのものでもあって……完全に僕の持ち物になったってわけじゃない、ということ……？」

あたかも、超高難易度ミッションをクリアして手に入れた超高性能装備が、実は勝手に消えたり偉そうに喋ったりするイワクつきアイテムだった、というような——いや、ある意味そのものであるわけだが——気分を味わいつつ発したハルユキの言葉に、アイコンは至極そっけなく答えた。

「本来、たとえ一部だとしても、なんの代償もなく私がおまえたち小戦士の支配下に入るなど有り得ぬ話です。我ら《四聖》の力を手にするためには、まず第一形態を特定条件にて撃破し、続けて第二形態をも打倒しなくてはならない。私に関して言えば、かつてそれを為し得た戦士は一人として存在しません」

メタトロンとはミッドタウンでの戦闘中も何度か交信したが、言葉による意思疎通が完璧に成り立つことに今更ながら驚く。《四神》スザクやセイリユウも喋るには喋ったが、あちらが一方的な物言いだっただけに對して、メタトロンはハルユキの言葉を理解したうえで応答しているようだ。A.Iだとすれば相当に高度な……、などと感心しかけてから慌てて思考を引き戻し、語られた言葉のひとつを繰り返す。

「……特定条件……？」

眩しきながら、ハルユキは改めて、先の激戦を脳裏に思い描いた。

第一形態というのはきつと、球形の頭部と四枚の翼に長い胴体を持つ、ハルユキが《大天使メタトロン》として認識していた超巨大エネミーのことだろう。ならば、それを撃破したのちに現れた女性型エネミーが第二形態か。つまりハルユキたちは、そうと知らずして特定条件とやらをクリアした……と言うかクリアしてしまった、のたろうか。

その条件が何なのか訊ねようと口を開きかけてから、ようやく、のんびり会話をしている場合ではないと気付く。一刻も早くブラック・パイプに迫いつき、ニコを取り戻さねばならない。

「そうだ、ええと、今まで力を貸してくれたことにはすごく感謝してる。でも、まだ終わってないんだ」

ゆっくり明滅する立体アイコンには顔に相当するパーツがないので、代わりに輪っか部分を見詰めて懸命に語りかける。

「僕の大切な仲間が、悪い奴に攫われたんだ。ここはそいつのアジトか何かだと思うんだけど、エネミーと戦ってるあいだに見失っちゃって……だから、まずは天井を破って外に出たいんだ。頼むよメタトロン、ニコを……仲間を助けるまで、もうちょっとだけ僕を助けてくれ」

バーストリンカーではない——それどころか敵性存在たるエネミーの、しかも四神を除けば最上位であるメタトロン相手にどこまで伝わるかは解らなかったが、ハルユキはありったけの意志を込めた視線をアイコンに注ぎ続けた。やがて光の明滅が速まり、頭の中に、相変わらずそっけない声が響いた。

「私にはおまえたちのような善悪の概念はありませんし、小戦士どうしの諍いにも興味はありません」

「……………」

「ですが、いつとき力を貸すという約定を連えるつもりもない。私がこうして端末の姿を取ったのは、おまえが余りに愚かな行いに及ぼうとしていたからです」

「へっ？ 愚かな……行い？」

告げられた言葉に喜んでいいのかどうか迷いつつ、ハルユキは問い返した。アイコンは頷くように強く光ってから、冷やかな声で続けた。

「おまえは先ほど、拳でこの館の天井を破ろうとした。試みを実行に移せば、逆に傷を負っていたでしょう」

「ええっ!? でも……黄昏ステージの建物なら、今までに何度も壊して……」

「おまえの言う《タソガレステージ》とやらが、現在のフィールド・アトリビューションであるHL06のことならば、確かに通常構造物の強度は低い。しかしこの館は例外のようです。それは、先の中級ビーイングの攻撃を注意深く見ていれば明らかかなこと。だから愚かと言ったのです」

加速世界で叱られるのはもはや慣れっただが、よもやエネミーに叱られる日が来ようとは。焦燥の中にもそんな感慨を少しばかり味わいつつ、ハルユキは三連発された初耳単語の意味を推測しようとした。

最初のアトリビューションというのは確か属性という意味なので、無制限フィールドの属性を指す言葉だろう。ならば次のHL06は、黄昏ステージに与えられたコードナンバーか。最後のビーイングは、存在物というような意味だったはずだが——。

「えっと……ビーイングって、エネミーのこと……?」

「私は、おまえたちが用いるエネミーという呼称を好みません。以後控えるように」

「はっ、はい！……それで、明らかというのには、何が……」

「あのビーイングは、剣で幾度となく床や壁を打ち据えていましたが、傷ひとつつかなかった。H106の通常構造物ならば、激しく損傷していたはず」

「あつ……そ、そうか……」

ハルユキは愕然としながら振り向き、後ろの広間を覗き込んだ。メタトロンの指摘どおり、騎士型エネミーの剣が派手に火花を散らしていたはずの床面には、何の痕跡も残っていない。理由は今のところ不明だが、巨獣級相当のパワーによる剣撃でまったく無傷なのだから、たとえ四枚の翼の全推進力を乗せた打撃でも簡単には破れない——それどころか、衝撃に耐えられずに拳が砕けていた可能性が高い。

ついでに騎士型エネミーの様子を確かめておこうと視線を部屋奥へ向けると、巨体はいまだ床にうずくまっていたままだ。あの様子なら当分はおとなしくしてしてくれそうだと、ハルユキが小さく息を吐いた、まさにその瞬間。

エネミーの兜に刻まれたスリットの奥で、鮮やかな緋色の光が瞬いた。金属製の各パーツががちがちと鳴りながら、騎士はゆっくりと身を起こしていく。

「うげっ……」

低く呻き、一歩退いたハルユキと入れ替わるように、メタトロンの端末が前に出た。純白の光が凄まじい勢いで明滅し、騎士エネミーの鎧に反射する。ストロボ光によって何らかの情報

が伝達されたのか、エネミーはびたりと動きを止めた。

直後、身の丈三メートル以上の巨体が、わずかに十五センチの立体アイコンに気圧されたかの如く後ろを向いた。

そのまま重々しい足音を響かせて去っていくエネミーを、ハルユキはしばし呆然と眺めた。巨体が反対側の出口に消え、足音も聞こえなくなつてから、おそろおそろと訊ねる。

「あのエ……じゃなくてビーイング、もしかして、きみの命令で帰つてったの……？」

すると、アイコンはくるりと反転し、どこか呆れたような声を響かせた。

「自明のことを問うている時間はないはず。一刻も早く仲間の戦士を探さねばならないと言つたのはおまえでしょう」

「あ……う、うん。でも、壁も天井も壊せないんじや、どうやって探していいのか……」

「私が貸すと約したのは力であつて知恵ではない。どこに赴き、なにを為すべきかは、おまえ自身が決めねばなりません」

そう言われてしまえば、これ以上泣き言を並べることはできない。先刻、天井への無謀な突撃を止めてくれただけでもメタトロンの大いに感謝すべきだし、そもそも、その気になればミッドタウン・タワーでハルユキたちを瞬時に殲滅できたであろう神獣級エネミーが、こうして力を貸してくれていること自体が途轍もない僥倖なのだ。ネガティブな思考をこね回す暇があつたら、一秒でも早く動かねばならない。

ニコを助けるために、進むべき方向は……………

「——こっちだ！」

叫び、ハルユキは床を蹴った。通路の右でも、左でも、上でもなく、最初の部屋に駆け込む。広い床を突っ切り、せっかくメタトロンがノンアクティブ化してくれた騎士エネミーを追いかけるように、反対側の出口に飛び込む。

ブラック・パイスは、広間に二つある出口A、Bのうち、なぜAから出ていったのか。

その理由は、Bの出口から騎士型エネミーが接近してきたせいではないか。チームによってパイス自身は攻撃されないととしても、腕に抱えられたニコを、騎士はターゲットするはずだ。出口Bを使えなかったのは、そのせいではないだろうか。

だとすれば、エネミーが現れ、戻っていった方向こそがアジトの重要区画だと判断できる。パイスが遠回りして中央に向かったのなら、まだ追いつける可能性はある。

走るハルユキの傍らを、立体アイコンは無言で追跡してくる。先ほどの「いつとき力を貸す」という言葉の有効期間があと何分残っているのかは定かでないが、ニコを救出するまで続けてくれることを祈るしかない。

出口の先は、幸い反対側とは違って真っ直ぐな一本道になっていた。行く手に、ゆっくり歩く騎士エネミーの背中が見えるが、構わず走り続ける。がしやり、がしやりと床を踏む巨大な足のすぐ傍を駆け抜け、騎士を追い越す。予想はしていたが、追ってくる様子はない。

「念のため、知恵の足らぬおまえに警告しておきます」

ふわふわ飛翔するアイコンが、珍しく自分から声を発した。

「な、なに？」

「後方のビーイングを非政性化できたのは、忌まわしき銀冠による支配状態が解除されていたからです。この先、新たなビーイングと遭遇しても、おまえが銀冠を破壊するまで私はその個体に干渉できないことに留意しなさい」

今回の発言は、どうにかすぐに意味を理解できたので、ハルユキは走りながらこくこく頷いた。

「わ、解った。……でも、さっきのビーイングの冠を壊したのは、《メタトロン・ウィング》の羽根攻撃のおかげだからなあ……」

強化外装が端末化している状態だと銀冠を簡単には壊せないかも、という意を言外に込めてみたのだが、メタトロンの応答は例によってそっけなかった。

「ハネコウゲキではない。《エクテナ》と呼びなさい」

「……は、ハイ」

確かレーザー攻撃は《トリスアギオン》なるアビリティ名だったので、羽根攻撃にも固有の名称があるのだろう。どちらも単語の意味はまったく解らないが、とりあえず頷いておいて、ハルユキは視線を進行方向へと戻した。

一直線の通路は、数十メートル先でようやく次の部屋に繋がっているようだ。最初の部屋からは百メートル近く離れていて、つまりこのアジトは相当に巨大だということになる。無制限フィールドのどこかにある建築物を加速研究会が占拠しているのだろうが、これはどの面積を持つ施設となると相当に限られるのではないか。なのに、これまでアジトが発見されなかったのはなぜなのか。

研究会の中核部にかつてないほど深く迫っているはずなのに、むしろ不気味さだけがいや増していくような感覚に襲われ、ハルユキは走りながら左手で右腕を抱え込んだ。すぐ近くを浮遊する小さなアイコンの存在にどれほど勇気づけられているかを改めて意識すると同時に、我知らず呼びかけていた。

「……メタトロン」

少し間を置いて、

「……ありがとう」

と呟くと、アイコンは短く応じた。

「無意味な発言は控えなさい」

大天使の名を持つ神獣級エネミーが、だんだん厳しい女性教師に思えてきて、ハルユキは首を縮めつつ「ハイ」と答えた。ちょうどそこで次の部屋の入り口に到達し、足を止めて壁際から中を覗き込む。

最初の部屋とよく似た構造だが、今度は四方の壁全てに開口部が設けられている。ハルユキから見ると左右の戸口は新たな通路に繋がっているようだが、奥の戸口のすぐ先には上り階段が見える。広大な床面はがらんとしていて、新たなエネミーも、そしてブラック・パイスの姿もない。

パイスが遠回りしてこの部屋に向かうという推測は間違っていたのか、もう一度最初の部屋に戻って別の通路を進むべきか、という迷いがハルユキの脳裏を横切った、その刹那。

純白の床の一箇所で、何かがきらりと赤く光った。

吸い寄せられるように部屋に踏み込み、数歩進んでしゃがみ込む。伸ばした右手の指先で、光を反射したものをそっと摘み上げる。

それは、ごく小さな、真紅の固形物だった。この色を見間違えるはずがない。赤の王スカールレット・レインの、ひび割れた装甲から零れ落ちた欠片だ。パイスがほんの一、二分钟前にこの部屋を通過したという、確かな証。

「……ニコ……」

ハルユキが声を漏らしたのと同時に、真紅の欠片はオブジェクトとしての寿命を失い、微細な光を散らして消えた。右手を強く握り、顔を上げる。

パイスが姿を消した通路は、大きく迂回して、この部屋の左右出入り口へと繋がっているに違いない。つまり向かうべきは、奥の上り階段。中央通路を突っ切ったおかげで、遅れをかな

り取り戻せたはずだ。

「……待ってろ、ブラック・バイス！」

抑えた声で叫び、ハルユキは正面の階段へ向かおうとした。

しかし突如、行く手の床面が、大理石の純白からコールタールの漆黒へと変色した。慌てて急ブレーキを掛け、一歩飛び退く。

光沢のある黒に染まった床に、同心円状の波紋が広がる。その中央が、ぐうつと丸く膨らむ。後方の部屋と同じく、ここにも影回廊の出口が設定されていたらしい。ハルユキは反射的に身構え、攻撃態勢を取った。出現するのはエネミーか、あるいは研究会の新手パーストリンカーか――。

どぼん、という粘ついた水音を響かせ、人型のシルエツトが二つ続けて飛び出した。クロウと同程度のサイズからしてエネミーではない。それらは高々と跳ね上げられると、少し離れた床に折り重なって落下し、二種類の声を発した。

「むぐっ」

「あいたっ！」

少しばかり緊張感に欠けるその声には、聞き覚えがありすぎるほどであった。先制攻撃を仕掛けるべく握り締めていた拳を解き、ハルユキは両眼を見開きながら叫んだ。

「た、タク!? それに……チュ!?」

下敷きになっている青い大型アバターと、その上に乗る緑色の小型アバターが、揃ってハルユキに顔を向けた。

それらは、どう見ても、シアン・バイルとライム・ベルでしか有り得なかった。

ハルユキが後に聞かされた話によれば、ミッドタウン・タワー北側の公園に取り残された黒雪姫たちは、全員が次の行動に移るまでに少しの時間を要したらしい。

スカレット・レインを拉致したブラック・パイイスを追って飛翔する直前、ハルユキは言い残した。「バドさんは、アルゴンを追って下さい」「誰か、最寄りのポータルから離脱して、ニコのケーブルを抜いて」と。

まず飛び出したのはブラッド・レバードだった。彼方のビル屋上からレーザ攻撃でパイイスを援護した《四眼の分析者》アルゴン・アレイを追撃するべく、ピースト・モードの全力疾走でたちまち遠ざかる。

公園に残るのは、黒雪姫、楓子、あきら、謡、タクム、チユリの六人。しかし謡はアルゴンのレーザ四本に胸部を貫かれ、行動不能となって楓子に抱かれている。集合直後にチユリのシトロン・コールで体力ゲージは回復させたが、深手のショックから立ち直るにはもう少しかかるだろう。このメンバーを二手に分け、一隊はレバードの支援に、もう一隊はレインの加速を停止するためにポータルに向かわねばならない。

黒雪姫がそこまで考えた時、公園の北側で大規模な爆発音が轟いた。見れば、白亜の街並み

の一角から赤々とした火柱が立ち上っている。レバードが迎撃されたのかと緊迫する面々に、あきらが素早く囁いた。

「だいじょうぶ、あれはバドの技なの」

「そうか。ならば――」

視線を戻し、

「――バイル、ベル、二人でレバードを追ってくれ！」

黒雪姫が鋭く指示すると、タクムとチユリは揃って頷いた。

「任せて、先輩！」「了解です、マスター！」

打てば響く応答を残し、二人は北へと走り去っていく。その姿を見送ることなく、楓子とあきらに向けて続ける。

「レイカー、カレン、我々はタワーに向かう！」

最寄りのポータルが存在するのは、加速研究会の重要拠点たるミッドタウン・タワーの内部。最大の障害だった大天使メタトロンは排除したが、まだどんな罠や強敵が待ち受けているか解らない。

しかし、古参の二人は、すぐには顔がなかった。茜色のアイレンズに気遣わしげな光を浮かべたレイカーが、早口で囁く。

「ロータス、鴉さんを手助けしなくていいの？ あのままじゃ、仮にパイイスに追いつけても、

一対一の戦闘^{ゼロクワン}になってしまおうわ」

その言葉に、流水装甲の大部分を失ったままのあきらも同意を示す。しかし黒雪姫は、夕焼け空に残る一条の軌跡を見上げ、かぶりを振った。

「いいんだ。私はクロウを……私の《子》を信じる。それに、見ただろう、あの途轍もない飛行スピードだ。今の彼なら、仮に一対一でも、パイプに勝つ！」

きっぱりとそう言い切ると、今度は二人も深く頷いた。少し遅れて、楓子に抱かれた謡が、か細い声を発した。

「その……とおり、です。大切な、誰かのために戦うクーさんは……無敵、なのです」

「メイ！ 大丈夫なの？！」

楓子の問いかけに、小柄な少女は気丈に答える。

「もう平気、です。レインさんを、みすみす奪われてしまったのは……アルゴンさんの攻撃に気付かなかった、私の責任です。いつまでも、抱っこされては、いられないのです」

言い終えると、謡は自ら地面に降り立った。痛覚が二倍に拡張される無制限フィールドで、超高温のレーザーを四発同時に被弾したタメージの影響はまだ残っているだろうが、足取りはそれを感じさせない。

かかる事柄の責任が誰ひとりにあろうはずもないが、黒雪姫は謡の覚悟を受け止めるべく、敢えて頷いた。

「まだ戦えるな、メイデン」

「当然なのです！」

「よし。では、我々四人はこれよりミッドタウン・タワーに突入する。たしかポータル^{ポータル}の位置は……」

黒雪姫の言葉を、すかさずあきらが補足した。

「昔と変わってなければ、四十五階だったはずなの」

四人同時に見上げた白亜の巨塔は、屋上から地上階近くまで垂直に切り裂かれている。シルバー・クロウの《光学誘導》アビリティによって反射されたメタトロン^{メタトロン}の超高威力レーザーがビルを真っ二つに分断したのだ。幅二メートルほどの裂け目に眼を凝らしてもポータルの青い光は見えないが、あの隙間から直接四十五階に侵入できれば、所要時間を大幅に短縮できる。

「……二百メートルと少し、といったところか。レイカー……」

黒雪姫が振り向くと、楓子は小さくかぶりを振った。

「残念だけど、わたしのゲイルススラスタージャ、ロータスたち三人をあの高さまで持ち上げるのは無理ね。わたしともう一人だけが先行するか、それとも四人で飛べる限りの高さまで飛ぶか……」

「ン……」

一度瞬きをする間に、黒雪姫は決断した。

「全員一緒に行こう。強剣切断は、レイン救出の最終手段だ。万が一にも失敗は許されない。我々が階段を上るための時間は、きつとクロウが稼いでくれる」

「そうね。わたしも、今の全力を振り絞って飛ぶわ」

そう宣言すると、楓子は大きく両手を広げた。誰か体に抱きつき、右腕にあきらが、左腕に黒雪姫が掴まる。背中に装着されたブースター全体が、薄青い輝きを帯びる。甲高い駆動音が生まれ、液体金属状のロングヘアがあたかも翼のような形に広がる。

「……行きますす！」

叫ぶと同時に、楓子は強く地面を蹴った。

直後、ゲイルスラスターの噴出口から青白い炎が迸り、四人は巨塔の上層部目指してロケットの如く飛翔し始めた。

——絶対。絶対。

——絶対に、守る。

深紅の疾風となつて駆けるブラッド・レバード——掛居美早は、胸裏でその言葉だけをひた

すらに唱え続けた。

加速研究会の攻撃を、まったく予想していなかったわけではない。無制限フィールドで集団行動中の赤のレギオンが、黒の王ブラック・ロータスに化したデュエルバターの駆る神獣級エネミーに奇襲されたのは、ほんの二日前のことだ。

偽ロータスの正体は、加速研究会副会長を名乗るブラック・バイス。奇襲の目的は、プロミネンスとスカレット・レインの偵察。それらの情報は、昨日のうちに赤の王から伝えられていた。バイスが黒の王の姿を模していた理由はいまひとつ定かでないが、無期限停戦中の二レギオンを反目させることではないかと、美早とニコは推測した。事実、土曜日の領土戦で、プロミネンスのメンバー三名が独断で杉並戦域に攻め込んでいる。

しかし、事ここに至れば、狙いはまったく逆だったのかとも思えてくる。

黒の王に化けて赤の王を襲撃し、プロミネンスからの報復を誘発させれば、事態収拾のために両レギオン間でトップレベルの会談が行われる。そしてそのタイミングで、黒のレギオンのメンバーか、あるいは深い関係のあるバーストリンカー——たとえばアッシュ・ローラーのようないがISSキットに感染すれば、義に厚い赤の王は協力を申し出るだろう。

実際、メタトロンの前に一戦交えたマゼンタ・シザーは、アッシュ・ローラーを狙った理由を問われて「いろいろしがらみがある」からだと答えた。そのしがらみというのが、加速研究会の指示であった可能性は高い。全ては、無制限フィールドで、赤の王スカレット・レイン

を拉致するための布石。

計画と言うには、不確定要素が余りにも大きすぎる。しかし、恐らくはそれが加速研究会のスタイルなのだ。加速世界に災いの種を次から次へと撒き散らし、偶然実った果实を刈り取るレインの《親》であるチェリー・ルークが災禍の鎧に取り憑かれた時も、アキハバラBGがラスト・ジグソーに蹂躞された時も、そしてシルバー・クロウの翼がダスク・ティカーに奪われた時も、被害は何倍も大きなものになり得た。いや、美早が知らないだけで、研究会の企みが引き起こした巨大な悲劇が、すでに数限りなく存在するのかもしれない。

——でも、今は、今だけは絶対に、奴らの好きにはさせない。

レインを閉じ込めたまま影に沈んでしまったブラック・バイスを追跡する力は、残念ながら美早にはない。だがそちらは、成長著しいシルバー・クロウが、音速すら超えようかという凄まじい飛行速度で追っつけてくれた。美早の役目は、バイスを援護したアルゴン・アレイを捕らえること。クロウがそれを指示したのは、赤の王との人質交換を考えてのことだろう。

アルゴンのレーザが発射されたビルは、ミッドタウン・タワーから三百メートル以上離れたいた。エリア境界に障壁のある通常対戦フィールドですら、そう簡単には詰められない距離だ。ましてや、ここは境界線など存在しない無制限中立フィールド。だが。

——逃がさない！

という意志を込めた咆哮を豹のあぎとから進らせ、美早は思い切り地面を蹴った。

目指すビル屋上からアルゴンの姿が消えてから、すでに十秒以上が経過している。ブラック・バイスとの合流だけは何としても阻止しなくてはならない。時速二百キロでの走行を可能とするアビリティ《ファーストブラッド》が発動しているが、まだ足りない。

今こそ、使うべき時だ。長い間封印してきた、ブラッド・レバード最強最速のレベル5必殺技を。

——照準。前方二百メートル、五階建てビルに狙いを定める。

——装填。高くジャンプし、手足を折り畳む。周囲に、赤い光のチューブすなわち砲身が形成される。

そして——点火。

「ブラッドシエッド・カノン」!!

技名発声と同時に残り必殺技グージがほぼ全消費され、天地を揺るがすような爆音が轟いた。美早の体は、半透明の砲身から一個の砲弾となって発射された。視界が放射状に溶け、ホワイトアウトする。コンマ一秒後、全身がばらばらになりそうな衝撃に揺さぶられ、美早は牙を強く食い縛った。

体力ゲージが瞬時に三割以上も消滅し、装甲があちこちでひび割れる。回復した視界に映し出されたのは、オレンジ色の爆炎を背景に飛散する無数の白い破片——美早が狙ったビル全体が《砲撃》によって粉々に吹き飛ばされた。

プロミネンス副長ブラッド・レバードは、加速世界の法則に反する《赤の純近接型》として知られている。アバター色はかなり彩度の高い遠隔の赤であるにもかかわらず、遠距離攻撃技をまったく使わないからだ。《血まみれ仔猫》という二つ名は、鋭い牙と爪で敵を引き裂く、青系アバターも勝負に負けない戦いぶりから与えられたものだ、赤のレギオンのメンバーですらほぼ全員が信じている。

だが、本当は違うのだ。血まみれな理由は、敵の返り血を浴びたからではなく、自爆にも等しい必殺技《ブラッドシエッド・カノン》で自分の装甲を割り砕くから。その威力は、命中すればたいていのデュエルアバターを即死させるが、外して建物なり地面なりに突っ込めば自分が死ぬ。今回、大きめのビルに着弾しておきながら体力ゲージが三割減で済んだのは、建物が脆い黄昏ステージだったからだ。大砲のイメージから、アバター名の Leopard を、実在の戦車の名前であるレオパルドと読まれたこともあった。

しかし美早は、《ブラッドシエッド・カノン》をわずかな期間使っただけで封印し、以後はひたすら近接型として戦ってきた。理由は、主に二つ。四神セイリウウのレベルドレインに耐えられるだけの余剰ポイントを経営のために、当たれば勝利、外せば敗北というギャンブル要素の高い技は使えなかったこと。そして、不確実な力に頼っているうちは、ゲイルスラスタという似て非なる力を完璧に操るスカイ・レイカーには追いつけないと感じていた。けれど、今は精妙レベル8に到達した現在も、修練はまだまだ足りていないと感じている。けれど、今は精妙

な照準など必要ないし、余力を残している場合でもない。全ての力と手段を総動員して、アルゴン・アレイを捉えるのだ。

その決意だけを胸に燃やしながら、美早は自分が引き起こした大爆発の中心点で、視線を右から左へと巡らせた。

そして、飛び散る膨大な瓦礫の向こうに、見た。百メートル先の暗がりできらりと瞬いた、紫の光を。間違いなく、アルゴンの装甲が生み出した反射光だ。

——もう一度！

空中で手足を縮め、アバターを砲弾の形に固めるや否や技名を叫ぶ。《ブラッドシエッド・カノン》は必殺技ゲージを激しく消費するが、爆発によってビルを丸ごと吹き飛ばせば大量のオブジェクト破壊ボーナスを得られる。体力ゲージの続く限り、連続して発動することも可能なのだ。

轟音とともに斜め下へと《発射》された美早は、瞬時に込み入った路地へと突入し、小さな建物を二つ貫通してから着弾した。引き起こされた大爆発が、周囲を瓦礫の海へと変える。体力ゲージが更に削られて五割を下回るが、今度は敵も無傷ではなかったはずだ。

空中でくると一回転し、地面に降り立つと同時に視界が戻った。見開いた両眼が捉えたのは、前方で両腕をクロスさせ、爆風への防壁姿勢を取るアルゴンの姿だった。

「グアウツ!!」

豹のあざとから怒りの咆哮を迸らせ、美早は跳躍した。

アルゴン・アレイは、(四眼の分析者)の二つ名が示すとおり、情報収集タイプのデュエルアバターだ。大型アイレンズが持つ透視力で他のアバターのステータスからストレージまでもをスキャンするのが主たる能力で、自身の戦闘力は低い——と、六大レギオンの幹部ですら思っているはずだ。

しかしそれは、加速研究会の幹部であることと同様の欺瞞情報だった。両眼と腕子、合計四つの大型レンズから発射されるのは無害な透視光線だけではない。メタルカラーの装甲すらも瞬時に穿つ、超高温にして超高速のレーザーを撃つこともできるのだ。

クロスガードの奥に一つだけ露出したレンズが、鮮やかな紫に輝いた。今度は夕陽の反射ではなく、レーザー発射の前兆だ。瞬時に照度を増した光が一点に凝集し、十字の輝線を煌めかせる。この距離での回避は不可能。

だが美早は、レーザーに左肩を貫かれる激痛を無視して、そのままアルゴンに飛びかかった。体力ゲージが更に削り取られ、赤の危険域に突入するものの、牙に敵を捕らえることを最優先する。まず体当たりでアルゴンの体勢を崩し、バックを取ってから、左の肩口に思い切り噛み付く。

四本の牙が薄い装甲を穿ち、赤いダメージ・エフェクトを散らした。

「あたたっ！ ちよお、痛いって！」

アルゴンはそんな声を発しながら両手で美早を引き剥がそうとするが、非近接型にパワー負けするほど豹のあざとはヤワではない。牙が抜けないと見るや、分析者はレーザーを撃つべく顔を限界まで左に向けたが、レンズはぎりぎりのところで美早を射角に捉え切れない。

赤い光の脈動に合わせて、残りわずかな美早の体力ゲージが回復し始める。ビーストモードの時だけ使えるアビリティ、《奪活咬》の効果だ。視界には表示されないが、同じベースでアルゴンの体力は減少しているはずだ。後ろからの噛み付き攻撃は、美早の必勝パターン。この状況から脱出できたデュエルアバターはごく少ない。

「イタタタ……もオ、どこが楽な仕事やつちうねん！ 一発撃って逃げるだけとかゆうて、その逃げるどころが難儀すぎるやないの！」

という糾弾は、美早ではなくブラック・パイイスに向けたものだろう。そのパイイスはとっくにミッドタウン周辺から離脱してしまったようだが、後を追ったシルバー・クロウの気配も消えたので、追跡には成功した——と信じた。

クロウがそのままパイイスを倒し、赤の王を取り戻してくれるのが最良の結果だが、まだレベル5の彼にそこまでの重責は背負わせられない。もちろん必ず負けると悲観してはいないが、美早の役目は交換用の人質としてアルゴンをきっちり確保すること。そのためには、ひとまずこのままゲージを削り切る。美早はアクア・カレント救出作戦の直後にアルゴンと同じレベル8に上昇しているので、たとえ倒しても奪えるポイントには10だけだが、幽霊状態で六十分間こ

の座標に縛り付けられるメリットは大きい。

仮借なき決意のもと、美早は華奢な首筋にありつただけの力で噛み付き続けた。無制限フィールドで、急に連続ダメージを受けるアルゴンは凄まじい激痛を感じているはずだ。しかし、これまで加速研究会の陰謀の犠牲となったバーストリンカーたちの痛み、苦しみの総量はこんなものではない。

「あ、やば……くらくらししてきたわ。うーん、これは、ちよつとシャレに……ならんなあ。せめて噛むトコ変えて……て言うても、無駄やよね」

人を見た口調は相変わらずだが、さすがに途切れがちな声でアルゴンが言った。喋れない美早は、低い唸り声で応じた。体力ゲージは早くも七割近くまで回復し、この状況が続けば、アルゴンは間もなく死亡するはずだ。

「はー、しやーない、か。仔細ちゃんも、ど派手な隠し技、見せてくれたもんねえ。ウチも……出し惜しみしてる場合や、なさそやね」

「……………」

アルゴンの言葉に、美早は神経を張り詰めさせた。レーザーの射界に美早を捉えられないこの状況では、逆転する手段は残っていないはず。単なるブラフか……それとも、まだ何かあるのか。

その時、美早の背中に、ちりりと鋭い戦慄が走った。

《靈活咬》で体力ゲージを全回復させるよりも、即座にとどめを刺すことを優先するべき。本能的にそう判断した美早は、鉤爪でアルゴンの無防備な背中を一気に引き裂こうと、右手を持ち上げた。

だが、次の瞬間――。

地面に伏せる華奢なアバターの全身から、毒々しいほどに鮮やかなすみ色の輝きが迸った。必殺技ではない。これは過剰光、心意システム発動の証――。

《無限配列》

囁くような技名発声が耳に届いた時にはもう、イマジネーションの具現化は完了していた。発動に要した時間は、わずか〇・五秒。対応策を考える余裕はまったく与えられず、美早は本能的にアルゴンの首筋から牙を外し、大きく飛び退こうとした。

だが、遅かった。
《分析者》の体を包む全ての装甲の表面に、小型のレンズが生成される。整然と並ぶ無数の眼が、十字の光芒を宿らせ――。

びゅあつ。

と空気を震わせて、ありとあらゆる方向に、極細のレーザーが発射された。それらの六十パーセントは、地面に積み重なる瓦礫や先の爆発を免れた建物に黒い穴を穿ち、三十五パーセントは空へと放射状に広がり――そして残る五パーセントが、美早の体の各所を貫いた。

「ッ……………」

まず軽い衝撃、続いて強烈な熱感、最後に目も眩むような激痛が訪れ、美早はもんどり打って地面に倒れた。せっかく回復しかけた体力ゲージがまたしてもレッドゾーンに突入したが、正確な残量を確認する余裕もない。豹の四肢で懸命に地面を掻き、立ち上がろうとする。もう一度同じ攻撃を喰らったら、確実に死ぬ。

だが、連射可能な心意技ではないのか、それとも余裕を見せているのか、アルゴン・アレイはゆらりと立ち上がると言った。

「はあー、痛かったなあ。うちも長いことBBブレイヤーやつとるけど、エネミーやのうてデユエルアバターに噛み殺されそうになったんは初めてやわ」

振り向き、美早を眺めるアルゴンの装甲には、まだ膨大な数の《眼》が生成されたままだ。全身を包む仄かな透射光も消えていない。発動のスピード、威力、射程、持続時間、全てが恐るべき高みに達している。同じ第四象限——《範囲を対象とする破壊の心意》に属する技でも、かつてヘルメス・コード縦走レースで猛威を振るったラスト・ジグソーの《錆びる秩序》を、はば全ての面で凌駕する。

美早とて、心意技の心得がないわけではない。だがそれは、あくまで敵の心意攻撃から身を守るために習得したもので、正直なところ、純粹な破壊力比べではアルゴンの技に遠く及ばないだろう。実際に技をぶつけ合う前からそう断言できてしまうほど、アルゴンの《無限配列》



は強力すぎるのだ。いっそ、異常と表現すべきレベルで。

全ての心意技は、それを使う者の《心の傷》をエネルギー源としている。傷とは欠落であり、飢えであり、絶望だ。ゆえに、たとえその傷から希望を生み出し、第一・第二象限の力つまり《正の心意》として昇華させても、実際の技には偏りが現れる。威力を求めれば速さが、射程を求めれば正確さが、広さを求めれば持久力が失われ、万能の心意技などというのは原理的に有り得ないのだ。

なのに、アルゴン・アレイの使った技には、いかなる欠点も存在しない。

そうなるように、膨大な時間を費やして技を磨いたのか……それとも……………。

考えを巡らせながら、傷ついた体でどうにか立ち上がった美早に向けて、アルゴンが思わぬ言葉を投げ掛けた。

「なあ、仔猫ちゃん。あんた、考えたことある？ どうして、ほとんどの生き物は、眼を二つしか持ってへんのか」

約十時間前、シルバー・クロウが飛行アビリティで黒雪姫、あきら、チュリ、タクムの四人を旧東京タワーの天辺まで運んだ時、彼はあまりスピードを出さずに必殺技ゲージを節約しながら上昇した。

しかし、今回同じように黒雪姫とあきら、謎の三人をミッドタウン・タワー上部まで運ぶ任務を与えられた楓子は、背中のゲイルスラストを最初からフルパワーで燃焼させた。燃費を追求するよりも、一刻を争う状況を優先したのである。その判断は正しいと黒雪姫も思うが、ミサイルじみたスピードでビルの上を駆け抜けて突進されれば、うわずった声を漏らさずにいられない。

「お、おい、レイカー！ これ本当に……」

すかさず、「止まれるの」とあきら。続けて、「ですか？」と語。

それに対して楓子が、

「まあ、なんとかなるでしょう」

とのんびり答えた時にはもう、白亜の壁は目の前に迫っている。このまま外壁に頭から突き刺さるつもりじゃあるまいな、と全身を強張らせた瞬間、ブースターの噴射が終了した。四人は慣性のままに上昇し続けるが、勢いはみるみる失われていく。今度は逆に落下を心配したくなるが、楓子の目測は正確だった。ちょうど放物線の頂点に達したそのタイミングで、四人はミッドタウン・タワーの外壁に刻まれた、幅二メートルの隙間に吸い込まれた。

「ハッ！」

ビル内に侵入した瞬間、黒雪姫は左手を繰り出し、鋭い剣先で外壁の切断面を貫いた。とり

あえず落下は止まったが、今度は四人分の重量が黒雪姫の片腕にのし掛かってくる。

「ロータス、あと三秒がまん！」

叫んだ楓子が、右腕のあきらを高々と持ち上げた。アクア・カレントは水流装甲の大部分を喪失したままだがそのぶん身軽になったようで、レーザーに焼き切られた床材の端に掴まると難なくその上に飛び乗る。すかさず両手を下に伸ばして楓子から詠を受け取り、引っ張り上げる。

続いて楓子もあきらの手を借りてフロアによじ登り、三人の重みから解放された黒雪姫は、壁に刺さる切っ先を支点にして自分の体を放り上げた。空中で一回転し、仲間たちの隣に降り立つ。

「五秒かかったぞ」

とりあえず時間超過を指摘してみたが、楓子は、

「こっちの五秒は、現実世界ならたつたの○・○○五秒じゃない。気にしない気にしない」と解るような解らないような理屈を口にする。と速やかに話題を変えた。

「それはそうと、ここは何階なのかしら？」

問われて、あきらたちと一緒に周囲を見回してみる。薄暗い空間はかなり広く、大理石の長テーブルが等間隔に設置されている。

「レストラン……ではなく、オフィスのようだ。五十四階建てのミッドタウン・タワーの、

だいたい三分の二の高さに突っ込んだ気がしたから、三十五階あたりのオフィスフロアだと思うが……」

黒雪姫がそう答えると、あきらと詠も同意を示して頷いた。楓子はちらりと天井を見上げ、アイレンズを鋭く細めた。

「ということは、目標の四十五階までは十フロアね。それくらいなら、上り階段を探すより、メタトロン製のレーザーが作った裂け目をジャンプで登っていったほうが早そうね」

「確かにそうかもしれないが、仮に上で何者かが待ち伏せていた場合、裂け目から現れる我々は格好の的になってしまうな……」

「なら、裂け目から少し離れたところで天井に穴を開けて、範囲攻撃を叩き込んでから突入しましょう。幸い、どんな攻撃をしようとポータルは破壊不可能でよし」

「そ、そうだな。しかし……レイカー、お前は昔からそんなに突撃型だったかな」

旧ネガ・ネビュラスでもサブリーダーを務めていた楓子と、領土戦で肩を並べて戦った経歴は、実は黒雪姫にはさほど多くない。ほぼ毎週、複数エリアを同時防衛しなければならなかった都合上、遠うチームを指揮することが多かったからだ。

黒雪姫の疑問に楓子はたおやかに微笑みだけだったが、領土戦で常にコンビを組んでいた詠が両肩をふるりと震わせて答えた。

「突撃しない人に、ICBMなんていう二つ名はつかないと思うのです」

「なるほど、納得した。——それでは今回も、目標地点まで突撃と行くか。メイデン、手伝ってくれ」

黒雪姫が天井を見上げながら言うと、巫女アバターは打って変わって勢いよく頷いた。「了解なのです！」

この四人の中では、当然ながらアーダー・メイデンが最大の遠距離攻撃力を持つが、彼女の得意な炎火攻撃は、貫通力では物理攻撃に劣る。天井を一枚貫くたびに威力が水平方向に拡散してしまい、四十五階までは届かないかもしれない。もちろん二度三度と撃ち続けられれば届くだろうが、それは必殺技ゲージの浪費というものだ。

そこで黒雪姫は、まず自分が文字通りの突破口を開けるべく、右手の剣を垂直に構えた。隣で諺が長弓に火矢をつがえ、同じく天井を狙う。楓子とあきらが数歩下がるのを確認してから、イマジネーションを集中させる。

「行くぞっ……オーバードライブ！ モード・レッド！」

叫ぶと、ブラック・ロータスの全身に走る細いモールドラインが、鮮やかな真紅に輝いた。アバターの能力バランスが遠隔型に変化した証だ。赤い光は右手の剣にも宿り、切っ先に凝集して甲高い振動音を放つ。

「——《奪命撃》——」

技名発声とともに、右手を猛然と突き上げる。

遠か昔に師から伝授された心意技は、分厚い大理石の天井を次々と穿ち、硬質の衝撃音を立て続けに響かせた。ミッドタウン・タワーはフロアの高さが約四・五メートルあるので、十階上までは四十五メートル。射程的にはギリギリだが、届かせねばならない。ありったけのイメージ力を振り絞り、真紅の槍を伸ばし続ける。天井をぶち抜く手応えが、八、九——十回を数えた瞬間、後ろに倒れ込むように下がる。

ふらつく黒雪姫の両肩を、楓子がすかさず支えた。ほぼ同時に、諺が天井に穿たれた穴めがけて、長弓をいっばいに引き絞った。

「《フレイム・ボルトクス》——」

凜と響いた技名は、心意技ではなく必殺技だが、迫力は《奪命撃》以上だ。弓につがえられた火矢が瞬時に巨大化し、矢尻が猛然と回転し始める。紅蓮のトルネードと化した矢が、熱と光を振りまきながら発射される。

黒雪姫の剣が天井に穿った直径五センチほどの穴を、炎の螺旋は倍近くまで割り広げながら飛翔した。メイデンがセイリウ戦で使った必殺技《フレイム・トーレンツ》が範囲攻撃に特化した技なら、《フレイム・ボルトクス》は直進性を追求した技だ。たとえ大海ステージの海中でも、水を蒸発させながら数十メートルも突き進むほどの威力を持つ。実体なき炎ゆえに岩や金属の壁だけは苦手だが、ほんの小さな穴さえ開いていればそこから貫通し、奥深くまで入り込んで——。

ぐわんっ！という轟音が、遥か頭上で聞こえた。奪命撃の軌道をトレースした炎の螺旋が、四十五階まで到達し、爆発したのだ。裂け目の周囲で何者かが待ち伏せていたとしても、背後からの範囲攻撃で、即死するか深手を負ったはずだ。

「メイデン、ポイント加算はあったか?」

黒雪姫がさかさず確認すると、謡は長弓を真上に構えたままかぶりを振った。

「いえ……ですが、手応えアリ、なのです!」

「よし、一気に突入するぞ! みんな、続け!」

叫び、黒雪姫は大穴の真下まで移動すると、全力でジャンプした。特別な跳躍能力はなくとも、軽量級のハイランカーならば、アバターの基礎能力だけで建物ワンフロアぶんの高さを跳ぶことは可能だ。

まだ側面が真つ赤に溶けたままの大穴をぐぐり抜け、上階の床に着地すると、楓子、あきら、謡も順番に穴から飛び出してくる。四人は足を止めずに跳躍を続け、ミッドタウン・タワーに穿たれた即席のビットを垂直上昇していく。

目指す四十五階が近づくにつれ、黒雪姫は、アバターの装甲表面にちりちりと帯電するような感覚をおぼえていた。

四神・セイリユウのテリトリに突入した時、あるいは大天使メタトロンの本体と対峙した時とは似て非なる戦慄。システム上の戦闘力とはまた別の、どす黒く濃縮された悪意を滴らせる

何者かが行く手で息を潜めている、という確たる予感。

しかし、たとえいかなる脅威が待ち受けているようにとも、引き下がるという選択は有り得ない。ブラック・バイスに拉致されてしまった赤の王スカーレット・レイン——ニコは、スカイ・レイカーの《子》でありシルバー・クロウのライバルでもあるアッシュ・ローラーを助けんとする黒のレギオンに、義心から協力してくれたのだ。そして何より、ニコはもう、黒雪姫にとっても大切な友達だ。

二年と十ヶ月前、黒雪姫は、あらゆる絆に背を向けてネガ・ネビュラスが崩壊するに任せた。こうして《四元素》のうち三人まではレギオンに戻ってきてくれたが、当時のメンバーの大多数は今も移並戦域に姿を現さない。

それも当然だろう、黒雪姫は彼らを二度にわたって裏切ったのだから。

一度目は、激情に任せて初代赤の王レッド・ライダーの首を落とし、ネガ・ネビュラスを他の六大レギオンと完全に敵対させた時。

そして二度目は、惨憺たる敗走に終わった帝城攻略戦のあと、レギオンを立て直そうともせずに加速世界から逃げ去った時だ。

黒雪姫に強い意志さえあれば、あの状況からもネガ・ネビュラスを糾合し、当時の本拠たる渋谷第一エリアだけでもどうにか維持しつつアダー・メイデン、アクア・カレント、そしてグラフィット・エッジの救出に挑むことも可能だったはずだ。しかし黒雪姫はそうしなかった。

四神のテリトリリーから脱出する過程で大量のポイントを失ったメンバーたちを見捨てて、二年以上もクロード・ネットに閉じこもった。

ひたすら己の傷を舐めるだけの停滞した時間から黒雪姫を引っ張り出してくれたのは、白銀の翼を持つ小さな猫だった。《子》であるはずの彼に、黒雪姫は何度となく励まされ、導かれ、教えられた。

もう、同じ過ちは繰り返さない。二度と仲間を……友を見捨てるような真似はしない。ニコは取り戻す。絶対に。

「……ロータス、次が四十五階よ!」

九度目のジャンプの直後、鋭く囁いた楓子に、黒雪姫は「解った」と応じた。いったん足を停め、最後尾の諷が追いつくまで待って早口で指示する。

「レイカー、カレン、メイデン、我々が最優先すべき目標はポータルから現実に戻ってレインのケーブルを抜くことだ。最初にポータルに接触した者がそのまま離脱、残る三人は第二目標……ISSキット本体を破壊するために搜索を継続する。邪魔する者は容赦せず倒せ、心意技の使用も躊躇うな!」

三人が力強く頷き、黒雪姫も頷き返した。ようやく断面が冷えてきた天井の大穴を見上げ、小声で叫ぶ。

「——行くぞ!」

腰を落とし、右足の先端で大理石の床に鋭い火花を散らして、黒雪姫は十度目のジャンプを実行した。

「生き物の眼が……二つな、理由……?」

アルゴン・アレイの唐突な問いかけの言葉を、美早は小声で繰り返した。

こんなところで生物学の問答をしている場合ではない。しかし、アルゴンの恐るべき全方位型心意技《無限配列》に体の各所を射貫かれた激痛は今なお仮想の神経系を苛み、しばらくはまともに動けそうもない。それ以前に、もう一度同じ技を使われたら、残りわずかな体力ゲージは瞬時に消し飛んでしまう。

美早にとどめを刺さず、無為な会話をしようとするアルゴンの意図は不明だ。だが今は——少なくとも痛みがもう少し薄れるまでは、敵の誘いに乗るしかない。

「……進化の過程で、最適化された結果」

最も常識的と思える答えを口にする、アルゴンはそれを予想していたのか、大型ゴーグルの下でにんまり笑った。

「ま、そろそろなんやけどな。……知ってる? ウチら脊椎動物のご先祖さんはなあ、水中中

細い両腕を広げ、軽く肩をすくめて、アルゴンは答えた。
「単なる時間稼ぎや。——《ラズル・ダズル》」

技名の前半が発せられた時にはもう、美早は両眼をしつかり閉じ、猛然と地を蹴っていた。アルゴン・アレイの、この必殺技については黒のレギオンから情報提供されている。頭の四連レンズから強烈な光を放ち、敵の眼を眩ませる幻惑技。光そのものに攻撃力はない。そうと解つていけば、強襲の好機だ。

半秒前までアルゴンが存在していた位置めがけて、右手を振り下ろす。ナイフのように鋭い鉤爪が、硬質の装甲を掠める。

浅い！

眼をつぶったまま、続けて左手を繰り出す。時間稼ぎをした挙げ句に幻惑系の必殺技を使つたということは、アルゴンの心意技《無限配列》は連続発射できないに違いない。必殺技グーじを消費しない心意技を連発できない理由は不明だが、今はその事実だけで充分。美早同様、アルゴンの体力グーじも残り少ないので、あと一咬みすれば倒せる。

だが、左手もまた、敵の装甲を浅く抉っただけだった。

アルゴンの気配が遠ざかる。ここで逃がすわけにはいかない。やむなく臉を持ち上げると、弱まりつつあるとは言え、閃光グレネードもかくやという白光が両眼を突き刺す。光の奥で、薄いグレーの影が翻る。

「グアウッ!!」

雄叫びとともに、美早は思い切り跳躍した。

だが、両手の爪が捉えたのは、平らな大理石だった。美早が見たのは、建物の壁に映るアルゴンの影だったらしい。脆い壁はブラッド・レパードの突撃に耐えられずに崩壊し、美早は建物の中へ突っ込んでしまう。

「また今度、さっきの話の続きしよな、仔猫ちゃん」

笑いを含んだ声が、急速に遠ざかっていく。

逃がすわけにはいかない。アルゴンを確保し、加速研究会に対する交渉材料とするのは美早の役目だ。シルバー・クロウは、ブラッド・レパードならそれができると信じたからこそ、後を託して単身ブラック・バイスを追ったのだ。

一瞬とはいえ《ラズル・ダズル》の閃光を見てしまった両眼は、まだ完全には回復していない。だが、先ほどの会話でアルゴン自身が口にしていたように、視覚だけが感覚ではない。

美早は、豹の鋭敏な耳でかすかな足音を、四肢の肉球で地面の振動を捉えた。アルゴンは、北に向かつて走っていくようだ。クロウがバイスを追って飛んだ方向とは異なる。目的地は解らないが、どこに向かつていようと追うだけだ。

再び壁を突き破って道路に出ると、美早は姿勢を低めて疾駆した。白飛びしたままの視界では、道路際の柵や崩れかけた柱のような小さい障害物は見分けられないが、頭で粉砕しながら

突き進む。赤糸ゆえに装甲はさほど厚くないものの、レベル8になったことで基礎的な防御力と体力がかなり上昇している。6のままでいたら、アルゴンの全方位レーザーで即死していただろう。

美早が長い間レベルアップをせずにいたのは、氷見あきら／アクア・カレントを四神セイリユウの果から救出するためだ。カレントは美早の《親》ではあるが、同時にネガ・ネビュラスの幹部集団《四元素》の一人でもある。

先代の赤の王レッド・ライダーを全損させた黒の王を恨んでいる者は、現在のプロミネンスにも多くはないが在籍（ざいしき）していて——昨日の領土戦で杉並（すぎなみ）に攻め込んだブレイズ・ハートたちはその代表格だ——、赤のレギオンの幹部集団《三獣士》に属する美早が、カレントのために上げられるレベルを上げないのは、レギオンに対する裏切りとしか言えない。

しかし赤の王スカレット・レインも、三獣士の他の二人も美早のわがままを許してくれた。そして、セイリユウの《レベルドレイン》を受けて消滅するはずだった美早の蓄積バースト・ポイントを取り戻してくれたのは、黒のレギオンの《時計の魔女》ライム・ベルだ。多くの人たちに支えられ、助けられ、ついに到達したレベル8の全能力を、ここで限界まで振り絞（しぼ）らなくてどうする。

「グルオオオオオッ!!」

疾走（しっそう）しながら、美早は一応（いっおう）これも半獣（はんじゅう）アバターの特典である野生の咆哮（けいこう）を轟（とどろ）かせた。白く漆（しつ）

む視界の中央に、紫色のシルエットが浮かぶ。アルゴンに迫（お）いついたら、もう無駄（むだ）話はしない。瞬時（しゅんじ）に降り、死（し）マーカーへと変（へ）えるのみ。

後ろの足にぐっと力を溜（ため）め、思い切り跳躍（はつやく）した時、ようやく幻惑（げんわく）技（ぎ）の効果が切れた。視力を取り戻した両眼（りょうがん）が、立ち止まり、振り向くアルゴンの姿（すがた）を捉（とら）えた。全身に生成（せいせい）されていたレンズ群（ぐん）は、いつの間にか消滅（しょうめつ）している。逃走（たうそう）を諦（あきら）めたのか……いや、違う。

細身のアバターが、みるみる地面に沈み込んでいく。

アルゴンの足許（あしもと）には、大きな建物の影が伸びている。よくよく見ると、アルゴンを中心とした半径二メートルほどの範囲で、影は漆黒（しつこく）の液体に変化しているようだ。闇色の沼は、早くもアルゴンの体（み）を半ば以上呑み込んでいく。

影に潜（も）り込む能力を持っているのは、アルゴン・アレイではなくブラック・パイプだ。つたはずだ。まったく別の方向に逃げたパイプが近くにいても思えないが、何らかの手段でパイプはアルゴンに自（みづか）らの力を貸（か）したのか……それとも……。

頭の片隅（ひすみ）でそんな思考を巡（めぐ）らせながらも、美早はアルゴンの逃走（たうそう）を阻止（そし）するべく、両手を限界まで伸ばした。

しかし、鉤爪（かぎづめ）は、今度もまた大きな帽子（ぼうし）を浅く引（ひ）つ掻（か）くに留（とど）まり。仄（ほ）かな微笑（ほころび）を口許（くちぐし）に浮かべた分析者の全身が、影の中に没した。

——逃がさない！

美早は、自分も影に飛び込むべく、着地と同時に反転した。ためらいなく両手を漆黒の沼に突っ込むと、どぼんと不快な感覚とともに肘近くまで沈む。

だが、そこまでだった。いつの間にか、影の沼の直径は美早の肩幅以下にまで縮小している。アバターの肘がつかえて潜れず、それどころか、縮み続ける穴が有無を言わせぬ圧力で両腕を軋ませる。

「シェイプ・チェンジ！」

美早はコマンドを呼び、豹から人型へと戻った。スリムになったアバターで頭から飛び込むうとするが、穴の縮小スピードのほうが速い。今度は両肩が引つかり、侵入を阻む。

恐らくこれは、ブラック・バイスが事前にこの座標に生成しておいた、時限式の転移ゲートだ。アルゴンがお喋りで時間稼ぎをしたのは、ゲートが消滅するタイミングを計るため。このまま閉じてしまったら、追跡手段は消え失せる。

「ぐ……うっ……！」

美早は、ありったけのパワーを振り絞って影の穴を押し広げようとした。だが、穴が縮もうとする力は圧倒的だ。両腕の装甲がひび割れ、体力ゲージが更に削られる。

残された手段はただひとつ。再び豹に変身し、白らを砲弾と化す必殺技（ブラッドシェッド・カノン）でゲートに突撃する。

あの技は、甚大な反動ダメージを受ける。残り少ない体力では耐えられない可能性が高い。

しかし他に選択肢はない。どうせこのままでも、縮小する穴に両腕を引きちぎられて死ぬ。

「シェイプ……」

掠れ声で変身コマンドを唱えかけた、その時。

背後から、二人ぶんの足音と呼び声が聞こえた。

「バードさん！」

「レバードさん!!」

姿を見ずとも、ネガ・ネビュラスのライム・ベルとシアン・パイルだと解る。変身を中止し、肩越しに叫ぶ。

「手伝って！ このゲートを！」

美早の左右で立ち止まった二人は、瞬時に状況を察したようだった。ライム・ベルはすぐさましがみ込み、穴に両手を突っ込もうとしたが、しかしシアン・パイルがそれを止めた。

「待って、ベル！ ぼくに任せて下さい、レバードさん！」

大柄な青系アバターは、右腕に装着された杭打ち機型の強化外装をゲートに向けて構え、更に叫んだ。

「カウントゼロで穴から離れてください！ 三、二、一……」

両腕を引き抜けば、ゲートは数秒以内に閉じ、消滅してしまうだろう。だが美早は、刹那の迷いを振り捨てて、「ゼロ！」の声が聞こえると同時に大きく飛び退いた。入れ替わるように

一歩前に出たシアン・バイルが、聞き覚えのない技名をコールドした。

「——《スパイラル・グラビティ・ドライバー》!!」

強化外装に内蔵された鉄杭が収納されると同時に、バレルが拡大。そこからブルーの閃光とともに打ち出されたのは、鉄杭の倍以上も太いハンマードリルだった。猛然と回転する鋼鉄の柱が、閉じる寸前のゲートに挟み込まれ、ガギッと異音を放って停止する。

だが、静寂はすぐに破られた。ハンマードリルの出力がゲートの圧力を上回り、大量の火花を噴き上げながら回転を再開。ドリルが深々と突き込まれるにつれ、穴の周辺に放射状のひび割れが走る。

「お……おおッ……」

吠えながら、シアン・バイルは駄目押しとばかりに右腕を勢いよく突き下ろした。空間そのものが破壊されるような異様なサウンドが轟き、ゲートの縁が粉々に砕け散った。

直径二メートルほどにまで割り広げられた穴の中は、粘液質の闇に満たされている。勢い余ってつんのめるシアン・バイルの肩を掴んで引き戻し、美早は叫んだ。

「GJ! あとは任せて!」

そのまま、穴に身を躍らせる。液体化した闇に胸まで沈み込んだ時、バイルとベルが頷き合っている、美早を追って跳んだ。

ゲートがどこに繋がっているのかはまったく解らないが、アルゴンが追跡を妨げようとした

からには、加速研究会の重要拠点である可能性が高い。危険度はミッドタウン・タワーと同じかそれ以上だろう。

しかし、美早が何かを言う前に、ライム・ベルが毅然と叫んだ。

「あたしたちも一緒に行くよ! だって……」

そこで頭まで完全に闇に吞まれてしまい、続きを聞くことはできなかった。しかし美早は、

「仲間だもん」という言葉を心の耳で受け取った。

影のトンネルは、三人の侵入者をいすこへかと押し流し始める。視界は黒一色に塗り潰され、聴覚も完全に塞がれる。手を伸ばしても、指先に触れるものは何も無い。あとはもう流れに身を任せ、バイルたちと引き離されないことと、アルゴンに追いつけることを祈るだけだ。

そしてもちろん、赤の王スカーレット・レインを……ニコを無事に救出できることも。

いや、祈るだけでは足りない。持てる知恵と力の全てを振り絞り、現実にするのだ。

東京ミッドタウン・タワー四十五階。

現実世界では、超高級ホテルのロビーとなっていてははずの場所だ。加速世界でも建物の構造

は反映されているらしく、四角い柱が整然と並ぶ広大な空間が、床の穴から突入した黒雪姫の眼前に広がった。

ざっと地形を確認すると同時に、意識を索敵モードに切り替える。フロアは薄暗く、四方の壁際は暗がりに沈んでいるが、とりあえず見える範囲に動くものは存在しない。しかし階下から「フレイルム・ポルトクス」を撃ち込んだ諜が「手応えあり」と言っていたので、何ものかがこのフロアに潜伏していることは確実だ。

飛び道具が標的に命中した時の「手応え」なる感覚は、現実世界であればオカルティックな第六感に類するものかもしれないが、こちら側では確かな根拠がある。遠距離攻撃が、たとえ視界の外でもエネミーもしくはデュエルアバターを捉えれば、必殺技ゲージが増加するのだ。チャージ量は、地形オブジェクトを破壊した時とははつきりとした差がある。ペテランの諜がそこを見誤るはずはない。

その諜は、楓子、あきらかに続いて床の穴から姿を現した時には、早くも左手の長刀に火矢をつがえていた。即時の戦闘を予想していたのだろうが、敵の姿がないことに気付き、途惑ったように囁く。

「……下から撃った時には、間違いない何かに命中したのですが……」

「ポイント加算はなかったのよね？」

楓子が小声で訊ねると、巫女アバターはこくりと頷く。

「なのです。ダメージを受けて撤退したか……それとも……」

「物陰に潜伏しているか、なの」

推論を引き継いだあきらが、水色のアイレンズを素早く前後左右に振る。しかし鋭敏な彼女にも、敵の姿は見つけられないようだ。

黒雪姫は、一瞬考えてから三人に向けて言った。

「構わん、最優先すべきは速やかな離脱だ。待ち伏せがあらうと無視して、ポータルに飛び込む」

「賛成なの。でも、一つ問題が」

「何だ、カレン？」

「あるはずの場所に、ポータルがない」

その言葉に虚を衝かれ、黒雪姫はまじまじとアクア・カレントの顔を見た。クリスタル風の透明素材でできたフェイスマスクは、フロアの南側に向けられている。

「昔、何度かここから離脱したことがあるから間違いない。ミッドタウン・タワーのポータルは、四十五階の南壁際にあったはずなの」

諜、楓子と同時にあきらの視線を辿った黒雪姫は、五十メートル先の暗闇を凝視した。だが、ポータル特有の脈動する青い輝きは、反射光すらも見つけられない。代わりに、フロア中央を一直線に横切る、焼け焦げた亀裂が目につく。

「まさか……反射されたメタトロンレーザーが、ポータルを破壊してしまったの……？」

楓子の呟きに、黒雪姫は、衝撃のあまり少々音量を増した声で反駁した

「有り得ない！ 無制限フィールドのポータルは、破壊も移動も不可能だ。たとえ建物が丸ごと破壊されようとも、ポータルは固定座標に留まるはずだ！」

「わたしもそう思うけれど、でも……」

その時――

かつてポータルが配置されていたという場所を、じっと凝視していたあきらが鋭く囁いた。

「待って。何か……あそこに、何かがあるの」

「……何か……？」

楓子と同時にもう一度フロアの南に顔を向け、黒雪姫は両眼に全精神力を集中させた。視界のコントラストが上昇し、これまで濃い闇に溶け込んでいたモノがぼんやりと浮き上がる。

大きい。差し渡し三メートル近くはあるだろう。形は球体のようだが、この距離からはそれしか解らない。

「……メイデン、あのあたりの壁に火矢を撃ち込んでくれ」

黒雪姫の指示に、謡はこくりと頷くと長弓を構えた。斜め上に放たれた火矢は、弧を描いて飛翔すると南側の壁の高いところに突き刺さり、オレンジ色の光で闇を遠ざける。

「あ、あれは……何……？」

掠れ声を漏らしたのは楓子だった。他の三人は、声もなくただ眼を瞪った。

フロアを分断する裂け目から、右に十メートル弱離れた床面に、それはどつしりと鎮座して

いた。

脳髄、という表現を黒雪姫は真つ先に思い浮かべた。表面に、迷路のように入り組む凹凸が浮き出た、巨大な球状オブジェクト。全体に這い回る細かい網目模様がどくん、どくん脈打

つところは、生物の……いや、人間の脳を連想せずにいられない。

しかし、球体の色はあらゆる光を吸い込むような艶消しの黒で、前面には深い亀裂が横一文

字に走っている。人の脳を模しているなら、上下ではなく右脳、左脳に分かれているべきなのだが、その差異がオブジェクトをより不気味なものに見せている。まるで、人間とよく似てい

るが、しかし決定的に異なる生物の脳でもあるかのような――。

そこまで考えた時、黒雪姫はようやく気付いた。

暗闇でひっそりと脈動する、巨大な脳。そのイメージは、すでに黒雪姫の内部に存在する。自分で直接見たわけではないが、シルバー・クロウやライム・ベルから詳細な報告を受けたの

だ。彼らが《ブレイン・バースト中央サーバー》の中で遭遇したという、加速世界に蔓延する

闇の力の根源について。

「……まさか、あれが……」

黒雪姫がほとんど声にならない声で呟くと、楓子がその先を言葉にした。

「……ISSキットの、本体……？」

巨大なミッドタウン・タワーのどこかに巧妙に隠されているとはかり思っていた最終目標が——現在では優先順位は一番に下がっているが——こうも無防備に設置、いや放置されていることが、にわかには信じられない。侵入者を罠に掛けるための偽物と考えるのが合理的だが、しかしその一方、黒雪姫の視覚と直感、あれこそが本物のキット本体だと強く告げている。巨大な脳髓からにじみ出す、妖気にも似た重圧は、張りぼてのオブジェクトからは生まれようのないものだ。

黒雪姫の直感を、あきらと諷が掠れ声で追認した。

「……本物、だと思うの」

「私も、そう感じるので……」

「……うむ……」

頷き、黒雪姫は驚きをひとまず脇に除けると、猛然と思考を回転させた。

あの巨大脳髓がISSキット本体ならば、速やかに破壊すべきだ。そうすればアッシュ・ローラーや、その他多くのパーストリンカーに寄生するキット端末は全て消滅し、加速世界の危機は去る。それこそが、ネガ・ネビュラスとプロミネンスが合同チームを組んで挑んだ今回の連続ミッションの、最終目標なのだから。

だがそのいっぽう、黒雪姫たちは一分一秒でも早くポータルに迫り着き、現実世界でニコの

ニューロリンカーに繋がるケーブルを抜かねばならない。仮にキット本体の破壊に成功しても、その代償として赤の王がポイント全損するようなことになれば、赤と黒の両レギオンはISSキットが全加速世界に蔓延する以上の壊滅的ダメージを受けるだろう。外的な意味でも、内的な意味でも。

あきららの言うとおりにミッドタウン・タワーのポータルが消失しているなら、今すぐにもビルから出て、次の最寄り離脱ポイントである六本木ヒルズ・タワーに向かうべきか。だがそうした場合、再度この場所に戻ってきた時、今と同じようにISSキット本体が無防備なまま存在しているだろうか。試しに一度攻撃してみても、すぐに破壊できるかどうか確認するという選択もなくはないが、体力ゲージが見えるとは思えないし、その一撃でよからぬ事態を引き起こしてしまうことも有り得る。

過ちの許されない二者択一を迫られる黒雪姫の苦悩を、三人も感じたのだろう。体を近づけた楓子が、素早く、しかし穏やかな口調で囁いた。

「サツちゃんの選択は、わたしたちの選択よ。たとえどんな結果になっても、一緒に背負うわ、何もかも」

あきらと諷も、アイレンズに揺るがぬ光を宿らせて深く頷く。

こくりと頷き返し、黒雪姫は信頼する仲間たちに己の選択を告げた。

「今すぐ六本木ヒルズ・タワーに向かう。ビルまで直線距離で七百メートル、ポータルがある

のは四十九階。五分以内に辿り着く」

「了解！」

三人の応答に背中を押されるように、黒雪姫は南へと足を踏み出した。六本木ヒルズは東京ミッドタウンの南西に存在する。いったん地上に降りるよりも、南側の壁に穿たれた裂け目から、いくらかエネルギーがチャージされたであろう楓子のゲイルスラスタで飛べるところまで飛んで貰ったほうが早い。

四人は、大理石の床を南北に切り裂くメタトロン・レーザーの痕跡に沿って走り始めた。五十メートルあるフロアを、半分はど横切った、その時だった。

行く手の右側に鎮座する、巨大な脳髄に変化が発生した。

「ローねえ！」

最後尾を走る諛の声に、反射的に顔を動かした黒雪姫が見たのは――

漆黒の脳の前面を水平に走る亀裂が、ゆっくり上下に開いていく光景だった。

右脳と左脳ならぬ、《上脳》と《下脳》が分離するの、と最初は思った。しかしどうやら、動いているのは脳の表面だけらしい。入り組んだ凹凸が皺になって畳まれ、内部に隠されているモノを徐々に露出させていく。

「足を止めるな、走り抜けろ！」

叫びながらも、黒雪姫は脳髄から視線を外すことができなかった。

上下にスライドする膜の内側は、意外にも滑らかな光沢を持つ曲面だった。濡れたガラスのような質感の球体が、脳髄に包まれていたらしい。露出部分の中央がレンズ状に盛り上がり、内部から麗な光を放っている。

直径一メートル半はあろうかというレンズ部分が、不意に動いた。

脳髄内部のガラス球ごと、ぐり、ぐりと上下左右に回転する。その動きはやけに生物的で、えもいわれぬ嫌悪感を呼び覚まさせる。

やがて、ぐりつと大きく左に動いたレンズが、走る四人をフォーカスした。

瞬間、黒雪姫は悟った。

あの大型オブジェクトは、脳髄ではない。眼球だ。左右に走る裂け目も、大脳縦裂ではなく、瞼だったのだ。露出したガラス質の球体は、白目。真円を描くレンズが、黒目。巨大眼球は、何らかの意思を秘めて黒雪姫たちを視ている。

黒目レンズの中心には、爬虫類を思わせる縦長の瞳孔が存在した。その奥から、水面のように揺れる青い光が漏れ出している。醜悪極まる眼球のデザインに対して、内部の光だけがやけに清らかだ。どこかで見たことのある――郷愁にも似た感覚を引き起こす、クリアな青。

「待って」

鋭く囁いたのは、アクア・カレントだった。その声が帯びる、彼女にしては固く張り詰めた響きが、黒雪姫と楓子、諛の足を止めさせた。

「どうしたの、カレン？」

楓子の問いかけに、あきらはすぐには答えず、巨大眼球と視線を合わせ続けた。数秒後、いっそう緊迫した声で――。

「……あの目玉の中に……ポータルがあるの」

「ええっ」

「そんな……!?」

楓子と謡が同時に驚きの声を漏らした。黒雪姫は、息を詰めながら、もう一度黒目レンズの内側を覗き込んだ。周期的に脈動する青い光を、かつて数え切れないほど飛び込んだポータルの姿と照らし合わせる。

色合い。揺らぎ。大きさ。全てが、記憶と寸分違わず合致した。

「……本当のです……あれは、ポータルの光です！」

謡が、細い声で叫んだ。黒雪姫にも、恐らく楓子にも、その言葉を否定する根拠は見つけれなかった。

「だ、だが……絶対不可侵のポータルを、オブジェクトが取り込むなどということが可能なのか……？」

黒雪姫が呆然と発した問いに、楓子が疑問を重ねる。

「そもそも……あのISSキット本体は、システム上の分類は何になるの……？」 形からして

デュエルアバターやエネミーではなさそうだし、強化外装を含むアイテムなら、変遷と同時に消滅してしまうはずでしょう……？」

言われてみれば、確かにその通りだ。漆黒の巨大脳髄改め眼球型オブジェクトを造ったのが加速研究会だとして、こんなふうに無制限フィールドに放置しておいたら、ステージ属性が切り替わる変遷の時に強制イレースされてしまうはず。それを避けようと思つたら、変遷を察知した瞬間にアイテム欄に戻し、属性チェンジ後に再び実体化させるという操作が半永久的に必要となる。少なくとも七日に一度――現実時間なら十分に一度――変遷が起きることを考えれば、実際にはそんな真似は不可能だ。

疑問点だらけの状況だが――たった一つ、即断できることがある。

「……アイテムの種類はどうであれ、内部にポータルが存在するならば、方針は変更だ」

驚きや途惑いは意識の外に投げ捨て、黒雪姫は力を籠めた声で言った。

「今すぐ、あの気色悪い目玉……ISSキット本体を破壊する。そして露出したポータルから無制限フィールドを出る。レイカー、カレン、メイデン……」

両手の剣を音高く切り払い、叫ぶ。

「ここが我々の正念場だ！ 攻撃用意!!」

三人は再び「了解！」と答えた。その声は、先に倍する決意の響きとなつて、フロアにわたかまる闇を払った。

先頭に黒雪姫、右に楓子、左にあきら、後ろに謡というひし形のフォーメーションを組み、二十メートル先に鎮座する巨大眼球と対峙する。ガラス製の単眼は、縦長の瞳孔内部に青い光をたゆたわせたまま、一切の感情が存在しない無機質な視線で四人を見返す。

いや。

不意に、眼球はわずかに上下の瞼を細め——囁いた。ように見えた。

直径三メートルに達する巨体から、影のような波動が迸る。それに触れた瞬間、黒雪姫は悟る。眼球の内部は、膨大な悪意で満たされている。破壊を、悲鳴を、殺戮を求める欲望が、どす黒い液体となって、今にも弾けそうなほどたつぷりと詰まっている。

瞳孔から漏れ出るポータルの青い光が、いきなり、血のように黒ずんだ赤へと変わった。

眼球を包む脳髄状組織の表面に、ぼこぼこ音を立てて幾つもの瘡が膨れ上がった。腫瘍を思わせるそれらは、たちまち風船のように膨らむと一斉に弾け、内部から粘液と同時に奇様なモノを放出した。

二十センチほどの、小型の眼球。瞳孔は本体と同じく濁った赤に輝き、下部から細長い脚を何本も伸ばしている。床に落下するや、その脚でカサカサと素早く這い回る様子は、ある種の虫を連想させる。数は十を超えるだろう。

「た、たぶん、さっき私が《ボルテクス》で焼いたのはアレなのです！」

長弓を構えながら、謡がうわすった声を出した。あらゆる生き物に敬意を払うことを信条と

している彼女だが、脚つきの目玉にはさすがに嫌悪感を隠せないようだ。そもそも、小型眼球どもは、加速世界の小生物ではあるまい。

「気をつけろ、あいつらは恐らくISSキットの端末そのものだ！ 触れられれば寄生される危険性がある、近づかれる前に全て破壊する！」

黒雪姫の指示が引き金になったかのように、それまでキット本体の周りを無秩序に駆け回っていた小型眼球が、四人に向けていっせいに走り寄ってきた。

謡が、立て続けに長弓の弦を鳴らす。放たれた火矢は確実にキット端末を貫いて炎上させるが、いかんせん弓の連射には限界がある。四つの目玉が噴き上げる炎を飛び越え、その倍の数、針のような脚を広げて襲いかかってくる。

右足の剣を持ち上げ、いちばん左の目玉を照準すると、黒雪姫は叫んだ。

「デス・バイ・パラージング！」

自身にも視認できないほどのスピードで、右足が乱れ撃ちならぬ《乱れ蹴り》を放つ。秒間百発にも及ぶ連撃の効果圏に触れた瞬間、目玉は赤い光を振りまいて爆散する。

床に突き立つ左脚の切っ先を支点に、黒雪姫は体を右へと回転させた。灰色の残像を引いて流れる連撃の嵐が、飛びかかってくる目玉を次々に吹き飛ばす。圧倒的なパワーで加速世界を大混乱に陥れているISSキットだが、端末単体では遠近二種の心意技を使うことはできず、アバターに接触しての寄生狙い以外に攻撃方法はないようだ。

黒雪姫の必殺技で七個の目玉が破壊され、最後の一つは楓子が右足の鋭いヒールで串刺しにして仕留めた。スカイ・レイカーの得意技は流れるような掌打だが、さすがの《鉄腕》も素手で潰すのは嫌だったらしい。

本体が生み出した一ダースの端末は十秒足らずで全て破壊されたが、そもそもシステム上は単なる強化外装であるはずのISSキットが、こうやって勝手に勝手に動くこと自体が信じがたい。《災禍の鎧》という独自の意思を備えた強化外装の例があるにはあるが、あの恐るべき鎧すらも単体では活動できず、必ず宿主を必要とした。

いったいISSキットとは何なのか。加速研究会は、いかなる手段でこんな代物を作り上げたのか。

再びの疑問にとらわれかけたところで、黒雪姫は我に返って叫んだ。

「新しい目玉が出てくる前に、本体を叩く！ 全力攻撃、用意！」

この場合の全力は、心意システム全開のフルアタックを意味する。

無制限フィールドで無闇と心意技を使えば大型エネミーを呼び寄せてしまうが、高層ビルの上四十五階ならまずその心配はない。また、バーストリンカー相手に心意攻撃を行うと、圧倒的パワーで敵を屈服させる万能感に吞まれて《心意の暗黒面》に引きずられる危険があるものの、目標が魂なき眼球であればこちらも問題は少ない。

四人は、それぞれの色の過剰光で大理石の床を染め上げながら、一斉攻撃のタイミングを計

った。

いくぞ、

と叫ぶために黒雪姫が大きく息を吸い込んだ、その刹那――。

がらんとしたフロアに、どこかのんびりとした調子の、男性型デュエルバターの声が流れた。

「相変わらず容赦ないな。あの頃と変わってないみたいで嬉しいぜ、まったく」

「…………誰だ？」

攻撃開始の合図の代わりに、黒雪姫は鋭く誰何した。現実側ではホテルのロビーであるこの階には、大きな柱が何本も並んでいる。隠れる場所は山ほどあるうえ、声が複雑に反響して音源の位置を掴みにくい。

にもかかわらず、黒雪姫は感じた。声の出所は、ISSキット本体であると。

その直感は、半分だけ正しかった。

かつん、かつん、と硬質の足音を響かせて、ひとつのデュエルバターが巨大眼球の裏側から歩み出てくる。

先刻、キットの端末たちは、本体の周辺を縦横に走り回っていた。当然、声の主は端末の反

応圈に入っていたわけで、それなのに襲われなかったということは、すでに端末を装着しているISSキットユーザー——つまり敵でしか有り得ない。ならば即座に全力攻撃を叩き込み、本体ともども破壊するべきだ。

理性が下したその判断はしかし、眼球の陰から現れたアバターの片足を眼にした瞬間に、どこかへ消し飛んでしまった。

足を包む、ロングブーツ型の装甲。

踵から伸びる、ぎざぎざした拍車。

それらを彩るのは、何にもたえようのないほど純粋な——

赤。

「……………まさ、か」

呟いたのは、楓子か、あきらか、それとも諷か。同じ言葉を、黒雪姫も喉から押し出そうとしたが、アバターの口が完全に凍り付いて動かない。

かつん。かつん。かつん。

拍車つきのブーツは、更に三回床を鳴らすと、止まった。

ISSキット本体の、脳髄状の外皮に左肩を寄りかからせたM型デュエルアバターは、頭に乘せたテンガロンハットの鈎を右手で持ち上げて挨拶した。

「よう、久しぶりだな、ロータス」

黒雪姫は、痺れきった意識の中で、自分の口からびび割れた声が零れるのを聞いた。

「……………赤の王……………レッド・ライダー……………」

「ち……チユタク、ど、どうしてここに!?」

たとえ周りに誰もいなくても、加速世界ではリアル割れに繋がるような呼び方は極力控えるのがバーストリンカーの心得というものだが、ハルユキは驚きのあまり幼馴染たちのリアルネームを二度も口にしてしまった。

すると、シアン・パイルの上に乗ったままのライム・ベルが、アイレンズをじろりと光らせて答えた。

「決まってるでしょ、クロウ。パドさんと一緒に、あんたを助けにきたのよ」
続けて、下のパイルが言う。

「まあ、正確にはアルゴン・アレイを追いかけてきたんだけどね」

「……パドさん? アルゴン?」

二人の言葉を聞いて、ハルユキはきよろきよろあたりを眺め回した。しかし、がらんとした広間のどこをどう探しても、ブラッド・レバードの姿もアルゴン・アレイの姿も見当たらなかった。数秒前の記憶を再生しても、影通路から飛び出してきたのはパイルとベルの二人だけだったはずだ。



「……ここにはお前たちしかないみたいだけど……」
「えっ!?」

ハルユキの指摘に、チユリはタクムの背中から飛び降りると、同じように部屋を見回した。
「あれっ、変ね……アルゴンとはとかく、バドさんとは一緒に地面の穴に飛び込んで、移動中もすぐ近くにいたはずなのに……」

続けて立ち上がったタクムも、視線を巡らせながら呟く。

「そもそも、ここはどこなんだろう……?」

「オレも確信があるわけじゃないけど、たぶん、加速研究会の本拠地じゃないかと……」

ハルユキがそこまで答えた時、背中側からふわりと前に向った純白の立体アイコンが、燐光を小刻みに明滅させつつ言った。

「情報交換するのはおまえの自由ですが、現在は、より優先度の高いタスクが存在するのはいいですか?」

「え……あつ、そ、そうだった!」

ハルユキは慌てて叫び、広間の奥にある上り階段を見やる。チユリとタクムの唐突な出現に驚き、立ち止まってしまったが、のんびり会話をしている場合ではないのだ。数分前にここを通過したブラック・パイプに一秒でも早く追いつき、ニコを取り戻さねばならない。

「クロウ、何このちっちゃいの?」

不思議そうに首を傾げ、アイコンに触れようとするチユリの手をハルユキは慌てて握った。反応からして、二人にはさきほどの声が聞こえていないらしい。この状況で、アイコンの正体が神獣級エネミー・大天使メタトロンなどと告げたら二人がどう反応するかまったく予想できないので、ひとまず移動を再開しながら言う。

「こ、コレについてはおいおい説明するよ。それより、ちよつと前にブラック・パイプがあの階段を通ったはずなんだ。まだレインはあいつに捕まったままで……」

「それを先に言いなさいよ!」

チユリは叫ぶと、逆にハルユキの腕を引っ張って走り始めた。再び沈黙した立体アイコンが右側を飛翔し、左側ではタクムが足を動かしつつ状況を考察する。

「ばくとベル、バドさん、それにアルゴンが通った影の道は、ブラック・パイプが事前に設置しておいたものだと思う。もしかしたら、無制限フィールドがどんな風性に変遷しても絶対に影になる場所……たとえば高速道路や鉄道の高架下とかの、いわば『万年影』には、地下通路が常設してあるのかもしれない。だとすれば、途中で枝分かれしても不思議はないね……」

「なら、どこかの分岐点で、バドさんとアルゴンは他の通路に入っちゃったってことか?」

ハルユキが訊ねると、タクムは曖昧な角度で首を動かした。

「あくまで可能性だけど……でも、仮にそうだとしても、ほとんどの通路は本拠地に通じてるんじゃないかな。だから、バドさんも今頃この建物のどこかに出現して、赤の王を探してるは

ずだ。ばくらがバイスを追えば、いずれ合流できると思う」

「……そうだな。もしここにバドさんがいたら、『私との合流よりレインの救出を優先して』って言うよな」

深く頷きながらハルユキが言うと、前を走るチユリが一瞬振り向いてコメントした。

「その仮定、成り立ってないでしょ！ ほら、急ぐよ！」

三人のレベル5パーストリンカーと一体の神獣級エネミー（の一部）は、広間の奥から伸びる階段を全速力で駆け上った。

大理石の上り階段は、予想外に長かった。

二十段ごとに踊り場があり、反転してまた二十段上るのだが、それを何度繰り返してもなかなか次のフロアに到着しない。ハルユキたちが暮らすタワーマンションの非常階段を連想させるが、どの踊り場にも扉が見当たらないので、ひたすらに上り続けるしかない。

無制限フィールドの建物は、原則として現実世界の同座標に存在する建物の構造を再現しているはずだが、こうも長いだけの階段が果たして実在するものだろうか。高層ビルなら踊り場ごとにドアがあるはずだし、旧東京タワーなみに高い塔か、あるいは地下深くまで掘られた縦穴か――。

ハルユキは、頭の半分でそんなことを考えつつ、もう半分で幼馴染たちの会話を聞いていた。

「……そういえばバイル、さっき、影通路の入り口をコジ開けるのに使った必殺技って、新しく取ったやつ？ あたし、初めて見たんだけど」

チユリにそう問われ、タカムは左手で後頭部を掻きながら答える。

「いやあ、あれはレベル3のボーンラスだから、習得したのはもう一年以上も前だよ」

「えー、ならもつとガンガン使えばいいじゃん！ 地面にあんなでっかい穴あけたんだから、攻撃力相当高いでしょ？」

「うーん、それが、取ってから解ったんだけど……あの技、地面に対して垂直方向にしか発射できなくて、使いたいところが難しいんだよ。実質的には、倒れた敵への追い打ち専用なんだけど、発射前モーションが長いせいで避けられちゃうこともけっこうあって……そうなるって、地面にドリルが刺さって動けないままカウンターを山ほど貫つちやうんだよね……」

「ふうーん。見た目も名前もカッコいいのにねえ」

まったく、それが必殺技のワナだよなあ、とハルユキもしみじみ考える。

レベル5となる現在までのレベルアップ・ボーンラス全てを《飛行アビリティ強化》で貫いているハルユキだが、毎回葛藤がないと言えは嘘になる。インスト画面に四つ出現するボーンラス選択肢には、毎回必ず一つは必殺技があつて、シルエツト表示される攻撃モーションも、叫ぶのが気持ちよさそうな技名も、ハルユキを強烈に誘惑してくるのだ。敬愛する《親》であり師でもある黒雪姫の教えがなければ、一度や二度、あるいは三度か四度は誘惑に負けていたか

もしない。

以前、タクムが言葉少なに教えてくれたところによれば、彼がレベル2から4までのボーナス全てで必殺技を習得したのも《親》の指示だったらしい。

しかしそれは、黒雪姫がハルユキにしてくれたような、自分でことん考えさせ、気付かせ、選ばれるような導きではなく、タクムの迷いなど一顧だにしない頭ごなしの命令だったそうだ。親友の《親》を悪く言いたくはないが、それを指導とは呼べないだろうとハルユキは思う。

そのうえ、タクムの《親》は、《子》がポインント枯渇の危機に陥つても自分では助けようとせず、代わりに《バックドア・プログラム》の実験台にした。最終的には悪しき行いを糾問され、青の王ブルー・ナイトの《断罪の一撃》によって加速世界から去った――。

話の終わりに、タクムは言った。

ぼくを《子》に選び、加速世界の扉を開けてくれたあの人には感謝している。必殺技はかり習得してしまったことも、バックドア・プログラムの誘惑に負けたことも、全部はく選んで、ぼくの責任だ。

でも、なにもかもを、最初からやり直せたら……そんなふうに思う気持ちも、まったくないとは言えないんだ……。

「――まだまだこれからだぜ、タク」

一段飛ばしで階段を駆け上りながら、ハルユキは敢えてリアルネームで呼びかけた。

「デュエルアバターがどんなふうに進化するのかは、ハイランカーになってみないと解らないんだ。それに、タクのあの必殺技、ツポにはまれば無茶苦茶強いぞ。噴らったオレが言うんだから間違いない！」

初めての対戦で、五階建ての病院の屋上から一階まで叩き落とされた時のことを思い出しながら叫ぶと、左を走る大型アバターは、フェイスマスクに並ぶスリットから苦笑の気配を漏らした。

「その話はもう勘弁してくれよ。でも、ハルがそう言うなら、これからはもっと使い方を工夫してみようよ」

「よーし、そんじやさっそく次の領土戦で、オレとの連携技をいろいろ試してみようぜ！」
ハルユキのその提案に、真っ先に反応したのは意外にも右側を浮遊するアイコン――大天使メタトロンだった。

「……おまえがいま言った《リョウドセン》とは何ですか？」

「え？ ええと……」

答えようとした口を、素早く閉じる。メタトロンの声というかテレパシーはチュリとタクムには聞こえていないらしいので、二人からはハルユキがいきなり独り言を呟き始めたようにしか見えないだろう。

しかしメタトロンは、そんな事情など斟酌するつもりはさらさらなく、いつその命

令口調で回答を迫る。

「要求された情報は速やかに提供しない」

「はっ、はい！　りよ、領土戦っているのは、エリアの支配権をかけてレギオン同士で戦うこととで……あ、レギオンっているのは……」

「それは知っています。ふむ……下位フィールドでは、小戦士たちがささやかな領地を巡って争っているというわけですか」

「ま、まあ、そういうことかな……」

とハルユキが頷くと同時に、前を走るチュリが怪訝そうな顔で振り向いた。

「ちょっとクロウ、さっきから何ブツブツ言ってるの？」

「いや、その……」

しかし幸い——と言うべきか、その時ハルユキの視界に、待ち望んだ光景が飛び込んだ。行く手の踊り場の壁に、四角い穴が黒々とした口を開いていたのだ。

「そつ、そんなことよりベル、前、前！」

ハルユキが右手で進行方向を指さすと、チュリは顔を戻し、はっとしたように叫んだ。

「ん？　……あつ、よかった、出口ね！　あたし、マップが無制限ループしてるのかもって疑い始めてたよ」

「ぼくも階段を何回折り返したのか、ぜんぜん覚えてないよ」

というタクムの台詞に、

「二十四回です」

とメタトロンがハルユキだけに聞こえる声で注釈を加えた。

残りの階段を一気に駆け上り、二十五個目らしい踊り場に先頭で飛び込んだハルユキは、開口部そばの壁に背中を押してつくて先の様子を探った。

下層と同じく、薄暗い通路が一直線に伸びている。見える範囲に動くものは存在しないが、この通路もタイムドエネミーの巡回経路になっている可能性は高い。しかし、ニコを運ぶブラック・パイプが数分前にここを通過したはずなので、ぐずぐずしてもいられない。

信頼する仲間たちと合流できたことで、ほんの少しだけ緩みかけた精神状態を、ハルユキは一度の深呼吸で引き締め直した。

——ニコ、待ってる。絶対に助けるからな。

——それに、編さんも、もう少しだけ頑張って。ミッドタウン・タワーに戻ったら、すぐにISSキット本体を破壊するから。

二人に向けて強く念じてから、仲間たちに早口で指示する。

「この建物は、タイムされたエネミーが巡回してるんだ。気配を感じたら、すぐに教えてくれ」

「了解！」

「いいでしょう」

ひとつ想定外の応答があったものの、そろそろ慣れていこう、と自分に言い聞かせつつハルユキは抑えた声で叫んだ。

「よし、行くぞ!」

四角い開口部をくぐり、通路に踏み込むと、周囲を警戒しながらも可能な限りのスピードで走る。三十メートルほどで右への曲がり角に到達したので、いったん立ち止まって先の気配を探ってから、一気に飛び出す。

途端、淡いオレンジ色の光が眼に飛び込んだ。

光源は、長い通路の左側に幾つも並ぶ、縦長の窓だ。

太陽光が直接入り込んでいるのではなく、曇り空に反射した夕焼けの微光が、窓から床へと斜めに落ちていいる。反対側の壁にもたくさんのガラス窓と、大型のスライド式ドアが等間隔に連なる。

初めて足を踏み入れた場所であるはずなのに、その光景には奇妙な既視感があった。理由は、背後のチユリが呟いた短いひと言に集約されていた。

「え……ここ、学校……?」

まさしく、学校の廊下以外何のものでもない。右手の壁に設けられた窓とドアの並び方は、明らかに教室のそれだ。

悪の組織の本拠地から、いきなり日常空間に引き戻されてしまったような気持ち悪さを感じながら、ハルユキは慎重に数メートル進むと左の窓を覗いた。

透明なガラスの向こうには、黄昏ステージ特有の神風デザインでありながら、まったく崩壊していない大型の建物が幾つか並んでいる。それらの後方には半壊した遺跡群がどこまでも広がり、ずっと遠くには空まで届かんばかりにそびえる細い塔が見える。

「……あれ、もしかして、旧東京タワーか……?」

ハルユキの呟きに、右隣で窓を覗くタクムも頷いた。

「そうみたいだね。太陽の位置と旧東京タワーの大きさからすると、この建物の位置はタワーの南西、そうだな……二キロってところかな……」

その目測を、ハルユキは脳内に展開した東京の地図に重ね合わせようとしたが、二十三区の南側にはまったく土地勘がない。数時間前に旧東京タワーの屋上からちょうどこの方向を眺めたはずなのに、空から見下ろすのと地面から見上げるのでは感じがまったく違う。

その時、いつの間にかすぐ左に立っていたチユリが、かすかな声で呟いた。

「芝公園から南西に二キロの学校……ってことは、まさか……もしかして、この場所は……」

しかし、言葉を最後まで聞くことはできなかった。

廊下の奥から近づいてくる、ずしん、ずしんという重々しい地響きに、三人同時に気付いた

のだ。間違ひなく、地下で遭遇した騎士型エネミーの足音。一本道の階段で追い抜かれたはずはないので、同種の別個体だろう。となると、エネミーの頭にはティム用の銀冠が嵌（は）まっていて、それを壊さなければメタトロンに非アクティブ化してもらうことはできない。

三人いれば冠の破壊はさほど困難ではないだろうが、今は回避できる戦闘なら回避すべきだ。ひとまず建物の外に出ようと、ハルユキは眼前の窓ガラスに右手を当て、力を込めた。

だが、せいぜい二、三ミリの厚さしかないように見えるガラス板は、わずかに軋（ゆが）みただけでヒビの一本すら入らなかった。黄昏ステージなのにどうしてと考えてしまっただけで、浮遊する立体アイコンが呆れたように明滅するのを見てハッと気付く。地下階の床や壁同様に、地上の建物も、仕組みは不明なれど完全に保護されているのだ。

ハルユキの仕草を見たタクムが、窓に右手の杭打ち機を向けたが、その左腕を引つ張って制止する。

「この建物はどこも破壊不能なんだ、部屋に隠れてやり過（やりすご）そう」

と言ってから、扉がロックされている可能性もあると気付いたが、その時にはもうチユリが廊下の反対側にあるスライドドアを引き開けていた。

「早く早く！ かなり近くまで来てるよ！」

ちらりと廊下の奥に眼を向けると、窓から差し込む弱々しい光の向こうに、天井を擦（こす）りそうなほど巨大なシルエツトが見えた。慌（わ）ててタクムと一緒に部屋に飛び込み、身を立（た）てないよう

に気をつけて扉を閉める。

エネミーの主たる索敵手段——この場合の《敵》とはデュエルアバターのことだが——は、タイプにより異なる。獣型なら匂い、虫型なら振動、中には謎の超感覚によって索敵圏内のアバターの回答無用でターゲットするタイプまでも存在するが、人型エネミーは基本的に視覚と聴覚に頼っている。つまり、物陰に隠れて音を立てずじっとしていれば、やり過（やりすご）せる確率は決して低くない。

扉の中の部屋は、廊下と同様に、学校の教室を強く連想させる造りになっていた。さすがに教壇やロッカーまでは再現されていないが、大理石の長机が六列、整然と並んでいる。その谷間に三人密着して隠れ、近づいてくる足音に耳をそばだてる。

ずしん、ずしんという振動が教室の前に到達する寸前、ハルユキはぎょっと眼を見開いた。大柄なシアン・パイルも体を横倒しにしてどうにか机の陰に収まっているのに、白い立体アイコンが近くの机の上にあふふよ浮いているではないか。これでは窓越しに廊下から丸見えた。咄（は）さねに右手を伸ばし、アイコンをひったくると体の下に抱え込む。

「無礼な！ 今すぐその手を離（はな）さない！」

途端（とたん）、頭の中でメタトロンの吐責（しつせき）がきーんと響くが、両手でしっかりアイコンを握（にぎ）ったまま小聲（こゑ）で囁く。

「ごめん、ちよっとだけおとなしくしてて！」

そして、今まさにそのアーチから、ひとつのシルエットが滲み出るように現れたところだった。

騎士エネミーではない。ずっと小さいが、底知れぬ存在感を放つ漆黒のアバター。何枚もの薄板を人型に重ねた特異な姿は、ブラック・バイス以外では有り得ない。校舎の廊下を南からぐるりと回り込み、ちょうど中庭に到達したところなのだろう。つまり、この場所が、バイスの最終的な目的地ということだ。

積層アバターの両腕には、いまだ氣を失ったままの真紅のアバターが抱えられている。満身創痍のニコを眼にした瞬間、ハルユキの胸の奥で、烈火の如き憤激が再燃する。タクムの腕を振り解き、窓に向かって突進しかけたが、幼馴染はしっかりと肩を押さえながら囁く。

「闇雲に突っ込んだじゃダメだ、ハル！」

続けて、チユリの声。

「この学校、破壊不可能なんですよ!? 窓は壊せないよ！」

その指摘は、残念ながら正しい。ハルユキが休ごと突っ込んで、中庭と教室を隔てるガラス窓はびくともするまい。潜伏位置をただでバイスに教えてやるようなものだ。

「でも……今から、南のアーチまで遠回りする時間は……！」

ハルユキは、焦燥に焼け付く喉から掠れ声を出した。

——二代目赤の王は、今日で加速世界から退場して頂く予定になっているんだ。

地下フロアで、バイスはハルユキにそう告げた。どんな方法で全損させるのかは定かでないが、もうあと数分……下手をすると数十秒以内にその「処置」が始まってしまうかもしれない。九十九・九パーセント跳ね返されると解つていても、わずかな可能性に賭けてフルパワーで窓に突進する以外に、選択肢は存在しない……

「落ち着くのです、小さな鳥よ」

頭の真ん中で響いたその声が、冷水のように少しだけハルユキの意識を冷やした。

「何度同じことを言わせるのです。我がしもべとなつたからには、まずはその軽挙妄動を改めて貰いますよ」

「で、でも、もう時間が……！」

「いいから私の話を聞きなさい」

ヘルメットのすぐ前に浮き上がった小アイコンが、ハルユキを叱るように、強く一度光った。仕方なく頷き、ちらりと窓の外を見る。積層アバターは、急ぐでもなく一定のペースで中庭中央の祭壇を目指している。

視線をアイコンに戻し、ハルユキは限界の早口で囁いた。

「解つたから、二人にも聞こえる声で話してくれないか」

「圧縮モード音声で認識できない相手に私が合わせるのには不愉快ですが、やむを得ませんね。よいですか、私の通常モード音声をお聞けることは、お前たちにとっては百年に一度の機嫌な

のですよ」

ハルユキには暗喩に理解しがたい不満を表明してから、立体アイコンは純白の光を少しだけ暗くした。続けて発せられた声は、ハルユキの頭ではなく両耳に響いた。

「この館が規格外の強度を備えている理由は……」

途端、タクムとチユリがぎょっとしたように上体を引いたが、メタトロンは意に介せず言葉が続ける。

「恐らく、館全体に、おまえたちと同じ小戦士による優先的所有権が設定されているからです」
「えっ……」

どうやらアイコンの正体については保留することにしたようで、タクムが素早く問い返した。
「それはつまり、ブレイヤーホーム……ってことですか？」

言葉遣いが丁寧なのは、無意識のうちにメタトロンの情報圧を感じたからだろうか。チユリのはうは、いつもの調子で囁く。

「うっそお、このでっかい学校が全部……!？」

二人に半秒遅れて、ハルユキも考察→理解→驚愕のプロセスを辿り、ゴーグルの下で両眼を限界まで見開いた。

無制限中立フィールドのブレイヤーホーム——たとえば旧東京タワーの天辺に建つスカイ・レイカーの(颯風庵)のような——は、確かに破壊不能属性が与えられている。しかし、ハル

ユキの知る限りブレイヤーホームは辺鄙な場所にしか存在せず、広さもせいぜい二部屋+キッチン程度が標準だ。学校サイズの建物が丸ごと誰かの所有物件になっている、などという話は聞いたことがない。もしそれが許されるのであれば、黒雪姫ならとくに梅郷中学校を丸ごと買っているのではないか。

だが、ある意味では無制限フィールドの支配者だとすら言えるメタトロンの言葉が間違っているとも思えないし、そう考えれば壁や窓の圧倒的強度も納得できる。今はメタトロンを全面的に信じようと決断し、ハルユキは素早く訊ねた。

「ここがブレイヤーホームだとして、壁をすり抜ける方法があるのか？」

意思あるエネミーの答えは、再び三人を仰天させた。

「お前たち小戦士は、この世界の理に干渉する力を持っているはずだ」

「コトワリに……干渉……って、もしかして、心意システム……?」

「力の名称までは知りません。我らビーイングには、特異な音を伴って認識されるゆえ私はあまり好きではありませんが、しかしこの館の構造体を破壊するには、その力を使う以外の方法はないでしょう」

特異な音という言葉の詳細は不明だが、メタトロンの言うとおり心意システムは加速世界の《事象を書き換える》力を持っている。届かないはずの攻撃を届かせる、動かないはずの強化外装を動かす程度のオーバーライドは控えめなほうで、数値ロックされた観客の体力ゲージ

を減らしたり、他人の記憶を封印したりと、途轍もない効果を発揮する技も少なくない。

その一方、当然ながら、重要ルールを覆そうとするならばそれに応じた強大なイマジネーションが必要となる。ブレイヤーホームは、フィールドの地面が持つ耐久度すら超えるほとんど絶対的なプロテクトを施されているはずで、その壁に生半可な心意技を撃ったところでかすり傷もつくまい。

だが、やるしかない。ニコを救出するためには、教室と中庭を隔てる壁を、今すぐに破壊しなければならぬのだ。

利那の思考を経て、ハルユキは決意した。

「……わかった」

右拳を強く握り締めながら頷くと、ハルユキの背中に腕を回したままのタクムと、その向こうのチュリが同時に「ハル……」と呟いた。しかしすぐに二人も力強く頷き返す。

「ぼくも手伝うよ」

タクムの言葉に「頼む」と答え、ハルユキはしやがんだ姿勢から少しだけ顔を上げて中庭を見た。

ちょうど中央部に到達したブラック・パイスが、抱えていたスカレット・レインを四角い祭壇に横たえたところだった。もう一刻の猶予もない。姿勢を低くしたまま窓の下に近付き、右手の指先を白い大理石に触れさせる。タクムも隣に進み出ると、右腕の強化外装から突

き出す鉄杭を左手で握る。

「〈蒼刀剣〉」

抑えた技名発声とともに引き抜かれた鉄杭は、青い過剰光を放ちながら大型の長剣へと姿を変えた。マゼンタ・シザーとの激戦で受けたダメージが色濃く残る心意剣の切っ先を、ハルユキの指先が触れる箇所のすぐ近くに押し当て、タクムはぐつと頷いた。

「……行くぞ」

小声で合図し、ハルユキは右手にありつただけのイマジネーションを集中させ——叫んだ。

「〈光線剣〉!!」

指先から迸った銀色の輝きが壁に衝突し、眩いスパークを散らした。

「おおおッ!」

タクムも鋭い気合いに乗せて、心意剣を壁に突き込む。切っ先から青い雷光が幾筋も放たれ、ハルユキの過剰光と溶け合って、教室全体を青白く染め上げる。

この時点で、中庭のブラック・パイスは異変に気付いているだろう。加えて、廊下を北に去っていった騎士エネミーも、心意技の〈特異な音〉に引き寄せられ戻ってくる可能性が高い。状況は寸秒を争う。

「つ、ら、ぬ、けッ……!!」

意志力を極限まで集中させながら、ハルユキは念じた。

ハルユキの《光線剣》は心意システム基本技四種のうちの射程拡張型に、タクムの《着刃剣》は同じく基本の威力拡張型に分類される。どちらの技も、習得した当初に比べれば発動スピードもパワーも大幅に向上しているが、ハイランカーが操る第二段階心意技にはまだまだ遠く及ばない。

もしここにブラック・ロータスやアーダー・メイデンがいれば、壁を瞬時に粉碎、あるいは溶解させ、道を開いてくれたかもしれない。しかし、二人は今頃、ハルユキたちと同じ目的のために違う場所で作っているはずだ。

これまででは、どんなピンチに陥っても、最後は必ず黒雪姫や楓子、諷、あきら、ニコ、バドさんたちが助けてくれた。頼もしい先輩パーストリンカーたちが近くにいてくれる安心感に、心のどこかで寄りかかっていた。

でも、いつかは、親鳥の翼の下から空へ飛び立たねばならない時がくる。自分の力で、巨大な困難に立ち向かわなくてはならない時がくる。

それが、きつと、今だ。

「う……お、ああああ——ッ!!」

魂を焼き尽くさんばかりに白熱するイメージションの全てを、ハルユキは伸ばした右手の指先一点に集中させた。貫けという言葉すらもいつしか蒸発し、意識の深奥から生み出される銀色の奔流だけがハルユキを満たす。右手から放たれる過剰光は、強固な壁に激突し、圧縮され、極小の恒星となって輝く。

「く……う、お、お!」

すぐ隣では、タクムも喉から雄叫びを絞り出しながら、両手で握った心意剣で壁を貫こうとしている。接点から次々と放たれる雷閃は教室のあちこちに衝突し、更に無数のスパークを散らす。

二人の心意攻撃を受け止める大理石の壁は、激しく振動しながら圧力に抗う。壁の表面には薄紫色の光が二重の同心円となって広がり、窓や床までも波打たせる。しかし——壁にはまだ、ひびの一本すらも入らない。

無理だ、とほんの一瞬でも思ってしまった、それが現実となる。

だから、ハルユキは、たとえ魂が焼き切れてもイメージを止めるつもりはなかった。視界が周辺からホワイトアウトし始め、教室を満たす轟音が遠ざかり、アバターとの一体感すら薄れかけた……その瞬間。

「う……わああああ——っ!!」

背後で三人目の叫び声が高く響き、三色目の輝きが世界を照らした。鮮やかな新緑の色をした光の奔流が、ハルユキとタクムの間を抜け、壁に激突した。ライム・ベル——チユリの声とアバターカラー。しかし、必殺技名の発声は聞こえなかった。ということは、この緑色の光はノーマルなライトエフェクトではなく過剰光——心意システムが生み出す奇跡の輝きだ。

心意技を使えないはずのチュリがどうして、という思考は一瞬の火花となって消え、ハルユキは再びありつたものの、そして最後のイマジネーションを振り絞った。

銀、青、そして黄緑の光彩が溶け合い、澄んだ空の色に染まった奔流が、システムカラーの防壁を突き破った。大理石の壁に、ごく微細なひび割れが一本走り、二本、三本と増え——。

硬質の金属をハンマーで打ち据えたかのような、かつて聞いたことのない大音響を放って、壁が粉々に砕け散った。

ハルユキは、限界を超えた精神集中の反動なのか、ふうっと意識が薄れかけるのを感じた。だが自分が倒れるより早く、後ろから黄緑色のアバターが倒れ込んできたので、どうにか踏みとどまって右手を伸ばす。タクムも同時に左手を持ち上げ、二人でライム・ベルを支える。

システムに保護された壁を破壊してのけた達成感と、チュリがいきなり心意システムを発動させたことへの驚きから、ほんの一瞬動きを止めてしまった、その時。

「壁が閉じます！ 早く通過しなさい！」

脳内で響いたメタロンの叱声が、ハルユキの意識を再起動させた。見開いた両眼が捉えたのは、大理石の壁に空いた直径二メートルの穴の内面に瞬く紫色の光だった。システムカラーに輝く半透明のキューブが、重なり合いながら次々にオブジェクト化し、壁の穴を埋め戻そうとしている。

タクムと顔を見合わせたハルユキは、チュリの腕をしっかり抱え直すや同時に床を蹴った。

壁の穴に頭から突つ込み、三人同時はやや窮屈だったもののどうにかくぐり抜けると、五十センチほど高低差のある中庭に転がり出る。その間にも壁は急速に寒がり続け、立体アイコンが余裕を持って通過した一秒後、キーン！ と甲高い音を響かせて完全に閉じた。穴が消滅する寸前、廊下を駆け戻る騎士エネミーの足音が聞こえた気がしたが、もう気にする必要はないしその余裕もない。

なぜなら、顔を上げたハルユキの二十メートル先には、この日三度目の接近遭遇となるブラック・パイスの立ち姿が存在したからだ。右側面を向けて立つ積層アバターのすぐ前方の祭壇には、真紅の少女型アバターが横たえられている。

——もう、絶対に逃がさない。

——ここで、必ず、ニコを取り戻す。

確たる決意が高温の炎となってアバターの隅々にまで駆け巡り、ハルユキの消耗をいっきにせよ遠ざけた。

「……バイル、ベルを頼む」

小声で囁き、半ば失神状態のチュリをタクムに預けると、ゆっくり立ち上がる。両拳を固く握り締め、一步、二歩と前に出る。

「——ブラック・パイス!!!」

腹の底から絞り出した怒号を聞いても、積層アバターは顔を向けようとしなかった。代わりに

に右手を、少し待ってくれとばかりに持ち上げる。

更なる怒りに駆られ、ハルユキはもう一歩足を前に出した。その時、バイスの左腕を構成する薄板が全て、音もなく落下してそのまま地面に吸い込まれた。反射的に身構えたが、狙いはハルユキではなかった。

薄板たちは、真つ黒な十字架となつて祭壇に出現すると、赤の王を磔の形で拘束したのだ。両手を広げさせられ、ヘルメットをがくりと項垂れさせるニコの姿を見た途端、これまでに数倍する怒りの衝動が噴き上がって、視界を薄赤く変色させた。

まったく同じ姿で捕らわれるデユエルパターの姿を、ハルユキは遠い昔に見ている。

自分自身の記憶ではない。十二日前、謡と一緒に突入してしまつた《帝城》の中で見た夢に出てきたのだ。クレーター状に窪んだエネミーの果の底に立てられた十字架と、それに拘束される女性型バーストリンカー。ブラック・バイスとアルゴン・アレイ、そして名前も姿も解らないもう一人は、磔にした少女を長虫型エネミーに何度も何度も殺させた。

ハルユキにその夢を見せた強化外装、災禍の鎧《ザ・ディザスター》はずでに浄化、分離され、無制限フィールドの片隅で永遠の眠りに就いている。だが、鎧から与えられた記憶全てがハルユキの中から消えたわけではない。中でも、絶対に忘れられないであろう情景の一つが、少女——サフラン・プロッサムの《処刑》だ。

残酷極まる無限EKの記憶が、眼前で磔にされたニコの姿と重なり、ハルユキの内側を灼

熱の憤怒で満たした。

「バイ……ス………」

食い縛つた歯の間から掠れ声を押し出し、猛然と地面を蹴ろうとしたが、そこでぐつと踏み留まる。

——だめだ。怒りに身を任せるな。

——怒るのは悪いことじゃない。でも、ひとつの感情だけに吞まれば、ひとつのことしか見えなくなる。僕はそうやって今まで何度も失敗してきた。でも、今日は、今だけは失敗は許されない。僕がこの場所にいるのは、ブラック・バイスを倒すためじゃない。ニコを取り戻すためなんだ。

足を停めたハルユキは、大きく息を吸い、吐いた。憤怒の炎が圧縮され、真紅の結晶となつて胸に宿る。そこから発せられる熱が、両手に酷な過剰光となつて宿る。

「——レインを返して貰うぞ、ブラック・バイス」

抑制された声でそう呼びかけると、積層アバターはここで初めて体を回転させ、正面からハルユキを見た。何枚もの薄板で構成される顔には眼も口もないが、そこに仄かな感情を宿らせ、バイスは穏やかな声で答えた。

「ほう……。やはり、以前の君とは少し違うようだね。こともあろうに我らが城の壁に大穴を開けたのは、わたしもいささか驚いたよ。三人がかりだったようだが……それでも、そんな

ことができる者はハイランカーにもなかないと思うね。いやあ、お見せしたよ」

実際のところは、ハルユキのすぐ後ろに浮遊する立体アイコン——大天使メタトロンが例の調子で「それしかない」と断言してくれないければ、ああもイマジネーションを集中し続けることはできなかっただろうから四人がかりということになるのかもしれないが、それを馬鹿正直に教える必要はない。ハルユキはバイスの薄っぺらい称赞には取り合わず、台詞の一箇所を抜き出して追及した。

「我らが城……って言ったな。つまりこの建物……いや学校が、お前たち加速研究会の本拠地ってことだ。あそこに旧東京タワーが見えるから、現実世界の学校名を割り出すのも難しくない。だからってリアルアタックまではする気はないけど、ローカルネットへの攻撃くらいだったら躊躇わないぞ」

「これはこれは、勇ましいことだ。確かに、三人もの招かれざる客にこんな所まで入り込まれてしまったのはわたしの失態だな。後学のために、どうやって地下のガードエネミーをすり抜けたのか教えてくれないか……と言っても無駄かな？」

「無駄だ。お前にはもう情報ひとつ、バーストポイント一点だって与えるつもりはない。もちろん、赤の王も」

静かに言い切り、ハルユキは左腕を持ち上げると、銀光を宿したままの拳を漆黒のアバターへと突き付けた。

「ここが、お前と、オレたちの、決着の場所だ」

「いやあ、怖い怖い」

ブラック・バイスは、相も変わらず緊張感のない声でそう応じると、腕が丸ごと分離中の左肩を軽くすくめた。

「でもね、クロウ君。せっかくの決め台詞だけど、一箇所だけ正確かな」

「……どこかだ」

「お前」 じゃなくて、「お前たち」と言って貰わないとね」

という言葉とともに、バイスはすっと後ろに下がった。

判那。

脳内で「ピーッ」と短い警告音が響き、背後からは「クロウ！」というタクムの叫び声が聞こえ、中庭の空気を「びゅあっ！」という振動音が鋭く震わせ、しかしそれらより一瞬早く、ハルユキは掲げたままだった左腕を反射的な動作で顔の前に移動させていた。

左斜め上方から降り注いだのは、鮮やかな赤紫色の輝線だった。左前腕の装甲に内蔵された導光クリスタル——（光学誘導）アビリティでそれを受け止め、地面へと弾き落としてから、ハルユキは改めて中庭南側の空を見上げた。

校舎の屋上に存在したのは、予想どおり、細い体に不釣り合いな大型帽子を被るデュエルアバター——（四眼の分析者）アルゴン・アレイの姿だった。三日前のバトルロイヤルでは、

帽子に内蔵されたレンズと両眼のゴーグルから四発まで同時に発射できるレーザーにまったく反応できず、アバターを穴だらけにされたものだ。いや、今も、怒りに身を任せて視野を狭めていけば防衛は不可能だっただろう。

しかし、アルゴンのレーザーを見るのはこれで三度目だ。発射直前にレンズから溢れる光条にさえ気づければ、弾着のタイミングは体で覚えている。それに、タクムとチユリとバドさんがアルゴンと一緒に影通路に飛び込んだという話を聞いた時から、頭の片隅で狙撃を警戒していたのだ。

「私の警告に先んじて、よく反応できましたね」

というメタトロンの圧縮音声に、次は言葉で頼むと思念で答えながら、ハルユキは腕を下ろして校舎上の分析者改め狙撃者を睨んだ。

「降りてこい、アルゴン！ さもないと、次のレーザーはお前に跳ね返すぞ！」

正直なところ、《光学誘導》は習熟にはほど遠く、反射方向を百発百中でコントロールする自信はない。しかしアルゴンにとっては、三日前は圧倒的だったレーザーを、ノーダメージで防がれた衝撃のほうが大きいだろう。ハルユキの脅し文句に、いつもの冷笑ではなく喚き声で応じた。

「この状況でノコノコ降りてく遠隔型がどこにおんねん！ ……って言いたいところやけど……」
そこでちらりと後ろを振り返り、

「しつこいわあ！ あんた猫科やのうて犬科やろ！」

と叫ぶと、ひらりと屋上から身を躍らせた。空中で軽やかに宙返りし、三フロアぶんの高さから見事な着地を決めると、祭壇の手前に立つブラック・パイスの傍までダッシュする。

「ちょお、バーやん！ アンタ、かるーく援護射撃して逃げるだけの簡単な仕事やて言うたやないの！ それがなんでこんなめんどくさいコトになっとんねん！」

「いやあ、まったくもって面目ない。報酬に色をつけるから、もう一働きしてくれると大いに助かるねえ」

「あつたりまえやで！ 二倍、いや三倍払って貰わなワリに合わんわ！」

加速研究会最高幹部たちのやり取りを、ハルユキは意識の半分で聞きつつ、もう半分は南側校舎の屋上に向け続けた。予想、もしくは願望は、すぐに現実となった。夕焼け空を背景に、ひとつのシルエットが音もなく出現したのだ。

三角形に尖った耳と、腰の後ろから長く伸びる尻尾を見るまでもなく、《血まみれ仔猫》ことブラッド・レバードだと解る。タクムたちと一緒に影の回廊に飛び込み、途中で異なる枝道に入ってしまったものの、ここまでアルゴンを追い続けてきたのだろう。ミッドタウン・タワーで、ハルユキが離陸する直前に叫んだ、「バドさんはアルゴンを追って」という指示を遂行するために。

強敵アルゴンの追撃は無傷では不可能だったらしく、レバードは右手で左肩を押さえていた

が、琥珀色のアイレンズが中庭の中央に向けられた瞬間、豹の口から痛みを忘れたかのよう
な猛々しい咆哮が漏れた。黒い十字架に拘束されるニコの姿を視認したのだろう、低く身を屈
めたレバードは屋上から一気に祭壇へと突入するかと思われたが、ぎりぎりのところで自制し
たのか、アルゴンと同じく真下へと飛び降りた。

中庭の東側に陣取るハルユキたちのところまで移動すると、小声で囁く。

「お待たせ」

すぐ近くで見ると、バドさんの深紅色の装甲は、左肩以外にも数箇所にレーザの貫通痕を
残していた。短いひと言に込められた気持ちの重みを感じながら、ハルユキは答えた。

「ごめんなさい、バドさん。レイン、まだ取り戻せてないんです」

「NP。あいづらには、これ以上何もさせない」

抑制された口調ながら、内に秘められたレバードの決意が、輻射熱となってハルユキの装甲
を炙った。熱は背後の二人にも伝わったのだらう、タクムと、背中を支えられながらではある
がチユリも立ち上がり、ハルユキの右側に陣取る。

祭壇の十字架にスカーレット・レインを拘束し続けるブラック・バースト、その左側のアル
ゴン・アレイ。

東校舎の壁近くに並ぶ、シアン・パイル、ライム・ベル、シルバー・クロウ、ブラッド・レ
バード。

二人のレベル8バーストリンカーと、レベル8一人、レベル5三人を合わせた四人は、しば
し無言で対峙した。緊迫感に満ちた静寂を破ったのは、七人目——ハルユキの背後に浮遊する
立体アイコンだった。

「そろそろおまえの背中に戻ったほうが良さそうですね」

脳内で響く圧縮音声——どうやら、どんなに長い台詞だろうとわずかコンマ一秒ほどの時間
でハルユキに伝わっているらしい——に、無意識のうちに同じ思念で答える。

——頼む。奴らはまだ、きみの存在に気付いていないはずだ。この戦いの切り札は、きみに
なる気がする。

「当然です。しかし、翼に戻ればこのような双方向通信はできなくなります。おまえは、おま
え自身の才覚で、与えられた力を制御しなくてはなりません。私を失望させないよう、全力で
戦いなさい」

——わ、解ってるよ。羽根攻撃、じゃなくて（エクテニア）、頼りにしてる。……ほんとに
ありがとう、メタトロン。僕を助けてくれて。

「……愚か者。そのような言葉は、首尾良く仲間を助けたあとに取っておきなさい」

冷やかな声が脳内で響いた直後、軽やかな鈴の音に似たサウンドが聞こえ、視界左側に装
備強化外装の表示が復活した。ハルユキ本来の翼と同じく折り畳まれた状態で実体化したよ
うだが、背中にはささやかな、しかし頼もしい重みが加わった。

大きく息を吸い込み、ぐつと下腹に氣力を溜めてから、ハルユキは因縁深き仇敵たちに向けて言葉投げ掛けた。

「さっきの台詞、言い直すぞ。ここが、オレたちと、お前たち二人の、決着の場所だ」

それを聞いたバイスとアルゴンは、ちらりと顔を見合わせ——揃って薄く笑った。代表して答えたのは、先ほどハルユキの「お前」という言葉を訂正したバイスだった。

「申し訳ない、クロウ君。せっかく言い直してくれたけどね……」お前たち二人「ってところ、もう一度訂正させてくれないかな」

「……どっちか、逃げるつもりか？」

「はは、まさか。その逆……もう一人、増えるのさ」

そう言ったバイスが、芝居がかった仕草で右腕を広げた、次の瞬間。

対峙する両陣営のほぼ中央に、巨大な土煙が上がった。轟音と衝撃波が押し寄せてきて、ハルユキたちは思わず上体を引いた。

「え……遠隔攻撃か!?」

タクムの叫び声に、

「違う……空から何か落ちてきたんだ!」

と応じながら、ハルユキは真上を振り仰いだ。いまの爆発じみたインパクトからして、物体は百メートルを超える高さから落下したはずだ。しかし、黄昏ステージの空にはオレンジ色に

染まる薄雲以外の何も存在しない。つまり、高空を飛ぶ何かが物体を落としたわけではない、ということだ。

ならば、落下物はそれ自体の力によって空まで到達し、落ちてきたのだろうか。いったい何が——。

息を詰めながら、ハルユキは土煙が晴れるのを待った。やがて、フィールドを吹き渡る風が微粒子エフェクトを徐々に薄れさせていく。

物、ではない。大理石のタイル上にうずくまるのは、両手で両脚を抱え込み、限界まで体を小さく丸めた人間——デュエルアバターだった。

装甲色は地味な灰色、頭を深く伏せているのでフェイスマスクは見えない。バイスの言った「もう一人」だと思われるが、しかし、だとしても理解できないことが二つある。

一つは、ああも凄まじいスピードで地面に激突したのに、どうして落下ダメージを適用されて死ななかったのか。そしてもう一つは、単体のデュエルアバターが、どうやってそれほどの高空にまで到達できたのか。

ハルユキの知る限り、自力で百メートルを超えて上昇できるデュエルアバターは、二人しか存在しない。一人は「鉄腕」スカイ・レイカー。そしてもう一人は、もちろん自分自身だ。しかし体を縮めるアバターの、各所のエッジが鋭く立ったシルエットは、レイカーの優美な曲面デザインとはほど遠い。

——いや。

もう一人だけ、自力で《飛べる》デュエルアバターを、ハルユキはごく最近目撃している。四日前の水曜日に、中野第二エリアで行った通常対戦の終盤。対戦相手がシルバー・クロウの右腕を喰いちぎり、咀嚼すること、飛行アビリティを一時的に複製して飛んだのだ。

「まさか……………」

掠れた声で、ハルユキは呟いた。

その言葉が聞こえたのか、十メートル先でうずくまるデュエルアバターが、固く縮めていた両手足を解き、ゆつくりと立ち上がり始めた。西側の校舎の窓を通して中庭に落ちる夕陽が、平面主体の装甲に反射し、ぎらりと鈍い輝きを生んだ。

金属装甲——メタルカラーだ。これだけ離れていても、圧倒的な密度と硬度をまざまざと感じさせる特異な質感は、もう間違いない。青のレギオンのマンガン・ブレードが、加速世界で最も硬いと評した、タングステン装甲。

逆光の中でゆるゆると持ち上げられる、狼のあぎとを模したフェイスマスクを見詰めながら、ハルユキはその名を呼んだ。

「……………ウルフラム……………サーベラス……………」



《その瞬間》自分が具体的に何を考え、何を感じていたのか、黒雪姫は幾度か思い出そうとしたことがある。

二年と十ヶ月前——二〇四四年八月に開催された、加速世界で最初の七王会議。その席上で、七大レギオン間の不戦を訴える赤の王レッド・ライダーは、黒の王ブラック・ロータスに向けて言った。

——もしいつか現実世界で会っても、お前とはダチになれる。いや、なりたくないだ。

聞きようによっては、それまで幼き王たちが結んできたバーストリンカーとしての交誼から一歩踏み込んだと取れなくもないその台詞に、真っ先に反応したのは当時ライダーと最も仲の良かった紫の王バード・ソーンだった。

——ちよつとライダー、今の聞き捨てならないわよ！

——いや、違うって。……まいったな。

ソーンとライダーのやり取りに、青の王ブルー・ナイトや白の王ホワイト・コスモスが微笑み、黄の王イエロー・レディオまでが「クックッ」と笑い声を漏らした。緑の王グリーン・グランドだけは、分厚い装甲をかすかに鳴らしただけだった。

会議の場となったバトルロイヤル・フィールドを包む友好的な雰囲気の中で、黒雪姫はふと、あの二人が《親子》だという可能性はあるのだろうか、と考えた。

七王——かつては《純粋色》とも呼ばれた大レギオンのマスターたちは、加速世界の黎明期から戦い続けてきた古参揃いではあるが、全員が《最初の百人》というわけではない。ホワイト・コスモスの《子》である黒雪姫はもちろん違ひ、確証はないが、白の王自身も同様の可能性が高い。正体不明の開発者からBBプログラムを受け取った百人は、二〇三九年四月に新小学一年生となった——つまり二〇三三年生まれの子供たちだと聞いているので、黒雪姫と同学年であつて白の王は一年以上だからだ。

なぜオリジネーターの年齢が、最高齢バーストリンカーとイコールではないのか。その理由には諸説あるが、最も有力なのは、二〇三一年生まれの子供のうち、BBプログラムのインストール条件を満たし得るのは約半数だけだから、というものだ。なぜなら乳幼児対応型のニューロリンカーが発売されたのは二〇三二年の九月であり、それ以前に生まれた子供は、《誕生直後からニューロリンカーを装着》するのは不可能だからだ。

ともあれ、七王の中でオリジネーターであると強く確信できるのは、青の王と緑の王くらいのものだ。

——もし紫の王と赤の王が《親子》、もしくは《恋人》だとしたら、これから私が行うことを、彼女は永遠に許さないだろうな。

自身の思考に関する黒雪姫の記憶は、そこで途切れている。

王たちの笑いが収まりかけた時、黒雪姫は立ち上がり、ライダーに歩み寄りながら不戦協定への賛意を示した。喜んだライダーは握手を交わそうと右手を差し出し、黒雪姫はそれに抱擁（はくよう）で応えた。

ソーンがいつそう甲走（かそう）った声を出し、再び一同から笑いがわき起こり、そして《その瞬間》が訪れる。

ブラック・ロータスのレベル8必殺技、《宣告・抱擁による死》。射程はわずか数十センチ、しかし威力は無量大。クロスした両腕の剣が閉じる時、その中に存在するものは例外なく切断される。たとえば、レベル9に達したデュエルバターの装甲であろうとも。

二本の剣の交差点に乗る赤の王の首と、足許の地面に崩れ落ちた赤の王の体が、無数の細いリボンへと解けて消える時も、自分が何を感じていたのか黒雪姫は憶えていない。

——いやあああああああ!!

紫の王が、フィールド全体に響き渡るような悲鳴を上げ。

——それが貴様の選択か、ロータス!!

青の王が、人格が切り替わったかのような怒号（いかど）を発し。

そこでようやく、記憶の空白は終わる。

両腕の剣を鋭く切り払いながら、十二歳の黒雪姫は考えたのだ。

あと四人、と。

レベル9から、最終レベルの10には、バーストポイントをどれだけ貯めても到達できない。システムが要求する条件は、同じレベル9バーストリンカーを五人全損させること。

そのルールを知ったからこそレッド・ライダーは王同士の不戦を訴え、ブラック・ロータスはライダーの首を落とした。加速世界の長い歴史の中で、《レベル9サドンデス・ルール》が実際に発動したのはその一回だけ——のはずだ。なぜなら黒雪姫は、狂気に身をゆだね、鬼神の如く戦ったにもかかわらず、他の王を誰一人討ち取れなかったのだから。いや、バトルロイヤルが終了して現実世界に戻るまで生き残っていたことが、万に一つの奇跡というべきかもしれない。

それから二年と十ヶ月が経つ今では、あの夜の記憶は薄赤い霞に閉ざされて、細部を思い出したい。だが、全ては現実の出来事だ。インストメニユーを開き、レベルアップ画面を見れば、レベル10到達に必要な五つのインジケータのうち、左端の一つが赤々と点灯している。そこに触れると、レッド・ライダーの名すら表示される。

だから——。

今、この場所に、初代赤の王が出現するはずがないのだ。

ISSキット本体の陰から現れた、テンガロンハットを被りリング型ガンベルトを装備した

鎧使、スタイルのデュエルアバターを凝視しながら、黒雪姫は意識の一部でどうにか考えた。何者かがライダーに化けている。もしくは、実体無き映像を見せられている。そのどちらかである可能性が高い。

しかし、理性でそう推測しつつも、直観では痛いほど感じている。声。口調。仕草。そして霧開気。全てが、初代赤の王、《銃匠》レッド・ライダーそのものだ、と。

立ち尽くす黒雪姫の隣に、一足早く衝撃から回復したらしい楓子、あきら、謡がびつたりと寄り添った。最年少の謡は、ライダーと直接対面した経験はごく少ないだろうが、黒雪姫と同じくらい古参である楓子とあきらは、戦場で何度となく遭遇し、言葉を交わし、戦っているはずだ。

だが二人は黒雪姫にも、二十メートル先に立つ赤色のアバターにも話しかけず、沈黙を守り続けた。全ての判断を委ねる、という仲間たちの意思が、わずかに触れ合う装束を通して画然と伝わった。

ライダーの首を落とした狂乱の一夜と、帝城でのネガ・ネビュラスの崩壊劇から四ヶ月後。

黒雪姫は、自分が、最も信じていた人間に深く欺かれ、操られていたことを知った。

同じ過ちは、二度と犯さない。自分で感じ、考え、選び、決めるのだ。新生ネガ・ネビュラスのマスターとして。今この瞬間、異なる場所で戦っているはずの、一つ年下の少年の《親》として。

漆黒の巨大眼球に寄りかかるガンスリンガーをひたと見据え、黒雪姫は最初の、そして決定的な言葉を口にした。

「お前は私が殺したはずだ、レッド・ライダー」

それを聞いた途端、赤いアバターは仄かな苦笑の気配を滲ませた。

「ああ、その通りだな。あの時は何つうか、天国から地獄で感じたやつだな。お触り厳禁の《絶対切斷》にいきなりハグされたと思ったら、コレだもんなあ」

右手の指二本を広げ、ちよきんと銃を閉じるジェスチャー。状況の正確な描写といい、少年つばさの残る言動といい、やはり赤の王当人とは思えない。

有り得ないことが起きているという驚愕と、心の奥底に埋めてきた記憶が瞬時に掘り返される衝撃に、体が抑えようもなく震えた。だが、両脚にありつただけの力を込め、黒雪姫はその場に立ち続けた。

五ヶ月前、二代目赤の王スカレット・レインの協力要請を受けて五代目クロム・ディザスターの討伐作戦に赴いたおり、黒雪姫は黄の王イエロー・レディオが保存していたライダー全損シーンのリブレイを見せられただけで零化現象を引き起こし動けなくなった。

いま眼前で進行している現象のインパクトは、録画映像とは比べものにならない。だが、たとえ何が起きようとも、二度と無様に倒れるつもりはない。

「……ならばお前はデュエルアバターの幽霊か、もしくはいちどポイント全損してもブレイ

ン・バーストを再インストールする手段を見つけた最初のバーストリンカーか、そのどちらかということになるな」

強く響かせた黒雪姫の声に、ライダーは帽子の鈎を傾け、少し考えるような仕草をした。

「そうだなあ、どっちかつたら前のほうだな」

「ほう、恨み高じて化けて出たというわけか。ならばちようどよかった、浄化能力持ちの巫女が同行しているゆえ、藏ってもらおうといい」

横の謡がびくっと体を縮める気配がしたその途端、楓子の手が神速で閃いて巫女アバターの後退を阻止する。二人のいつもと変わらぬコンビネーションに少したが勇気づけられ、黒雪姫は言葉を重ねた。

「——あるいは、言いたいことがあって現れたというなら、それを聞こう。私を糾弾する権利が……お前には、あるはずだからな」

もちろん、黒雪姫も、本物の幽霊が現れたと思っているわけではない。加速世界からは消えても、かつて赤の王だった少年は、今も現実世界の東京のどこかに暮らしているはずだからだ。しかも、自分がバーストリンカーだったという記憶を完全に失って。

しかしその一方、加速世界ではおよそ何が起きても不思議はない——システムが許す範囲に於いて、ではあるものの。ブレイン・バーストというフルダイブ型対戦格闘ゲームは、最古参の黒雪姫にさえいまだ全貌を見せてはいないのだ。だから、ゲームシステムが許容する形で、

デジタルな幽霊が現れる……ということは有り得るのかもしれない。

黒雪姫の問いかけに、ライダーはキット本体に寄りかかったまま腕を組み、答えた。

「ま、言いたいことがあるから出てきたのはその通りだけど、お前が想像してるみたいな恨みつらみじやないぜ。いまの俺は、もう知ってるからな。お前が不意打ちしてまで俺の首を落とした、本当の理由を」

「……なん、だ？」

この数分間で何度目かの巨大な驚きに打たれ、呆然と眩く。

黒雪姫が、赤の王を討った、本当の理由。

ほとんどのバーストリンカーは、誰よりも早くレベル10になろうとしたからだ、と思っているだろう。それは事実だが、事実の全てではない。あの惨劇の裏には、赤の王がアビリティ《銃器創造》によって生み出した拳銃型強化外装《セブン・ローズ》と、それらが加速世界を永遠に停滞させてしまうほどの究極的破壊兵器なのだ、と黒雪姫に告げた者の存在がある。しかしその真実を打ち明けた相手は、ネガ・ネビュラスの《四元素》と、《子》であるシルバー・クロウだけだ。彼らからライダーに情報伝わるはずがないし、だいたいその時にはもうライダーは全損していたのだ。

……いや、正確には、全ての事実を知る者が、もう一人いる。黒雪姫を巧妙に欺き、完璧に操った《人形遣い》が。

黒雪姫がそこまで考えた時。いままで沈黙を守っていたあきらが、小さな声を出した。
「色が」

「どうしたの、カレン？」

素早く問い質す楓子に、あきらはいっそう密やかに囁いた。

「あのアバター……色が変わり始めているの」

その言葉が耳に届くや、黒雪姫は二十メートル先に立つガンスリンガーをじっと凝視した。
ISSキット本体に寄り添って立つデュエルアバターの装甲色は、記憶にあるレッド・ライダーのそれとまったく同じ、いかなる形容詞をも拒絶するほど純粋な唯一無二の赤——。

いや、よくよく眼を凝らせば、あきららの言うとおり、薄暗がり沈む両足からじわじわと色が変わりつつある。濁った血液のような暗赤色から、夕暮れの紫色を経て、消し炭を思わせる艶のない黒へ。

四人の視線を感じたのか、ライダーも自分の両足を見下ろすと、軽く舌打ちした。

「ちっ、もう来やがったか。あと三分はいけると思っただけだな……」

「——それはどういう意味だ！ お前は本当にライダーなのか!? 何を言うために、この場に現れたんだ……!?」

状況がまるで掴めない奇立ちに駆られ、黒雪姫は叫んだ。

しかし、早くも腰近くまで黒変しつつあるガンスリンガーは、その問いに答えることなく、

まるで謝罪するかのように帽子の鈎を軽く持ち上げた。

「悪いな、ロータス。話の続きは戦ってからだ」

「な……なに……」

「いいな、勝てよ。あん時以上に、容赦なく、コテンパンに勝て。こいつのエネルギーを使わせれば使わせるほど、俺が俺でいられる時間が長くなるからな」

「……勝てとは、いったい、誰にだ」

「そりやあもちろん……俺に、さ」

両手を広げ、軽く肩をすくめた赤の王の、胸から首、そしてフェイスマスクまでもが炭の色に染まった。浅いV字形に刻まれたゴーグルの内部もまた、粘つくような闇に満たされた。

ぶうん、と不快な振動音を放ちながら、ゴーグルの奥に血の色の光が点灯した、その瞬間、さして大きくもないアバターの全身から、広いフロアを覆い尽くさんばかりの殺気が放たれ、黒雪姫たちを呑み込んだ。

底なしに餓えた、それでいてどこか無機質なこの波動には覚えがあった。ほんの数十分前、ミッドタウン・タワー北側の平地で戦った、マゼンタ・シザー配下のISSキットユーザーたちがまとっていたものと同質のオーラ。

固まって立つ四人が、ほんのいつとき体を強張らせた、その隙を狙い撃つかのように——。指先まで完全に黒化したレッド・ライダーの両手が、震むほどの速さで閃いた。ガンベルト

の両側にマウントされる二丁の拳銃を綱み、引き抜き、構えるのに要した時間は、ほぼゼロに等しかった。

——間に合った。

——ニコは、まだ、この世界に存在している。

黒い十字架に拘束されるスカーレット・レインの姿を眼にした瞬間、美早の胸に込み上げてきたのは滑らかな液体にも似た安堵だった。しかしコンマ一秒後、圧倒的な怒りがその液体に着火した。レインの装甲は各所で無残にひび割れ、意識を失っているのかアイレンズにも光がない。そのうえ、あたかも処刑される罪人の如く、両手を広げた姿で磔にされている。赤の王に——プロミネンスの頭首に対して、このような扱いは許さない。絶対に。

燃え上がる怒りの炎に衝き動かされ、美早はアルゴン・アレイのレーザーに貫かれた左肩の痛みも忘れて、凄猛な吼え声を轟かせた。レインを拘束しているブラック・バイスに、三階建ての屋上から一気に飛びかろうと身を沈める。だが、そこどうにか自分を抑える。

一辺五十メートルはあろうかという中庭の中央部にはバイスとアルゴンが並んで立ち、東側にはシルバー・クロウ、ライム・ベル、シアン・パイルの姿がある。ネガ・ネビュラスの若手

三人は、底知れぬ実力を秘める加速研究会の最高幹部二人に堂々と対峙している。この戦いは美早ひとりのものではない。戦端を開く権利は、ここまでバイスを追い続けたシルバー・クロウにある。

もう一度ニコに視線を送り、すぐに助ける、と胸中で誓ってから、美早はほぼ真下へと飛び降りた。中庭を斜めに横切り、クロウのすぐ傍まで移動すると、「お待ちせ」とだけ囁きかける。

実際、この場所に辿り着くまで、思った以上に時間がかかった。シアン・パイルとライム・ベルの力を借りて影のトンネルに突入したまでは良かったが、完全な闇の中で二人とはぐれ、別の出口に運ばれてしまったのだ。

しかし幸い——と言わば、薄暗い通路の先を走るアルゴンの姿を見つけたので、気付かれぬよう後を追うことで迷路じみた地下部分を抜けられた。地上に出たあたりで追跡がパレてしまったが、アルゴンはバイスとの合流を優先したらしく、レーザーの一发も撃とうとせず走り続けたので、美早もこうして決戦の場へと合流できたというわけだ。

加速研究会の本拠地が、こうも明けて広げで、しかも現実世界では大規模な学校であるらしいことには驚かされたが、情報の分析は後からいくらでもできる。今は、眼前の難敵二人を撃破し、ニコを取り戻すことだけに集中すべきだ。ミッドタウン・タワーに残った黒の王たち四人もそろそろ最寄りの離脱ポイントに到着するはずだが、ポータルから現実に戻り、生身の体を

動かしニコのケープルを抜くのに、どんなに急いでも三秒はかかるだろう。こちら側では五十分——それまでにパイスタチを撃破できれば良し、仮にできなくともレインだけは守り抜かなくてはならない。

決意も新たに、美早が両手の鉤爪をいっぱい伸ばした、その直後。

空から轟音とともに落下してきた七人目のパイストリンカーが、戦局にいつそうの混迷をもたらした。

美早は初め、乱入者が誰だか解らなかつた。しかし、シルバー・クロウが掠れ声で呼んだ名前には聞き覚えがあつた。

ウルフラム・サーベラス。加速世界に突如出現した、恐るべき新人。親も所属レギオンも一切不明ながら、初心者離れした戦闘センスと、脅威の防御アビリティ《物理無効》によつてミドルランカーすらも次々と撃破してのけた、対戦の天才。その噂は練馬にも届いている。主な出現エリアが青のレギオンや緑のレギオンの支配域ということもあって、美早はサーベラスの戦いぶりを直接観たことはまだないが、どうにかして一度はギャラリしておこうと思つていた。それが、よもやこの状況で初遭遇することになろうとは。

問題は、サーベラスが敵か味方か、ということだ。仮に敵となれば、ある意味ではパイスタチやアルゴンより警戒するべきかもしれない。何せ、こちらのアタッカー三人は揃つて物理攻撃オンリーの近接型なのだ。

瞬時にそこまで考えた美早の危機は、一秒後、現実となつた。

立ち上がった灰色のメタルカラー・アバターは、パイスタチとアルゴンに背中を向け、シルバー・クロウに正面から対峙したのだ。

ウルフラム・サーベラスは敵。すなわち、加速研究会のメンバー。

その認識を美早は胸に刻んだが、サーベラスの第一声は、少々予想外のものだった。

「……こんな形で、あなたと再会したくはなかつたです……クロウさん」

強い痛みを堪えるような口調は、演技とは思えない。応じるシルバー・クロウの声も、衝撃と同量の痛苦を含んでいるように感じられた。

「僕もだ、サーベラス。無制限フィールドに現れたつてことは……レベルを上げたのか?」
クロウの問いに、サーベラスはこくりと頷いた。

「ええ、最低限の4じゃなくて、クロウさんと同じ5まで」

「これで、レベルも対等か。でも……それなら、レベル1のままポイントを稼ぎ続けるつていう君の《役目》はもう終わったんだらう? 僕は君と、普通の対戦をしたい。何のしがらみもない、純粋な対戦を。だから……そこに立たないでくれ、サーベラス」

抑制されているが、どこか懸命な響きを帯びたクロウの言葉に、小柄なアバターは、今度は小さくかぶりを振つた。

「すみません……ここを動くことはできません。でも、クロウさんが木曜のバトルロイヤルの

あとに言ってくれたこと、嬉しかったですよ。リアルで、僕と会ってくれたことも」
 「……過去形にする必要はないよ。これからも、何度だって会えるんだ……君がそう望みさえすれば」

灰色と銀色のメタルカラーたちのやりとりは、限界まで張り詰めた極細のワイヤーを爪弾くような響きを含んでいた。双方向から強く引き合い、それゆえにいつ切れてしまっても不思議ではない、純粋で危うい交感。

「さっき、クロウさんが言ったとおり……僕に与えられた役目は、ほぼ完了しました。それはつまり、僕が存在を許される理由も失われたこととなります。今日を最後に、僕がこうやってクロウさんと話すことは、もうないでしょう……」

そう語るサーベラスが、狼を模したフェイスマスクの奥で仄かな微笑を浮かべていることを美早は感じた。対照的に、クロウは両拳をぎりりと握り締めると、激しさを増した口調で呼びかけた。

「サーベラス！《与えられた役目》だの《存在を許される理由》なんても、君には必要ない！ パーストリンカーなら、目標はいつだって自分で見つけるものだろ!？」

「……………」

俯いたサーベラスは、クロウの問いかけにすぐには答えようとしなかった。

代わりに流れたのは、相変わらず神経を逆なでする種類の笑いを含んだ、アルゴン・アレイ

の声だった。

「あはは、クロウ君、むっちゃカッコイイこと言うやん！ せやけど、やっぱボンボンやなあ。『パーストリンカーなら』とか、ウチよう言わんわ!」

アルゴンの混ぜっ返しを、隣のバイスがたしなめる。

「そういうことを言うものではないよ、アレイ。きみにだって目標の一つや二つはあるんじゃないのかい？」

「そらまあ、三つや四つないとは言わんけどな。そのうちのいつかが今日クリアされるから、こんな痛い思いしてまで付き合うとるわけやしな。やー、ほんま、なっがいが仕込みやっとなあ……苦労したで、まったく……」

「そのコメントは少々早いが早いというものだよ。わたしとしては、これ以上邪魔が入る前に始めて貰えると嬉しいんだが」

幹部二人のやり取りは謎めいていたが、美早は取って意識からシャットアウトしようとした。アルゴンのお喋りは、それ自体が幻惑型の間接攻撃であると、代償を払って学んだばかりだ。感わされる前に、こちらから攻めねばならない。

すぐ隣で、両拳を握ったまま立ち尽くすシルバー・クロウに、美早は短く囁きかけた。

「……ウルフラム・サーベラスは、任せていい？」

少しだけ時間がかかったものの、クロウの答えは明確だった。

「はい。彼は、僕が相手をお願いします」

「K。私はアルゴンを仕留める。パイルとベルは……」

美早がちらりと視線を振ると、青い大型アバターと緑の小型アバターは揃って頷いた。

「パイルですね。強敵ですが、今なら片腕を使えないはず。クロウとバドさんが戦っている間は、ぼくが何としても押さえておきます」

「援護は任せて、パイル。がんがん回復しちやうから！」

レベル5 パーストリンカーたちの頼もしい応答に、美早は小さく、しかし強い感情を込めて頷き返した。

レベルの合計数値だけを比べるならば、敵が8+8+5で21。味方が8+5+5+5で23。《対戦の聖地》アキハバラBGであれば——あの場所です人以上のチーム戦は行えないが——美早たちに賭ける客のほうが多いだろう。しかしウルフラム・サーベラスは数字では測れない実力を秘めているし、それは他の二人も同様。レベル8に上昇したばかりの美早が、遥か昔にそのレベルに到達したのであろうアルゴンやパイルを同格視するのは、大いなる思い上がりというものだ。

だがいつぼうで、ネガ・ネビュラスの三人も、ここぞという状況ではレベル以上の力を発揮する真の闘士たちだ。《時間遡行》という驚異的な力を持つライム・ベル、分厚い装甲の下に抜きん出た知力を秘めるシアン・パイル、そしてまだポテンシャルの底がまったく見えない

シルバー・クロウ。彼らと一結なら、この剣が峰もきつと乗り越えられる。

そして、ニコを——永遠の忠誠を誓ったマスターを取り戻すのだ。必ず。

美早はわずかに体を前傾させると、長らく封印してきた心意システムを発動させた。鋭い鉤爪を備えた両手から、夕陽の赤が色褪せるほど強烈な鮮血色の過剰光が迸った。

急激に高まる七人ぶんの闘気に呼応してか、中庭の上空がにわかにかき曇り、低い雷鳴が轟いた。

《銃匠》。

初代赤の王のその二つ名は、銃タイプの強化外装を自ら、幾つでも生み出せるという無二の力ゆえに与えられたものだ。

しかし、だからと言って、レッド・ライダーが他のネットゲームで言うところの《生産職》的存在だったということはまったくない。マスターの名が載せられた理由の半分は、卓越した銃さばきにある。

全身を闇色に染めたライダーは、電光の如きクイックドロウで構えた二丁拳銃のトリガーを躊躇うことなく引き絞った。ミッドタウン・タワー四十五階の広大なフロアに轟音が立て続け

に響き、しかしその時にはもう黒雪姫たちは左右へと大きく跳んでいた。

赤の王の主武装である強化外装は、固有名を「ヘリオス&エーオース」という二丁の回転式拳銃だ。シリンドラーの装弾数は六発なので、連射できる弾は二丁で十二発ということになる。

左右交互に引き金を引きながらも、赤の王はわずか二秒で全ての弾丸を撃ち尽くしてみせた。発射された弾のうち八発は、左に跳んだ黒雪姫とあきら、右に跳んだ楓子と謡の間を抜けたが、残る四発が恐るべき狙いの正確さで四人のクリティカル・ポイント——心臓へと追った。

「っ……！」

歯を食い縛りながら、黒雪姫は左手の剣の一振りで自分とあきらを狙う弾丸を弾き返した。

右側では、楓子が左右の掌打を繰り出し、二発の弾を粉砕する。胴体への直撃こそ防いだだが、銃弾の無傷での防衛は不可能だ。削りダメージを課せられ、体力ゲージがわずかだが減少する。それは楓子も同じはずだ。

シリンドラーの弾を撃ち尽くしたレッド・ライダーは、滑らかな動作で両手の拳銃を上向けた。チャットと軽やかな音を立てて弾倉がスイングアウトし、空になった薬莢がばらばらと落ちる。

「今だッ！」

仲間に向けて叫び、黒雪姫は猛然と床を蹴った。

意識の一部は今も、フォルダ分けされていないドライブのように混乱している。突如現れたレッド・ライダーは本物なのかそうでないのか。謎めいた言葉の意味は何なのか。なぜ突然色

が変わり、攻撃を仕掛けてきたのか。疑問は積み上がるいっぽうだ。

しかし、ISSキット本体に肉薄すれば、必然的に己の過去と向き合うことになるだろうと、黒雪姫は心の奥底で覚悟してもいた。シルバー・クロウから託された封印カードに交差拳銃の紋章を発見した時点で、初代赤の王が何らかの形で関わっていることは明らかだったのだから。

さすがに、こうも直接的な形でライダーと対面するとは予想していなかったが、だからと言って逃げることは許されない。ライダーが戦えと言うのなら戦うまでだ。あの日、黒雪姫の不意打ちによってわずか一秒で終了した《対戦》の続きを。

「お……おっ！」

決然と叫びながら、黒雪姫は右手の剣を振りかぶった。

赤系アバター最大の隙は、弾切れした瞬間。そのセオリーは赤の王として例外ではない。

空薬莢を排出した弾倉には、本来であれば、手で一発ずつ弾を込め直す作業が必要になる。

しかし、排莢とはほとんど同時にライダーの両腕の装甲が開き、中からアームつきの高速装填器が出現した。アームが伸び、空のシリンドラーに弾丸を六発同時に叩き込む。再びチャットという音を立ててシリンドラーがフレームに戻され、再装弾が完了する。銃を上向けてから、役目を果たしたローダーが腕に収納されるまで、わずか二秒。赤の王のアビリティ、《オートリロード》の効果だ。

第一線で戦っていた頃のレッド・ライダーは、この早撃ち早込めの技で青系アバターの接近

を許さず、がっちり防御を固めた緑系アバターすらも削りダメージだけで倒してのけたものだ。突進スピードに自信のある黒雪姫とても、ぎりぎり剣の間にに捉えられず速射に押し負けたことは何度もある。

だが今回は、戦闘の開始距離が二十メートルと比較的近かったことが幸いし、赤の王が再度銃を構えようとした時にはもう、黒雪姫は剣を振り下ろしていた。触れるもの全てを断ち切る『終決之剣』の刃が、ライダーの無防備な首筋へ――。

しかし。

黒雪姫の意図せざるところで、体の深いところがほんの一瞬、ごくわずかに震えた。振動が斬撃の軌道を狂わせ、刃は首ではなく、赤系にしては堅固な装甲に鑑われた左肩へと命中した。ギーン――と鈍い金属音が響き、ダメージ・エフェクトの光が飛び散る。肩を深く切り裂かれたせいで左手の拳銃は止まったが、受傷の痛みをまるで感じさせない動きで、ライダーは右手の拳銃をまっすぐ黒雪姫の胸へと向けた。指が、機械のように精密かつ冷酷な動きでトリガーを引いた。

銃口に炎の花が咲き、はば零距離から発射された銃弾が、ブラック・ロータスの胸部装甲――を危ういところでカバーした左腕の剣を捉えた。

再び、耳をつんざくような金属音。剣の鎧部分に色鮮やかな火花が飛び散り、体力ゲージが更に激減する。無論、ライダーの射撃は一発では終わらない。マシンガンの如き速さでトリポイントを守る剣を動かすこともできない。

着弾の衝撃で後方に押し戻されながら、黒雪姫は斬撃の軌道をぶれさせた震えの原因を痛いほど自覚していた。

それは、心の奥底に三年近く押し込まれていた恐れであり、後悔であり、罪悪感だ。赤の王を不意打ちによって全損させた自分への嫌悪が、アバターを動かすべき闘志を、ほんの瞬にせよ減ませた。半年前の零化現象と、原因としてはまったく同じ。

――無様な！

――私は彼に……ハルユキ君に約束したはずだ！ もう何も恐れない、過去から逃げようとはしない……たとえミッドタウン・タワーで何が待っているとも、一歩たりとも引き下らない、と！

黒雪姫が己を激しく叱咤すると同時に、ライダーが右手の拳銃（ヘリオス）を撃ち尽くした。六発の弾丸にピンポイントで連撃された左腕の剣が、びきっとかすかな、しかし不穏な響きを発した。

だが、剣はまだ折れずにそこにある。心だって、震えはしても挫かれてはいない。戦うのだ。

眼前の敵と——そして、自分の恐れと。

ガッ、と両足の尖端を床に突き立て、黒雪姫は後退を止めた。

赤の王は、右の拳銃をオートリロードしつつ、斬撃に押し戻された左の拳銃を再び構えた。

速い。まったく隙がない。赤系の究極型であるはずなのに、まるで両手に近接武器を持った青系と戦っているかのようだ。

接近戦を諦め、大きく後退して楓子、あきらと防御陣形を組み、攻撃は遠の長弓に任せるという選択肢もあるだろう。しかし、黒変する直前にライダーは言った。容赦なくコテンパンに勝て。そうすれば《俺が俺でいられる時間が長くなる》と。クレバーな作戦勝ちでその条件が満たせるとは思えないし、何より気持ちの面で、ここからの後退は負けに等しい。

仲間の助けを拒むほど意固地になるつもりはないが、せめて一太刀、会心の斬撃を叩き込んでからでなければ下がれない。だが、再びライダーを剣の間に挟み込んで提えるには、銃弾をガードしているだけではだめだ。弾丸が発射されるタイミングを先読みし、回避しつつ前に出なければならぬ。

……………先輩。

不意に、耳許で囁き声が聞こえた気がした。

……………銃口を見ちゃだめです。銃を持つ相手を見て、そいつの全身から、発射の気配を讀み取るんです。

やってみる！

頭の中で無意識にそう応え、黒雪姫はライダーの左手に握られる《エーオース》の黒々とした銃口から視線を外した。

全身を闇色に浸食された赤の王からは、会話中はわずかにせよ感じられた生気が完全に抜けて落ちている。しかしそのぶん、飢えたような殺意がまざまざと浮き上がる。V字形のゴーグルの奥に、血の色の光点が二つ、仄かに明滅した瞬間。

黒雪姫は、前方に身を投げ出しながら、あらん限りの力で床を蹴り飛ばした。

銃口が火を噴く。発射された弾丸が、ヘルメットの左右に長く伸びたアンテナ状パーツを掠める。ライダーは連射しつつ銃の狙いを下げ、それをかいくぐるように黒雪姫はいっそう身を沈める。加速した感覚の中で、ガアン、ガアン、と轟音が鳴り響くたび、音速近くで飛翔する金属塊が背中を擦る。

これ以上前傾したら床に倒れる、という所まで体を低くした時、六発目の弾がアーマースカートの端を砕きつつ後方へ抜けた。

視界には捉えられないが、今頃はもう右手の拳銃のリロードは終了しているはずだ。攻撃のチャンスは一度のみ。次こそは、心の奥底に刻み込まれた恐れを振り切り、全身全霊の一撃を放たねばならない。

「おおおおッ!!」

たけだけ
猛々しく叫びながら、
クロコギキ
黒雪姫は両腕の剣を広げた。

限界まで体を倒したこの体勢からでは、まともな斬撃は不可能。両腕の剣を振りかぶる余裕はないし、蹴り技も時間がかかりすぎる。これほどの近接状態から繰り出すことができる技を、黒雪姫はひとつしか持っていない。

再び床を蹴り、体を跳ね上げさせる。ライダーが下向きに構えようとしている（ヘリオス）の銃身を頭突きで押し戻し、双方のアバターを完全に密着させる。両腕をライダーの体に回し、二本の剣の切っ先を交差させる。

首と胴体の違いはあるが、三年前にこれと同じ状況を作るために、黒雪姫は赤の王を言葉と態度で欺いた。

しかし今回は違う。最初の連射から数えれば二十四発もの銃弾を躲し、弾き、かいくぐって問合いを零にしたのだ。

——私はもう、昔の私ではない!!

あらん限りの意思力を両腕に込め、黒雪姫は恐れを振り切って叫んだ。

「デス・バイ・エンブレイシング」!!

真紅の閃光が横一文字に煌めいた。妥協の余地のない、決然としたサウンド・エフェクトが高らかに響いた。

「ブラック・ロータスのレベル8必殺技は、ちようびガンベルトのラインで、赤の王の胸体を

上下に分断した。加速世界で発生し得る最大級の激痛に晒されているはずなのに、ライダーは声ひとつ漏らさず、尚も右手の拳銃を発射しようとした。首の完全切断はほぼ全てのデュエルアバターにとって即死級のダメージだが、胴体ならば生き残る場合もある。いっぽう黒雪姫は、大技発動後の硬直を課せられてすぐには動けない。

しかし、銃口が火を噴く寸前、後方から飛来した水滴がライダーのゴーグルを正確に叩いた。水は霧となって視界を閉ざし、銃の発射を妨げる。アクア・カレントが、ようやく回復してきた水流装甲の一部を鏝として放ったのだ。

続けて、赤々と燃える火矢がライダーの右腕に突き立った。アードー・メイデンは見事な腕前でアバター素体の《芯》を射貫き、《ヘリオス》を握る手を一時的に麻痺させる。ここまで追い込まれても、赤の王は声一つ上げず、左手の《エーオース》をリロードしようとした。

そこに、一陣の疾風と化して飛び込んだのは、青銀の髪をなびかせたスカイ・レイカーだった。ゲイルスラスターを瞬間的に噴かしたのだろう、通常の跳躍では不可能なスピードで赤の王に迫り、

「ハッ！」

短い気合いとともに右手の掌打を音高く撃ち込む。猛烈なインパクトに耐えかね、胸部の分厚い装甲が放射状に割り砕ける。炭屑のような破片を撒き散らしながらも、赤の王は恐るべき闘争本能で、両手の拳銃を前に向けようとする。

ここでようやく黒雪姫の硬直が終了した。身を屈めていた体勢を利用し、そのまま高々とジャンプ。空中を流れるライダーの上半身に向けて、右足の剣を垂直に蹴り上げる。

「セイアツ!!」

空中に描かれた青い三日月の軌跡が、ライダーの腹から頭へと抜け、トレードマークのテンガロンハットを真つ二つに切断した。

それが最後の一撃となった。体力ゲージ——存在するとして、だが——を全て失ったレッド・ライダーは、仰け反ろうとする上半身を空中で不自然に停止させ、直後、無数の黒い断片となって爆散した。

欠片たちが、飛び散る間にも漆黒の煙となって消えていく中、黒雪姫は伸身後方宙返りを経て着地した。後ろから駆け寄ってくる三人の仲間たちに、ゆっくりと向き直る。

「……サツちゃん……」

囁き声で呼びかける楓子に、黒雪姫は胸に溜めていた空気を一緒に短い言葉を返した。

「……偽物だ」

「……………」

じつと視線を向けてくる三人を見返し、少し語気を緩めて続ける。

「……ライダーの強さは、あんなものじゃなかった。たとえ四対一でも、一歩も引かずに撃って撃って撃ちまくり、撃ち勝って撃ち倒す……それがレッド・ライダーという男だったんだ。」

射撃の技術は再現していても、弾一発一発に込められた気合いはまったく違った。あいつが本物のライダーであるはずがない」

「でも、装甲色が変わる前の気配やしやべり方は、『銃匠』そのものだったの」

あきらの指摘に一度頷き、すぐにかぶりを振る。

「ああ……。だが……どことは言えないが、どこかが違った。それに、『対レベル9勝利数』も増えなかったしな」

ちらりと視界左側のシステムメッセージエリアを見ながら呟いた黒雪姫の言葉に――。

楓子でも、あきらでも、諺でもない声が答えた。

「ははは、そいつが増えたらえらいこったぜ。ここで俺の相手をしてるだけで、レベル10になれちまう」

「――!!」

素早く振り向いた四人が見たのは、フロア南側に鎮座する巨大眼球――ISSキット本体の瞳孔部分から、ひとつのアバターが排出されようとする光景だった。鋼広の帽子と大型のガンベルトを見るまでもなく、数十秒前に倒したばかりのレッド・ライダーであると解る。

「……………これは、どういうこと……?」

半透明の粘膜からずるりと体を引き抜くアバターを凝視しながら、楓子が驚きの声を上げた。床に降り立ったライダーは、鉛筆つきのブーツを鳴らして歩き始めながら、のんびりした

声を発した。

「言ったる、俺は幽霊みたいなモンだって。ある意味じゃ本物のレッド・ライダーだが、同時にどうしようもなく偽物……そのあたりを解って貰うには、一回は戦う必要があったんだよな。撃ちまくって悪かったな、ロータス」

「い、いや……それはお互い様だが……」

呆然と呟いてから、黒雪姫は気を取り直し、鋭く叫んだ。

「……本物だろうと偽物だろうと、そろそろ思わせぶりなことばかり言うのはやめろ！ お前はいつた何なんだ!? どんな理屈でこの場に現れたり、再生したりしているんだ!?」

「そう怒るなよ、全部教えるからさ。お前たちが前のやつを完璧にブツ壊してくれたおかげで、今度こそ、しばらくは『俺』でいられそうだしな……」

そこまで言うのと、赤の王は戦う意思がないことを示すためか、黒雪姫たちから十メートルほど離れた場所で立ち止まり、大理石の床にあぐらをかいて座った。指先で近寄れとゼスチャーするので、警戒しながら歩み寄る。

囁き声が聞こえるほどの距離まで近づき、足を止めた黒雪姫を見上げ、ライダーは落ち着いた声で恐るべき言葉を告げた。

「俺は幽霊だが、自分の意思で化けて出たわけじゃない。お前に首を落とされて全損した俺を、あるパーストリンカーが、限定的に生き返らせたんだ。自分の目的を実現するためのパーツと、

「い、な」

「い……生き返らせた……だと……？ 体力ゲージがゼロになって死んだのではなく……ポイント全損して、加速世界から消滅したバーストリンカーを、か……？」

そう訊き返した黒雪姫の声は、自分のものとは思えないほど掠れ、戦慄していた。左右に並ぶ楓子たちも、言葉もなく立ち尽くしている。

有り得ない。バーストポイントとを全て失ったバーストリンカーは、《最終消滅現象》を経て加速世界から永遠に退場し、ニュロリンカーにインストールされたブレイン・バースト・プログラムも完全に消去される。

正確には、ポイントが0になった瞬間ではなく、その状態で戦闘の勝敗判定を受けた時点でということになるが——たとえば、ショップでうっかりポイントがちょうど0になるまで買物をしてしまっても、次の対戦までにリカバリーすれば強制退場は免れる——、赤の王の場合はレベル9サドデス・ルールによって全損したので、救済は不可能だったはずだ。もちろん、《蘇生》も。

ネガ・ネビュラスのトップ四人を驚愕の渦に叩き込んだライダーは、床の上で軽く肩をすくめ、説明を加えた。

「限定的に、つつたろ？ 今の俺は、三年前にお前と戦って消えたレッド・ライダーの《影》
有り体に言えどアゾンビだ。現実世界の本体は、加速世界の記憶を全部失ったまゝ、今頃は

平和な学生生活を送っているんだろうさ。……問題のシーンの記憶がないから断言はできねけど、恐らく誰かが必殺技、あるいは心意技で、俺の魂みてるモノのコピーを作り出して、あいつに……後ろに転がってるでっけえ目玉に憑依させたんだ」

「魂の、コピーを……憑依……」

黒雪姫が幾つかの単語を繰り返すと、左側で誰かが小さくかぶりを振りながら囁いた。

「それが本当なら……生き返らせた、とは言えないのです。加速世界から去った者の魂を複製し、己の目的のために利用する……そんな力は、《蘇生術》ではなく《死霊術》と呼ぶべきなのです」

「ほんとうにそうね……。——でも、どうして？ その誰かは、なぜそんなことを……？」

楓子の問いかけに、赤の王の《影》は静かに答えた。

「もちろん、レッド・ライダーの能力を利用するためだ。アビリティ《銃器創造》で、自分の望む強化外装を作らせるために、そいつはライダーのゾンビである俺を作り、依代であるあの目玉に寄生させたんだ」

赤の王の言葉はあまりに衝撃的で、黒雪姫は隠された情報を咀嚼するのに精一杯だったが、それでもいまの説明に出てきた《強化外装》が何を指すのかは即座に理解できた。

「……ISSキット、だな？ 加速世界にばらまかれているあの目玉は、お前のアビリティによって作られていた……そういうことなんだな……？」

「言っとくが、デザインもスベックも俺が決めたわけじゃねえぜ。そもそも、デカ目玉に呑み込まれてる時の俺は、なんつうかメインスイッチが切られてて、見たり聞いたり考えたりできねえんだ。こうして出てこられるのは、デカ目玉がエネルギーを大量に消費して、回復モードになってる時だけだ。今がまさにそうなんだけだな」

「……さっき我々が倒した貴様を再生するためにエネルギーを消費した、ということか。だからお前は、コテンパンに勝て、などと言ったのか」

「そのとおり。ちなみに、最初の俺が出てこられたのは、デカ目玉が防衛のためにチビ目玉を山ほど実体化させたせいだ。そいづらも、お前たちが片っ端から潰しちまったわけだけだな」
「なるほど……つまり、あの目玉がエネルギーを回復したら、お前はまたさっきのように黒くなって、我々に襲いかかってくるというわけだな」

「実務的な確認のつもりでそう訊ねたのだが、ライダーは謝罪するようにテンガロンハットの兜をひょいと持ち上げた。

「済まねえが、そういうことだ。まあ、本物の俺よりはだいぶ弱つちいはずだけどな。でも今んところは、あとちょつとは喋っていられそうだ」

ライダーの説明が事実であるなら、今のうちに得られる限りの情報を得ておかねばならない。しかし訊きたいことが余りに多すぎて、咄嗟に優先順位をつけにくい。判那の迷いにとらわれ、黒雪姫が言葉を止めた短い静寂を、あきらの声が刺し貫いた。

「そもそも、あれは何なの」

あれ、のところで後方の巨大眼球型オブジェクトに視線を送りながら発せられた問いに、赤の王は明快に答えた。

「どうやらエネミーでも、強化外装でもねえ。あれは恐らくデュエルアバターだ」

更なる驚きに打たれ、黒雪姫、楓子、諒は同時に息を吸い込んだ。しかしあきらは、さすがブラッド・レバードの《親》というべきか、時間を無駄にせず問いを重ねた。

「ということは、あの目玉……ISSキット本体を、私たちと同じバーストリンカーが動かしているということなの？」

「問題はそこだな。エネミーなら、タイムもされてねえのにああもじつとしてるわけがねえし、強化外装なら《変遷》の時に消滅してるはずだ。それに、あのデカ目玉には、確かに感情や意思なんてえなものがある。ただ……バーストリンカーだとすると、どうやってこんなに長期間、無制限フィールドに入りっぱなしでいられるのが解らねえ。ゾンビである俺は普段は時間を感じねえが、依代のあいつはそうはいかねえはずだ。何せ、あいつがこの場所に出現してから、こつちじゃ少なくとも五十年は経ってるはずなんだ」

「……五十年だと!?」

思わず叫んでしまうが、ISSキットが加速世界で初めて確認されてから、すでに現実時間で二週間以上が経過している。その間に、確かに無制限中立フィールドでは五十年近い時間が

流れた計算になる。それだけの年月を連続タイプするというのは、内部的、外部的事情から、限りなく不可能に近い。

そもそも、直径三メートルもの球体で、表面は脳髄を思わせる肉質装甲に覆われ、手も足もない代わりに巨大な一つ目を持ち、しかも体の内側にボールを閉じ込められる、などというデュエルアバターが存在し得るものだろうか？ いったいどんな《心の傷》から、そんなアバターが生まれてくるというのか……？

有り得ない、と感じるいつぼうで、もしかしたらと考える自分もいる。ISSキットをばらまいているのは加速研究会だ。《災禍の鎧》クロム・ディザスターを実質的に製造し、《ヘルメス・コード縦走レース》を破壊し、神獣級エネミー《大天使メタトロン》すらティムしたあの組織なら、もはや何をしかけても不思議はない。恐らくは、全損したレッド・ライダーをゾンビ化し、利用した者も研究会のメンバーに違いないのだ。

そう、そして何より加速研究会は、《略奪者》ダスク・テイカーを失兵として黒雪姫不在の梅郷中学校を蹂躪し、有田春雪、黛拓武、倉嶋千百合の三人を散々苦しめた。研究会は加速世界に大いなる混沌と争乱をもたらすために活動している。そんな連中ならば、今は想像もつかない邪悪な手段で、ISSキット本体の如きデュエルアバターを生み出すこともできるのかもしれない。

「……ライダー」

驚きと違和感を振り捨てた声で、黒雪姫はかつての友であり、己の手で命を断ったバーストリンカーに呼びかけた。

「私は……我々は、あの巨大な目玉を完全に破壊しなくてはならん。デュエルアバターであろ
うと、なかろうと。そして……その結果、今ここに存在するお前が消滅するのだとしても」

すると、床に腰を下ろしたままのガンスリンガーは、仄かな苦笑の気配を漏らした。

「やめてくれ、なんて言うはずねえだろ。今の俺は、ぼんやりした意識の中で、ひたすら糞みてえな強化外装を作らされるだけのゾンビだ。俺はずーっと待ってたんだよ、終わらせてくれる奴を。それが、ロータス、お前だったのは……」

その先は言葉にせず、赤の王は再び肩をすくめると、口調を切り替えて言った。

「でもな、いざ戦うとなったら、アイツは強えぜ。どんな攻撃をしてくるかは俺にも解らねえが、とんでもなく強えのだけは間違いない。ただの置物だと思わねえで、最初から全力で行
けよ」

「……解った」

黒雪姫が頷くと、ライダーは帽子の鈎を引っ張り、両足を前に伸ばしてから身軽な動作で立ち上がった。振り向こうとするライダーに、あきらが呼びかけた。

「《BK》、もう一つ教えて」

「懐かしいアダ名だな。何だよ、《純水無色》？」

「あなたの能力で作られて、加速世界にばらまかれたISSキットたちは、本体が破壊されれば全部死ぬの？」

確かに、それは確認しておくべきことだ。現在の最優先事項は、キット本体に吞み込まれていないポータルから現実世界へと離脱し、ブラック・パイプに拉致されたニコのケープルを抜くことだが、そもそも今日のミッションの目的は、ISSキット端末を無害化して、感染者たち——ことに梅郷中の保健室に残してきたアッシュ・ローラーこと日下部繪への精神干渉を止めることなのだ。

——しかし。

あきらの質問を聞いたライダーは、一瞬動きを止めてから、大きく左右にかぶりを振った。「いや……。多分、デカ目玉が死んでもチビ目玉は道連れにはならねえな。確かにデカいのと、俺が作られたチビどもは、あのポータルを通して繋がってる。デカ目玉が消滅すりゃあ情報交換みてえなことはできなくなるだろうが、単体のチビはそのまま生き残るはずだ」

「そ……そんな!! それじゃあ、アッシュさんは……!!」

か細い声で、謡が叫んだ。衝撃を受けたのは黒雪姫も同じだった。今まで、本体が破壊されれば端末も死ぬと信じて疑わなかったのだ。

だがそこで、あきらが強張ってはいるが冷静な声を出した。

「情報交換、つまり精神干渉を止まれば、当面の危機は回避できるはずなの。キットを消す

方法は、あとからみんなで相談すればいい」

「あつ……そ、そうだったのです。時間がかかっても大丈夫なら、私がアッシュさんに寄生したキットを、絶対に浄化して……」

勢い込んでそう言いかけた謡を、赤の王が遮った。

「それには及ばねえよ、嬢ちゃん。俺が作っちゃったモンは、俺が責任持って無力化するさ」

「……どうやって、ですか？」

「ロータスたちは知ってるだろうが、俺は自分が作った強化外装の安全装置を、遠隔で操作できるんだ。加速世界のどこにあらうと、な。そいつは、ここから生まれたチビ目玉はもちろん、自己増殖で増えた目玉も例外じゃねえ」

「……………」

小さく息を吸い込んでから、黒雪姫は素早くかぶりを振った。

「お前の《遠隔セーフティ》能力を忘れたわけではないが……しかし、ISSキット端末のどこにも、交差拳銃のエンブレムなどくっついていないかったぞ? あれがセーフティ機構の本体なのだろう?」

「さっきも言ったが、俺がデザインしたわけじゃねえからな。だが、俺が作った強化外装なら、必ずどこかにある。今はデカ目玉のほうが優位だから俺はチビどもに干渉できねえが、お前たちがデカいのを破壊すれば、その瞬間にチビ全体のセーフティをロックしてみせる。ゾンビに

なっちまっても、それくらいのパライドは残ってるからな」

静かに宣言すると、ライダーは改めて四人に背を向けた。気障な仕草で右手の親指をぴつと立て、フロアの奥に鎮座する巨大眼球に向けて歩いていく。

決して大きくはない《銃匠》の背中に、黒雪姫は最後のひと言を投げ掛けた。

「ライダー！ お前は……」

——本当に、言いたいことはないのか。卑劣な不意打ちによってバーストリンカーとしての命を奪い、赤のレギオンを崩壊させたこの私への怒りや恨みを、そのアバターに溜め込んではいないのか。

しかし、のど元まで込み上げたものを言葉にすることはできなかった。ただ自分が案になりたいがゆえの問いかけだと解っていたからだ。

代わりに黒雪姫は、似て非なる質問をひとつだけ口にした。

「……お前はさっき言ったな。三年前、私がお前を全損させた理由を、今はもう知っていると。どうやって知ったんだ？」

「知ったつつか、状況から推測したただけだな。でも間違っちゃいねえと思うぜ」

歩みを止めずに、ライダーは答えた。

「さっき言ったとおり、俺をゾンビ化させた奴の記憶はねえ、残念ながらも。でもそいつは、七王会議のフィールドにいたはずだ。で、たまたまロータスが俺を全損させたから、これ幸い

と蘇生させた？ いや、そんなわけねえだろ。最初から狙ってた、と考えるべきだ。黒の王を焚き付けて赤の王の首を取らせ、秘密裏に自分の操り人形にするっていう筋書きを、な……。そんなことができる奴は……」

そこで言葉を切り、レッド・ライダーは少しだけ振り向いた。鋭利な形状のゴーグルが、広間を分断する亀裂から差し込む夕陽を受けてきらりと光った。

「……こつから先は、お前が自分で答えを見つけるんだ。あばよ、ロータス。《四元素》の三人もな。《矛盾存在》にもよろしく言っといてくれ。それと……プロミを離いでくれた二代目、あんがとよ、あとは任せた、つてな」

再び右手を持ち上げ、今度は人差し指と中指を揃えて軽く振ると、初代赤の王は巨大眼球の瞳孔へと足を踏み入れた。半透明の粘膜がずぶずぶとアバターを吞み込み、黒ずんだ瞳が緩慢に瞬きすると、そこにはもういかなる痕跡も残っていかなかった。

自分の内側を満たす感情が何なのか、黒雪姫には解らなかつた。恐れでも怒りでも悲しみでもなく、しかしそれら全てを含む高圧のエネルギーが、今にもアバターの装甲を内側から割り砕いてしまいうるのだ。

「……サツちゃん」

張り詰めた気配を察したのか、櫛子がそと背中に触れてきた。大きく息を吸い、吐き出すと、黒雪姫は自分を抑えながら三人の仲間たちへと告げた。

「——やるべきことは変わらない。持てる力の限りを尽くして、ISSキット本体を破壊する」

「……そうね。わたしたちは、そのためにここに来たんだものね」

「必ず、やり遂げるの」

「頑張るのです！」

楓子に続き、あきら、謡も声を上げた。

ISSキット本体は、エネミーでも強化外装でもなく、デュエルアバターである。

レッド・ライダーの影はそう告げた。だとすれば、あの巨大眼球を作り出したのは黒雪姫たちと同じ生身の人間……歳の近い少年もしくは少女だということになる。そして、内部に取り込んだ赤の王の能力を利用して闇の心意を注入した強化外装を大量に製造し、加速世界に拡散させた。

それが、彼または彼女が望んでしたことなのかどうかは解らない。ただ加速研究会に操られているだけ、という可能性はある。しかし、たとえても、事ここに至れば戦うしかないのだ。バーストリンカーとして、ひとたび戦場に向かい合ったならば、ひたすら「対戦」あるのみ。戦って初めて解ることがあり、伝わるものがある。たとえ相手が、物言わぬ巨大な眼球だとしても——。

黒雪姫たちの決意に反応したのか、ISSキット本体の瞳孔が、再び色を変えた。

内部に取り込んだポータルの青色から——静脈血のような暗赤色へ。

ずわわっ、と重い振動音を轟かせ、脳髓に酷似したデザインの球殻表面から、粘液質の闇が大量に放たれた。悪意が可視化したときかと思えないそのオーラは、二十メートル離れて身構える四人のところにまで押し寄せ、装甲表面を無数の針で突き刺されるが如き感覚をもたらした。

「これが……全部、心意の過剰光だというの……」

楓子が喘ぐように叫びながら、右手を掲げる。掌から水色に輝く波紋が広がり、闇のオーラを押し戻す。過剰光そのものは攻撃力を持たないが、正のオーラがそれに触れた者を温め、勇気づけるのに対し、負のオーラは冷気にも似た効果でアバターを硬直させる。

黒雪姫も、あきら、謡と同時にそれぞれの色の過剰光で体を包み、冷たい闇を遠ざけた。キット本体が言葉を理解できるのかどうかは不明だが、念のために小声で指示する。

「あの図体なら小回りは利かないはずだ！ 一気に接近し、後方に回り込んで叩く！」

了解！ と三人が声を揃え、腰を落として黒雪姫の指示を待つ。

「と……」

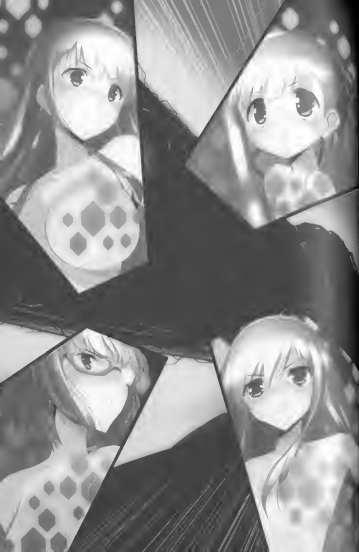
つげき、と叫ぼうとした、その寸前。

眼球全体を包むオーラが、瞳孔の一点に集中し——漆黒のビームとなつて発射された。

ISSキット特有の遠隔型心意技、〈ターク・ショット〉。だが、規模は端末感染者たちが操るものの数十倍。

あたかも大天使メタトロンの超高熱レーザーの反風性攻撃であるかの如く、触れるもの全て

を削り、喰らい、消し去る虚無の奔流が、黒雪姫たちを呑み込めんと追った。



いちど戦場にダイブしたならば、相手が誰だろうとひたすら対戦あるのみ。

それが、剣の主たる黒雪姫の教えだ。

ハルユキがウルフラム・サーベラスと初めて戦ったのは五日前、六月二十五日の夕方。その時は、《飛行》の上を取る超反応力と、《物理無効》アビリティの圧倒的な堅さに手も足も出ず完壁に負けた。

再戦したのは、翌二十六日。黒雪姫に特訓してもらった《柔法》と、打撃ではなく投げ技を主とする戦術によって物理無効を無効化し、終わりに際際にサーベラスの人格が切り替わるというアクシデントはあったものの勝利を収めた。

更に明くる二十七日、木曜日。それまでの中野第二エリアではなく杉並第二エリアを戦場とするバトルロイヤルに引き込まれたハルユキは、サーベラスと三たび対峙した。激闘の最中、アルゴン・アレイに乱入されて勝負は流れたものの、対戦終了後に現実世界でサーベラスと一瞬だが対面することができた。

拳を交わすほどに心も近づいている、という実感はあった。このまま対戦を続けていれば、いつかきつと本当の友達になれる。ハルユキはそう信じていた。しかしよもや、四度目の遭遇

が、このような形になろうとは。

サーベラスとアルゴン、ひいては加速研究会に深い関係があることは覚悟していた。かつてアルゴンが提唱したという《心傷療理論》、それに基づいた《人造メタルカラー計画》の成功例がサーベラスなのではないかと考えもした。だから、タイミング合わせの方法はともかく、この決戦の場に彼が現れたことは、ある意味では必然なのかもしれない。

——でも、ここで、会いたくはなかった。

兩陣営の闘気がせめぎ合う利耶の静寂の中、ハルユキは痛切にそう考えた。

影の回廊に飛び込み、警護エネミーをいくぐり、三人の心意攻撃を束ねて破壊不能の壁を壊してこの場所まで辿り着いたのは、ひとえにニコを取り戻すためだ。それだけが何としても達成すべき目標であり、邪魔するものは全力で排除せねばならない。行動に優先順位をつけるような甘さは最早許されない。たとえ相手が、いつか解り合えると確信していたウルフラム・サーベラスであろうとも。

真摯な対戦を通してのみ、伝わるものがある。それが黒雪姫の教えの意味。

だが、これから行われる戦いは、尋常な対戦とはなるまい。最初から心意システム全開の、何でもありの殺し合いだ。サーベラスとハルユキを繋ぐ、ささやかな糸など瞬時に千切れ飛んでしまうほどの。

——それでも。

僕は、君と、自分を信じる。

ハルユキが胸の奥で呟いたその瞬間、ひととき強い風が中庭を吹き抜け、礼拝堂らしい尖塔に立つ十字架を軋ませた。それを合図に、ブラック・パイスを除く六人が、一気に動いた。

「うおおおッ！」

吼えながらダッシュするハルユキの前方で、サーベラスが両の拳を音高く打ち据えた。狼のあざとを模したヘルメットバイザーが、わずかに数ミリの隙間だけを残して上下から噛み合う。

《物理無効》アビリティが発動したのだ。この状態のサーベラスに通用するハルユキの攻撃は、地面への投げ技と、光属性ダメージを持つ必殺技《ヘッドバット》のみ。どちらも警戒された状況で仕掛けられ、間違いない回避されてカウンターを喰らう。

しかし、それはあくまで、ノーマルな対戦での話だ。

躊躇いを打ち捨て、ハルユキは右手に銀色の過剰光を宿した。防御態勢を取るサーベラスの、強固なクロスガードの中心点を狙い、本来の間の二メートル外から貫手攻撃を繰り出す。同時に、技名発声。

「――《光線剣!!》」

硝子質のサウンドを響かせ、白銀のオーラで形作られた剣が右手の先から瞬時に伸びた。

サーベラスの《物理無効》は、青のレギオンの重武装アバター《フロスト・ホーン》のシヨ

ルダーチャージを無傷で受け止めるほどの絶対的防御力を誇る。本来なら、シルバー・クロウの華奢な手による突き技など軽々とガードされ、それどころか逆に指を全て割られ砕かれるだろう。

しかし、ここに一つの原則が存在する。《心意技は心意技でしか防御できない》。加速世界の事象を書き換える心意システムの前には、どんな装甲もアビリティも無力なのだ。黒雪姫は、その原則に対応する約束として、《心意技は心意技で攻撃された時しか使ってはならない》とハルユキを強く戒めたが、いまだけは取って約束を破る。たとえ心意の暗黒面に引きずられようとも、ニコを助けるための代償ならば構わない。

ハルユキ渾身の心意技は、サーベラスの両腕を包むタンダステン装甲を紙細工の如く貫き、その奥にある仮想の心臓をも粉々に吹き飛ばした――はずだった。

しかし。

右手を襲ったのは、高圧の静電気が放電したかのような、パチッとする反発力だった。心意剣の切っ先はサーベラスの装甲に触れることすらできずに激しく弾かれ、反動でハルユキ自身も後ろに押し戻された。

どうにか踏み留まりながら、驚愕の目を睜がったハルユキが見たものは、タンダステン装甲の表面を覆う、紫色の光の膜だった。

サーベラスは必殺技名を発声していない。それ以前に、必殺技では心意技を防御できない。つまりあの発光現象は、ハルユキの光線剣と同じく、心意システムが生み出す過剰光だ。

濃淡のある紫色がマーブル模様を作って轟くさまにかすかな既視感を覚えたが、それはすぐに圧倒的な驚愕に上塗りされてしまった。左側ではバドさん対アルゴン、右側ではパイス対タクム・チュリの戦闘が開始されているが、そちらを見る余裕もなく掠れ声で叫ぶ。

「サーベラス……君も、心意システムを……!?」

オーラを宿す両腕を体の前がちりクロスさせたまま、サーベラスは上半分だけ露出するヘルメットを傾かせた。

「ええ、これがないと無制限フィールドでは戦えない、と言われましたから。技の名前は知りませんが」

その言い方は少し不自然だったが、それにも気づけないほどハルユキの驚きは深かった。早すぎる。あまりにも。

ウルフラム・サーベラスが加速世界に出現したのは、ハルユキとの初遭遇の三日前。つまり、対戦を始めてからたった八日しか経っていない、ということになる。もちろん、デビュー前に訓練期間を取っていたということは考えられるが、つい最近までレベル1だった彼が心意システムを、しかも実戦で使えるレベルでマスターしているというのは、もう《天才》のひと言では片付けられない異常事態だ。

絶句するハルユキから一瞬だけ視線を外したサーベラスは、左右の戦場の様子を確かめると小声で続けた。

「これだけは、伝えておくべきでしょうね。……以前、クロウさんは《二番》とお会いになったと思いますが……」

「あ……ああ。君の左肩に宿ってる、何て言うか……別人格、だろ？ 僕は、サーベラスⅡって呼んでるけど……」

「ふふ、そっちのほうがかっこいいですね。《二番》と、《一番》である僕は確かに別の人格ですが、これはいわゆる多重人格のような心理的な現象でわけじゃなくて、もつと根本的な《別人》なんです。《二番》はもともと、サーベラスじゃない名前を持つ、独立した一人のバーストリンカーだったんですよ」

「独立した……バーストリンカー、だった……?」

言葉の意味を瞬時には理解できず、ハルユキは呆然と繰り返した。サーベラスは頷き、何かに耐えるような口調で続けた。

「詳しいことは……いつか、アルゴンさんにでも聞いて下さい。僕がクロウさんに伝えたいのは、今の僕は、限定的にはありますが、人格チェンジなしに《二番》の力を使えるってことなんです。この場所まで空を飛んできたのは、《二番》のアビリティ《能力捕食》の……正確に言えば、彼が前の対戦でクロウさんからコピーした《飛行》アビリティの力なんです。使えば使うほど持続時間が減るので、飛べるのはほんの数秒ですけど」

「……………!!」

驚きに息を詰めながらも、ハルユキは意識の一部で納得してもいた。数分前、サーベラスが空から落ちてきた時、飛行可能アバターとしてサーベラスⅡを連想したことはまさしく正解を得ていたわけだ。

そう言えば、シルバー・クロウの腕を喰って能力を複製した時、Ⅱが妙なことを言っていた。自分の力は《強奪》ではない、あいつと違って。そのような言葉だった。どういう意味なのかとゴグルの下で顔をしかめたその時、サーベラスが再び口を開いた。

「……そして、これが本題なんですが……レベル5に上昇したことで、僕は《二番》だけじゃなくて、《三番》の力もある程度使えるようになったんです。この心意技は……《三番》のものなんです」

「な……………」

いっそうの驚愕に見舞われながら、ハルユキは視線を下げ、サーベラスの両腕を見た。紫のマーブル模様を描く過剰光は、サーベラスの装甲を守っているというよりも、取り憑いているかの如く生物的に蠕動している。心意システムに関してはまだまだ経験の浅いハルユキだが、これくらいは判る。《三番》が何者なのかは不明だが、この紫のオーラは間違いなく、正ではなく負の心意から生まれたものだ。

「だ……だめだ、サーベラス」

ほんのメーートル先に立つ小柄なメタルカラーに向けて、ハルユキは縮むように感さかけた。

「他人の心意技なんて、使っちゃだめだ。そんなことしたら、君自身がそいつの暗黒面に引きずられて……」

だが、そこで言葉を切り、強く奥歯を噛み締める。

尋常の力では防衛不可能な心意技を、先に使ったのはハルユキのほうだ。サーベラスにしてみれば、たとえ借り物の心意技であろうと、それがなければ理不尽極まる一撃死に見舞われていた。だから、今となつては、技を使うと言う権利はハルユキにはない。

サーベラスは、そんなハルユキの苦悩すら忖度したように、そつとかぶりを振った。

「クロウさんの言いたいことは解ります。僕も、この力を使うほどに、自分の中の何かが削られていくのを感じています。でも……僕には、他の選択肢はないんです。クロウさん、あなたがそうであるように」

低く掠れた、しかし強い決意に満たされた声が、ハルユキの意識を打った。我知らず頷き返しながら、ハルユキは胸の奥で呟いていた。

——確かに、僕はもう決めたはずだ。何があろうと、何を犠牲にしても、ニコを助けるって。ここで躊躇うことは許されない。できることは、たった一つ。

「……………ああ、そうだな。覚悟が足りなかったのは僕のほうだ。サーベラス、仲間を助けるために、僕は君と戦う」

改めて固めた決意とともに投げ掛けた言葉は、等しく強い意思によって受け止められた。

「望むところです、クロウさん。僕も、僕が望むもののために戦います。全力で来て下さい。そうでないと、今の僕は倒せない」

サーベラスのその宣言は、最早確かな事実だった。

レベルも、ステータスも、心意技すらも、全てが同条件。勝敗を分かちつものは、互いの技と心の強さの他にない。

腰を落とし、両手を構え、ハルユキはサーベラスのバイザーを——その奥にいる、少し髪の毛を落とした少年を見詰めた。

今この瞬間から、人造メタルカラー計画や、〈二番〉や〈三番〉のことは忘れる。戦う理由があり、戦いの場に対峙しているのなら、他には何も必要ない。

——行くぞ!!

無音の叫びを白銀のオーラに変えて全身から放ち、ハルユキは地面を蹴った。

サーベラスも、両腕に紫の波動をまといながら真正面から突撃してくる。

心意技が最強の武器であるという事実に変わりはないが、互いに心意が使えるとなった以上、安易には頼れない。技名発声や事前動作が必要な心意攻撃は容易にタイミングを読めるため、闇雲に繰り出すだけでは回避されカウンターを喰らってしまうのだ。それは必殺技も同様だが、精神状態によつては発動に失敗することもある心意技のほうがリスクは高い。

ゆえにハルユキは、両腕に防禦のための過剰光を宿しただけの状態で、サーベラスの体当た

りを迎え撃とうとした。

狙いは柔法からの投げ技、すなわち〈受け返し〉だ。シルバー・クロウの銀甲よりも遙かに硬いタンダステン装甲に守られたサーベラスの額が、目と鼻の先にまで迫った瞬間、思い切り体を沈ませる。必殺の頭突きを回避しつつ、両手でサーベラスの左腕を掴みにいく。

三度目の対戦では、取って投げられた上でのグラウンド勝負に引き込まれて大いに苦戦した。しかしあの戦術は、地面に雪が積もった氷雪ステージだから可能だったことだ。黄昏ステージの地面は大理石のタイルに覆われ、クッションになるものは何もない。

サーベラスは、ハルユキの投げを押し潰すつもりか、頭突きからボディプレスに切り替えて真上から体を溶びせてきた。だが黒雪姫直伝の〈柔法〉は、密着した状態からでも相手の力のベクトルとモーメントを操れる。左腕を捉え、サーベラスの前転運動を更に加速。同時に腹に右膝を押し当て、巴投げの体勢に——。

「おおおっ!!」

突如、若き狼が吼えた。そしてハルユキは見た。サーベラスの背中から、おぼろに揺らめく半透明の翼が伸びるのを。

ぐんつ、と狼の体が真下に加速した。幻の翼はほんの一瞬だけ推力を発生すると空気に溶けて消えたが、ハルユキの投げを潰すにはそれで充分だった。翼による加速に重金属の質量が加わったボディプレスを跳ね返せず、背中から地面に打ち付けられる。

「ぐっ……」

小さく声を漏らし、体をバウンドさせるハルユキの背後に、サーベラスが電光石火の早業で回り込んだ。両腕を首、両足を腰回りに巻き付け、フルパワーで締め上げる。タングステン装甲の鋭く尖ったエッジがシルバー・クロウの銀装甲に食い込み、無数の火花を散らす。

ここまででは三日前のバトルロイヤルとは同じ展開だが、一つだけ違うのは、サーベラスが正面ではなく後ろから締め技を仕掛けていることだ。これでは《ヘッドバット》は使えない。前回同様、背中の翼も展開できないので、急上昇からの落下攻撃や水平飛行による削り攻撃も不可能。

万力のようなブレッツシャーに耐えるハルユキの耳に、サーベラスの囁き声が届いた。

「すみません、翼の使用可能時間、ほんの一秒だけ取っておいたんです。これでもう、今回の対戦では使えませんがね」

「な……るほど、な。相変わらず……対応が、早いな、まっ……たく」

どうにかそう答えたものの、体力ゲージはじわじわと減り続けている。メタトロン攻略戦の終了時で残り約五割にまでなっていたものが、今ついに半分を割って黄色に変わる。チュリと合流した時に《シトロン・コール》で回復して貰えればベストコンディションで戦えたのだが、ダメージを受けてから時間が経ちすぎていたので残念ながら不可能だった。

もちろん、現在の戦いで受けた傷ならば回復可能だが、それをあてにしているようではサー

ベラスには勝てない。この苦境を、自分の知恵と力で逆転しなくてはならない。

焦るな。落ち着いて、できることをするんだ。

まるで緩む気配のない圧力に抗いながら、ハルユキは感情を鎮め、状況に集中しようとした。感情や闘争心の爆発から生み出される力は、確かに強い。しかしそれだけでは壊せない壁が存在することを、メタトロン攻略戦の最中に学んだばかりだ。研ぎ澄まされた集中力によって小さな突破口を穿つ、そういう戦い方が求められる時もある。

不意に、頭の中のスイッチが切り替わるかのように、ハルユキの意識が一段階加速した。これまで、激戦のクライマックスで何度か訪れた超加速感覚。空気の色が変わり、世界の音が遠ざかる。静かな時間の中、ハルユキは考える。

——今、僕に残されている武器は何だ。

シルバー・クロウ最大の武器である翼は、もちろん使えない。背中からホルドされているせいで、ヘッドバットも効果はない。新たな力であるメタトロン・ウィングも、この状況から展開できるかどうかは解らない。心意技も、紫色の防衛オーラに阻まれて装甲まで届かない。ないない尽くしたが、数少ない好材料は、両腕が完全にフリーなことだ。素手で《物理無効》状態のサーベラスの腕や胴体を攻撃しても埒があかないが、仰向けで拘束されているこの体勢からできることが、一つだけ存在する。

「……時間のかかる、ホルド技は、ミスチョイス……だぞ、サーベラス」

切れ切れに喘ぎ、ハルユキは両腕を正面の空へと高くかざした。

両手に心意の光を宿す。まず右手のオーラを引き延ばし、空中に銀色の槍を作り出す。左手を槍の根本に添え、限界まで引き絞られた大型弩砲をイメージする。

「……何を……？」

耳許で呟いたサーベラスにはもう答えず、ハルユキはさつと両腕を動かすと、瞬時に狙いを定めながら叫んだ。

「——〔光線投槍〕!!」

ズバツ！ と空気を揺らして、心意の槍が地面と平行に飛んだ。

ホーミング能力のない〔ジャベリン〕で、背後のサーベラスは撃てない。

しかし、サーベラスがハルユキを倒すためにハルユキと戦っているのに対して、ハルユキはサーベラスを倒すためにサーベラスと戦っているのではないのだ。目的は最初からたった一つ——ニコを、赤の王スカーレット・レインを助けること。そのために撃つべきは、ニコを拘束し、恐らくは意識をも封じている漆黒の十字架。

夕焼けの赤に染まる中庭に白銀の軌跡を引いて飛んだ心意の槍は、祭壇に屹立する十字架の根本に命中し、幅二十センチほどの薄板を半ばまで粉碎した。少し離れた所に立つブラック・パイプが、顔をさつとハルユキに向ける。しかし、左手は十字架に変形させているし、右手は何枚もの盾に覆えてタクムの猛攻を防いでいるので、ハルユキを攻撃する手段はない。

「もう一発！」

叫び、ハルユキは再びジャベリンの発射モーションに入った。中庭の南側で、バドさんと目まぐるしい戦いを繰り広げるアルゴンが、苛立ったような声を発した。

「何やつとんねん、イーちゃん！ 最後の仕事くらいキツチリ決めて見せえ！」

「くっ……」

サーベラスは短い呼吸を漏らすと、ハルユキの体を左に倒そうとした。遠隔技の射角を奪うためだろうが、両手両足を絞め技に使っているとはそう簡単に体を入れ替えられない。ハルユキは左手を地面に突き、限界までサーベラスの動きに抗つてから——いきなり手を外し、自分自身も左へと思い切り体を回転させた。

モーメントが加速され、サーベラスは勢いよく左側に九十度回転し、ハルユキはほんの少しだけ緩んだ絞め技の中で更に百八十度回った。必然的に、背中を取られた状態から、顔と顔を向き合わせる形へと移行した、その刹那。

露出した背中から、いままで押さえつけられていた金属翼をいっばいに展開し、即座にフルパワーで振動させる。絡み合う両者の体が浮き上がった瞬間、サーベラスは素早く四肢による拘束を外した。高空まで持ち上げられることを避けた、その選択は間違ではない。しかし、ハルユキには最初から高く飛ぶつもりはなかった。アルゴンに狙撃される危険性が高まるし、何より落下ダメージによる相討ちではこの戦いは負けなのだ。ハルユキは、サーベラスを退け、

ニコを助けねばならないのだから。

「りやあッ!」

ほんの一メートル足らず浮いた状態から、地面に片膝を突くサーベラス目掛けて突進する。空中で反転し、顔面を狙って右後ろの回し蹴りを繰り出す。サーベラスは両腕を高く上げて防御。もちろんダメー지는通らないが、蹴りはガードを上げさせる布石だ。翼を使って瞬時に着地し、心意の光を宿したままの右拳を、がら空きになったサーベラスのボディに撃ち込む。

危惧した通り、腕だけでなく体にも紫のオーラが発生し、パンチを防ごうとした。恐らくは、サーベラスが能動的に心意技を使っているというよりも、相手の心意に反応する自動防御的な仕組みなのだろうが、それゆえに熟練者と比べれば反応速度がわずかに遅い。ハルユキも心意システムに関してはまだまだ未熟だが、技を発動させるのではなく過剰光で強化された打撃を繰り出すだけなら、通常対戦とほとんど変わらないスピードを出せる自信はある。

銀光を宿した右フックは、惜しいところで紫のオーラに阻まれて再びパチツと火花を散らした。だが、サーベラスが反発力で体勢を崩したのに対して、現象を予測していたハルユキはその反動を利用して体軸を回転、左フックへと繋げる。タイムラグなしの連撃に、防御オーラの発生がほんの一瞬遅れた。

パチンツ!

またしても激しいスパーク。しかし今度は、拳の突端がタシグステン装甲を穿ち、左手が押し戻されると同時に右足を深く踏み込み、三撃目となる右の肘打ちを、装甲の薄いみぞおちに深々と突き刺す――。

「ぐっ……」

サーベラスが短い声を漏らした。ついにハルユキの連撃スピードが紫オーラの反応スピードを上回ったのだ。《物理無効》アビリティも、心意強化された打撃を完全には防げない。肘打ちの威力が装甲の下のアバター素体へと徹り、ダメー지를与えると同時に体勢を崩す。

――ここでラッシュユ!

「おおおおッ!!」

雄叫びを上げながら、ハルユキは翼の瞬間推力を利用した三次元連続攻撃、《エアリアル・コンボ》を開始した。拳足と肘、膝、頭までも駆使する目まぐるしい連撃が、空中に幾つもの火花を咲かせる。全弾が紫のオーラを貫けるわけではなく、半分はノーダメーじで阻まれるが、意に介さずコンボを続ける。

サーベラスは防御に徹しつつ再び組み付く隙を狙っているようだが、《物理無効》と《心意防御》がともに破られつつある今、守るだけではジリ貧だ。数秒でそれに気付いたのだから、ゴーグルの奥で両眼を強く輝かせるとともに、

「くおっ!」

鋭い気合いの籠もった右ストレートパンチを、ハルユキの左フックに合わせてきた。完壁な

タイミングのカウンター攻撃だったが、ハルユキは無意識の操作で左の翼を震わせ、体を右に五センチだけスライドさせる。サーベラスの拳がヘルメットの側面を擦りながら抜けていくと同時に、カウンターのカウンターとなる右アッパーを放つ。

だがサーベラスは、恐るべき反応速度で顔を傾けて拳を回避。すかさず右手でハルユキの後頭部を押さえ、ムエタイ式膝蹴りを繰り返し出してくる。右足を上げて辛くもガードすると、膝と膝の衝突で発生した大量の火花が双方の顔を下から照らす。

額が触れ合うほどの距離で、ハルユキとサーベラスは刹那の視線を交換した。

このまま、どちらかが倒れるまで打ち合う。

互いの意思が、フェイスマスクの間に青白いスパークとなつて弾けた。

同時に大きく跳び退り、すかさず地面を蹴つて——前へ。

二人のメタルカラーの格闘戦は、離れた場所からは零距离で銃器を撃ち合っているようにしか見えなかっただろう。拳を腕でガードし、蹴りを脛でガードし、時には打撃同士が激突するたびに過剰光と火花が混じつたパライクルが空中に花を咲かせる。銃撃にも似た衝突音が連続して轟き、周囲の空気を陽炎のように揺らめかせる。

ハルユキの《空中連続攻撃》は技の手数とバリエーションで勝っているが、元々の防御力と一撃の威力ではサーベラスのほうが上だ。削りダメージの蓄積度合いはほぼ互角。どちらが先にクリーンヒットを入れるか、言い換えればどちらが攻撃スピードで相手を上回るかで、勝負

が決まる。

「う………おおおおお——ッ!!」

全身全霊の連撃を続けながらハルユキが腹の底から声を絞り出すと、

「し………あああああ——ッ!!」

サーベラスもそれに応えた。現実世界でこんなラッシュをすれば、空気を吸うのに精一杯でとても叫んだりではできないだろうが、加速世界の肉体は酸素を必要としない。代わりに消費されるのは、魂そのもののエネルギー。自分を信じ、仲間を思い、闘志を燃やすことで生み出される力だ。

超高速の格闘戦を繰り返しながらも、ハルユキの拡張された知覚力は、左右で戦う仲間たちの様子を感じ取ることができた。

再びビーストモードに変身したバドさんは、両手からデイズスター化していた時のハルユキよりも長い心意の鉤爪を、口からはサーベルタイガーのような心意の牙を伸ばし、マシガンのようにレーザー弾を乱射するアルゴン・アレイと真つ向から渡り合っている。

タカムは右手の鉄杭を《着刃剣》に変え、ブラック・バイスが同じように右手を変形させた何枚もの盾を猛然と攻め続けている。バイスが拘束技を使わないのは、盾を引込める隙がないからだろう。タッグを組むチユリは、教室の壁を破るために突如として心意システムを発動させた時の消耗がまた抜けないのだろう、後方に下がってはいるものの、いざという時は

タクムを回復させるために左手の《クワイアー・チャイム》をしかりと構えている。

彼らの奮戦はもちろんニコを助けるためのものだが、ハルユキにサーベラスと一対一で戦う機会を作ってくれてもいるのだ。いや、パドさん、タクム、チュリだけではない。心意技を手ほどきしてくれた楓子、《光学誘導》を開眼させてくれた諷、ポイント全損の危機から救ってくれたあきら、ライバルとして鎬を削ったアッシュ・ローラー、そしてこの世界の扉を開けてくれた黒雪姫——他にもたくさんの人々が、いまハルユキに戦う力を与えてくれている。それは、祭壇に拘束されるニコや、エネミーである大天使メタトロン、眼前で拳を交えているサーベラスすら例外ではない。

限界ぎりぎりのラッシュを続けながら、ハルユキは意識の一部で呼びかけた。

サーベラス。

——君は強い。純粹な才能だけを比べるなら、僕は君に遠く及ばないのかもしれない。

——でも、君がそうやって苦しみや悲しみだけを握り締めた拳で戦っている間は、僕は、勝てない！

「おおおお！」

何度目かの、そして最大の咆哮に乗せて放ったハルユキの右アッパーカットが、サーベラスの鉄壁の守りをついに破った。何自分の一秒という単位、しかし決定的な速度差でブロックをすり抜けた拳は、鉄を破したフェイスマスクの左眼を衝撃に撃ち抜いた。紫のオーラも間



に合わず、心意の光を宿した一撃はタングステン装甲を稲妻状にひび割れさせ、小柄なアバタを高くと空に舞わせた。

追撃のチャンスではあったが、ハルユキはまっすぐ拳を天に向けたままサーベラスが落ちてくるのを待った。伝わった、と信じたからだ。拳を通して、ハルユキを支えているエネルギーの大きさ、熱さ、そして力強さが。

数秒後、激しい金属音を響かせて、サーベラスは背中から地面に激突した。大の字に手足を広げたまま、立ち上がる様子はない。

右手を下ろし、ハルユキは灰色の狼に歩み寄った。言葉を掛けるより早く、顎から目許近くまでジグザグにひび割れたフェイスマスク越しに、密やかな声が届いた。

「……殴り合いで、負けたのは……初めてです」

「……そうか」

頷くハルユキに、少しかだけ顔を向けてサーベラスは再び呟いた。

「二度目の対戦で、クロウさんの投げ技に完敗した時……僕は、言いましたよね。負けたけど嬉しい、頑張って強くなります、って」

「……うん」

「でも、本当はあの時、すごく悔しかったんです。体がかーっと熱くなつて、涙が滲みそうになるくらい、悔しかった。でも……僕はバカだから、悔しいって言えなかった。本当は、くそ

ーっ、ちくしょうーって叫びたかったのに、叫べなかった……」

いつしか、ハルユキたちの左右でも戦いが一時中断していた。タクムたちだけでなく、アルゴンやバイスまでも、油断なく身構えつつもサーベラスの言葉に耳を傾けているようだ。

「……あの時、アバターの操作権が(二番)に移動したのは、僕が自分の感情を……闘争心を押し殺して、(零化)してしまったせいなんです。彼は、クロウさんと戦えて喜んでましたけどね……」

仄かな微笑の気配を漏らすと、サーベラスはハルユキとの激闘によって無数の小傷が刻まれた右拳をゆっくり持ち上げ、しかし自分の腕を支える力さえ残っていないのか、再び地面に落とした。がしやりという音が合図になったかのように、狼のあぎとを模したバイザーが上下に開いた。露出したゴーグルが、黄昏ステージの夕焼け空を映し出した。

「……でも、今は、悔しさはありません」

どこか透徹した声で、サーベラスは言った。

「僕は、僕の全てを出し尽くした。技も、速さも、アビリティも、(二番)や(三番)の力さえも総動員して、無我夢中で戦った。ほんの一瞬ですけど、僕が戦う理由とか、課せられた役目のことも忘れて……本当の(対戦)をしたんだ。僕は……これで、満足です。報われました、充分に……」

そう囁いたサーベラスの、ゴーグルに刻まれた細いクラックから、透明な雫が一粒滲み出し、

灰色の金属装甲を伝って流れた。それを見た瞬間、ハルユキは一步踏み出し、少し語気を強めて語りかけていた。

「……何を言ってるんだ、サーベラス。まだ、たった一度じゃないか。本物の対戦がしたいなら、これから何度だってできる」

答えは——二粒目の涙だった。

「クロウさん。対戦の前に、僕は言いましたよね……僕が存在を許される理由は失われた、クロウさんと話すことはもうないでしょう、って。それは、僕にはどうすることもできない決定事項なんです」

「そんなこと……」

叫ぼうとするハルユキを、サーベラスの静謐な視線が押し止める。そこに込められた何かが、もしかしたら誇りであり、矜持であり、覚悟であるものが、ハルユキの言葉を封じる。

「僕は、バーストリンカーでいる限り、彼ら……加速研究会には逆らえない。なぜなら彼らは、僕が邪魔だと思った時には、ブレイン・バーストを取り上げることが躊躇わないでしょうから、でも……そんな僕でも、たった一つだけ、自分で決められることがあるんです。それは、加速世界からどういふに消えるか、です」

その言葉が静かに響いた途端、アルゴンとバイスの気配がほんの少しだけ変わった。しかしバドさんとタカムが心算の武器を構え、牽制する。

「彼らの計画では、僕はこの時、この場所で、アバターだけを残して消える……いえ、違う、モハ、変わる事になっていました。でも、それだけは、どうしてもいやだった。だから……僕、彼らに隠してバーストポイントの残高を調整してきました。今の僕の残りポイントは、10です」

「……………!!」

瞬間、ハルユキは鋭く喘ぎ、アルゴンたちもいっそうの緊迫感を漂わせた。

残り10ポイント。かつてハルユキが陥った、残り2ポイントという絶体絶命の大ピンチに比べればやや余裕はあるが、文句なしの瀕死状態には違いない。つまり、先刻の戦いで、同じレベル5であるハルユキが手を止めずにとどめを刺したら、サーベラスはその瞬間にポイント全損、完全消滅していたことになる。

本能的に一步下がろうとしたハルユキを、強い意志を秘めた言葉が引き留めた。

「近頃のエネミー相手に全損することも考えましたが、あの人相手ではそれも万全じゃない。だから僕は賭けたんです。クロウさんは必ずこの場所に、友達を助けに来るって。そこで僕と戦って、どっちが勝っても負けても、僕の話聞いてくれるって」

サーベラスは左手を地面に突くと、満身創痍の upper body をよろよろと持ち上げた。ひび割れたゴードルの奥に、五日前に出会って以来いちばん強く、真っ直ぐな光を浮かべ、若き狼は言った。

「クロウさん。僕を連れて東京の外まで……誰にも見つけられない加速世界の果ての果てまで飛んで、そこで僕を全損させて下さい。それ以外に、クロウさんの友達を助ける方法はない」

その言葉に、即座に従うことはおろか、真意を問い質すことすらハルユキにはできなかった。立ち尽くし、呆然と眼を見開いていると、誰かの忍びやかな笑い声が聴覚を撫でた。

「ふ、ふふ、あははは……」

両腕で細身の体を抱き、巨大な帽子をゆらゆらさせながら笑っているのは、《四眼の分析者》アルゴン・アレイだった。

「あはは、こら参った。まさかそこまでするなんてなあ、やるやないのイーちゃん。嬉しいで、育ての親としてはな。ほんま、大きゅうなったなあ」

笑いを取め、両腰に手を当てて何度か頷く。

「加速研からイーちゃんみたいな立派なBBブレイヤー、もといバーストリンカーが出るやなんて、こういうのをえーと、青は藍色より青いとかゆうんやよねえ。ってそんな当たり前やがな、ナイトー君が聞いたたら怒るで、あはは。……まあ、でも、イーちゃんが親離れすんのはまだちーつと……千年くらい早いかなあ」

喋り続けるアルゴンと、サーベラスを結ぶライン上にはバドさんが油断無く降取っている。不意打ちでレーザーを発射されても心算の爪で弾ける位置だ。しかし先日のパトルロイナルと

違って、アルゴンが仕置きのためにサーベラスを撃つ可能性は低い。残り少ない体力ゲージが消滅して死んでしまっただけ。元も子もないからだ。

ならば、アルゴンは、いかにしてサーベラスに《役目》を強要するつもりなのか。

ハルユキの疑問に、分析者は予想外の言葉で答えた。

「イーちゃん、ごめんなあ。どうやら、《零化》せえへんかったら自分のまんまでいられるみたいに思ってるみたいやけど……会長はんの《反魂》は、そんな生やさしい技やないねん。ほんま、どないな悪魔と契約したらあんな……」

「アレイ」

不意にブラック・バイスが短い声を発し、アルゴンの独白を遮った。ひょいと肩をすくめ、分析者は口調を変えて続けた。

「ま、そういうわけやから、堪忍やでイーちゃん。向こうに戻ったら、こっちの学食でゴハン奢ったるから、氣イ悪くせんとな」

「……何を言われても、僕はこれ以上命令に従うつもりはありません。あなたたちは間違ってる。こんなこと……しちやいないんだ」

毅然とそう言い返し、サーベラスは地面からハルユキに向けて右手を伸ばした。

「クロウさん、早く僕を連れて離脱して下さい。そうすれば彼らは、クロウさんの仲間とこれ以上戦おうとはしないはず。無駄なことは一切しない……それが彼らの行動規範ですから」

差し出された手を凝視したまま、ハルユキは利那の迷途に襲われた。

戦闘開始前に自分に強く言い聞かせたとおり、今ただひとつ為すべきはニコの奪還であり、他の目的と優先順位を達しようなことは絶対に許されない。だがサーベラスの言葉が本当なら、ここで彼を倒しても問題は解消されないらしいし、加えてそれをすればサーベラスはポイント全損してしまう。

そもそも、アルゴンやバイスはなぜこの場にサーベラスを召喚したのか。

それはきっと、ニコに何らかの《処理》を施すために必要だからだ。つまり、サーベラスの言うとおり、彼を遠くまで運んで隔離すれば、ニコの危機もしばし遠ざかる——はずだ。瞬時の思考でそこまで判断したハルユキは、躊躇いを振り切り、サーベラスの手を掴んだ。ハルユキの手をしっかりと握り返しながら、サーベラスは声を低めて言った。

「本当は……僕がこの場所に来ずに、一人でどこか遠くに消えれば、それが一番良かったのかもしれません。でも……僕は最後に、クロウさんと戦いたかった。心ゆくまで戦って……お礼を言いたかった……」

「……サーベラス」

右手に、ダメージが発生しないぎりぎりの握力を込めながら、ハルユキはようやく固まった決意を口にした。

「ひとまず君の言うとおりにする。でも、全損なんかさせない。きっと何か方法があるはずだ。

レインも、君も、両方を救う方法が」

返事を待たず、十数メートル離れた場所で背中を向けるバドさんに、少しだけここをお願いしますと言おうとした——

その時だった。

「あるわけないやん」

一切の陽気さが削げ落ちた、真冬の本枯らしのように冷たく乾いた声 flowed.

「誰かを助ける方法なんて、この世界にはいっこともないや。だってこの世界には最初から、救済は用意されてへんのやから。あるんは憎しみ、争い、裏切り、欺瞞、蹂躪、慟哭、絶望、エトセトラ、エトセトラや。今、坊やたちに教えたるわ。加速世界の残酷さっちゅうもんをな……」

寒々とした声音をいったん途切れさせたアルゴン・アレイは、腰に当てていた両手をだらりとぶら下げ、ゴーグルに覆われた顔を少し傾けて言った。

「出番やで、ミーちゃん。——サーベラス・ナンバー・スリー、アクティベート」

必殺技名の発声かと反射的に考え、ハルユキは全身を緊張させた。しかしそうではなかった。現象が起きたのは、アルゴンではなく、ハルユキの手を掴んだままのウルフラム・サーベラスだった。

顔に装着されたバイザーが、ギリギリと軋みながら上下から閉じ始めたのだ。それはサーベ

ラスの意図せざる変化だったらしく、小さな喘ぎ声を漏らすや、左手でバイザーの動きを止めようとする。だが、分厚い金属装甲は、まるで高出力の油圧装置でも内蔵されているかの如く着実に狭まり続ける。五センチ以上も露出していたゴーグルが、みるみる狼の牙に覆い隠されていく。

「サーベラス……!」

ハルユキは掠れ声で呼びかけ、左手を伸ばすと上側のバイザーを掴んだ。すると、装甲越しでも、まるでドライアイスのような冷たさが指先を刺した。いや、凍っているのではない。サーベラスの装甲表面に、ごく薄い過剰光が滲み出ているのだ。紫色のそれは、光というよりもある種の粘液の如くうねうねと蠢いている。

「クロウ……さん……!」

ゴーグルの露出幅が一センチを切った時、サーベラスが苦しげな声を出した。

「すみま、せん……まさか、こんな……強制的に、『三番』を目覚めさせる、なんて……!」

「負けるな、サーベラス! 自分を保つんだ!」

必死に呼びかけながら、ハルユキは残り五ミリとなったバイザーの隙間に、懸命に指先をこじ入れようとした。だが、エッジの立った重金属は、ハルユキの銀装甲を容赦なく削りながら閉じていく。残り三ミリ、二ミリ……。

「送けて、クロウさん。あいつが……出てくる、前に……!」

それが、サーベラスの——いや(エイ)ちゃん——ことサーベラスの、最後の言葉となった。がちゃん! と大型裁断機を思わせる金属音を放ち、バイザーが完全に閉じた。衝撃で左手は弾き出されたが、緊い右手を離すまいと、ハルユキは懸命に力を込めた。

「サーベラス! 諦めるな、サーベラス!!」

必死の呼びかけにも、隙間無く噛み合った狼のあざとはもう何の反応も返さない。小柄なメタルカラーは、あたかも金属製の彫像と化してしまっただけのように、大理石のタイル上に座り続けている。

突然、ざり、ざり、という新たな軋み音。発生源は、顔のバイザーではなく、その斜め下——肩アーマーだ。フェイスマスクとよく似たデザインの新装甲を横切るジグザグのラインが、少しずつ開いていく。同じ現象を、二度目の対戦の終盤に、ハルユキは目撃している。顔のバイザーが閉じ、肩のアーマーが開くとウルフラム・サーベラスはロジック不明の人格交代を引き起こすのだ。

だが。

四日前とは、現象の発生位置が違った。

ハルユキの眼前で開いていくのは、左肩ではなく、右肩のアーマーだ。ぎざぎざの隙間から漏れる光も、左肩——(二番)が赤だったのに対して、右肩は暗い紫。先刻の対戦で、サーベラスを自動防衛していたオーラの色と、まったく同じ。

がちん！と鈍い音を放って、右の肩アーマーが完全に開いた。
直後、ハルユキは、強烈な寒気が背中を駆け上るのを感じた。本能的な反応で右手を離し、飛び退ろうとしたが、わずかに遅かった。サーベラスの手から進んだ鉤爪状のオーラが、ハルユキの右手の装甲を深々と抉り、三本の傷を刻み込んだ。
そんなはずはないのに、ダメージの感触に憶えがある気がした。硬質の鋭器に引き裂かれるのではなく、具現化した虚無に空間ごと削り取られる感覚。かつて何度も何度もシルバー・クロウの装甲を傷つけた、誰かの技……………。

立ち尽くすハルユキの眼前で、不可視の糸に引っ張られたかのように、ゆらりとサーベラスが立ち上がった。紫の鉤爪を具現化したままの右手で、ぎこちなく顔面を覆う。その奥から、何か奇妙な音が漏れてくる。空回りする歯車のような、鉄板に滴る水滴のような——
いや、これは笑い声だ。喉の奥から発せられる、く、く、く、という嘲笑。サーベラスも、IIも、こんなふうに笑ったことは一度もなかった。なのに、ハルユキの記憶はまたしても強烈に描き込まれる。

——こんなふうに笑う相手を、僕は知っている。

——でも、知りたくない。思い出したくない。

そんなハルユキの思考すらも嘲笑うかのように、灰色のデュエルアバターはただ右手を

下ろし、凶悪なフォルムの鉤爪越しに言葉を発した。

「……………ようやく、会えましたね。お久しぶりです、有田先輩」

ISSキット本体から発射された特大サイズのダーク・ショットを、楓子と議は右へ、黒雪姫とあきらは左に跳んで回避しようとした。

キットユーザーが操る同種の技なら、充分な余裕を持って躲けたらう。しかし、漆黒の眼球が放った心意ビームの直径はあまりにも太すぎた。本流に吞まれることはかろうじて避けたものの、周囲に飛散する闇の飛沫がアバターに付着し、装甲表面に小さな穴を幾つも穿った。水の針で突き刺されるような感覚と同時に、体力ゲージがわずかに、しかし無視できない幅で減少した。

「く……!!」

黒雪姫は、着地と同時に思わず歯噛みした。キット本体とはまた二十メートル以上離れている。この間合いで回避してもこれはどの削りダメージを受けてしまうなら、近距離でダーク・ショットを撃たれた場合、減り幅は数倍になると思わねばならない。もちろん、回避できずに直撃されれば即死すら有り得る。

と言つて、距離を保つての撃ち合いは更なる悪手だ。純粹な遠隔型がアードー・メイデンに一人では擾乱もままならない。馬鹿正直な火力勝負では、恐らく撃ち負ける。

黒雪姫にそう判断させたのは、四人が回避したダーク・ショットがそのままミッドタウン・タワー四十五階のフロアを横切り、北側の壁に大穴を開けて、彼方の夕空へと飛び去っていく光景だった。もし光線技ではなく実体弾だったら、赤坂サカスあたりに着弾して大破壊を引き起こしていたらう。いや、照準が斜め下を向けば実際にそうなる。

「……あんなの何度も撃たれたら、ビルがなくなっちゃうの!」

隣に立つあきらが小声で囁いた。確かに、それも懸念すべき展開だ。

「その場合は……中にポータルを呑み込んでいる以上、キット本体だけが空中に残ってしまう……のか?」

黒雪姫の呟きに、流水装甲を六割ほど再生させたフェイスマスクがこくりと頷く。

「たぶん、そうなの!」

「では、長期戦はまずい……接近して、一気に片付けるしかないのか!」

その作戦にコメントしたのは、少し右に離れたところで身構える楓子だった。

「でも、アレがISSキットの親玉である以上、接近戦用の技……《ダーク・ブロー》も使えるはずよ。手がいないのにどうやって撃つかは解らないけれど!」

「……あの目玉に手足が生えるところは見たくないな。くそつ、今更だが、遠近両方の心意技を無制限に使えるなど無茶苦茶もいいところだ!」

毒づく黒雪姫に、隣のあきらが冷静な声で応じる。

「だから、使えなくしなきゃならないの」

「そうだな……」

小声で言い交わす四人を、巨大眼珠は半ば閉じた瞼の下から、無機質な害意に満ちた視線で照準し続けている。一歩でも近づけば、いや戦意を高めるだけで再び大口徑ターク・ショットを撃ってくるだろう。次に動く時は、四人全員が勝利の確信と不退転の決意を抱いていなければならない。

問題は、キット本体の体力ゲージが見えないことだ。それもまた本体がエネミーにあらざることの証左と言えるが、たとえレッド・ライダーの影が言ったとおり黒雪姫たちと同じバーストリンカーなのだとしても、体力ゲージの総量までが同じだとは限らない。何から何まで規格外の存在である以上、極論すれば、四神クラスの体力を備えている可能性すら有り得るのだ。せめて、四人が最大の技を一撃ずつ叩き込めば破壊できる、という目算でもなければとても突撃などできない。

「……こうして睨み合っている時間も浪費するばかりだな」

黒雪姫は、押し殺した声で呟いた。

今頃、アルゴン・アレイとブラック・パイスを追った四人は強敵相手に厳しい戦いを強いられているだろう。パイスたちがこのミッドタウン・タワーに現れていないことは、シルバー・クロウたちの奮闘が続いている証だ。

一刻も早くボーターを取り戻し、ニコのケーブルを抜いて加速世界から緊急離脱させねばならない。ニコのアバターが消えれば、パイスたちは彼らにとって無意味な戦闘を続けようとはしないはず。つまり、四人と四人に分かれたとしても、二つの戦場は繋がっているのだ。

——ハルキ君、もう少しだけ頑張ってくれ。私は、私の役目を必ず果たしてみせる。彼方の戦場に向けて強く念じつつ、黒雪姫は左右の《四元素》たちへと囁いた。

「次のターク・ショットを回避したら仕掛ける。私とメイデンが遠隔心意攻撃、カレンとレイカーは心意防衛を……」

しかしそこで、決然たる意思に満ちた幼い声が響いた。

「攻撃は、私に任せてほしいのです」

黒雪姫は、楓子の隣で凛とした立ち姿を見せる謡に、一瞬だけ視線を投げた。

「だがメイデン、いくらお前でも一人では……」

「私には、ああいう《大きくて動きの鈍い敵》専用に関発した技があるのです。一度発動できれば、体力ゲージがどれほどあろうと削り切ってみせます。でも、発動準備に三……いえ二分かかるので、その間、ローねえたちで何とか凌いで欲しいのです」

《劫火の巫女》と呼ばれていても、好戦的なバーソナリティーは皆無な謡にしては、珍しく勇ましい台詞だった。振り向き、アイレンズを瞬かせた楓子が、何かを得心したかのように頷いた。

「メイ、もしかしてその技は四神の……」

しかしそこでいったん言葉を切り、前を向いてから続ける。

「……解ったわ。あなたに任せます。いいわよね、カレン、ロータス？」

黒雪姫はあきらの顔を見るまでもなく、即時の決断とともに応じた。

「無論だ。頼むぞ、メイデン」

「二日間、必ず凌いでみせるの」

二人の言葉に、識も力強く頷き返す。

「それでは、始めるのです」

左手に持った長弓、強化外装「フレイム・コーラー」を高々と掲げる。弓はたちまち透明な炎に包まれ、小さく凝縮して一本の扇へと姿を変える。

ぱん、と歯切れの良い音を発して白い扇が開かれると同時に、アバターの顔を新たな装甲が覆い隠した。両眼だけが細く切られた、能面を連想させる——いやそれそのものである清麗なフェイスマスク。

識のモードチェンジに反応したか、ISSキット本体が少し細めていた臉をカッと見開いた。黒雪姫は、楓子、あきらと同時に呼吸を合わせ、三人同時に飛び出した。

「こっちだ、化け目玉!」

叫ぶや、走りながらイマジネーションを練る。右手の剣に、紅の過剰光が宿る。巨大眼珠は、

誰を狙うべきか迷うように瞳孔を小刻みに震わせたが、やがてフロアの左側へとダツシユする。黒雪姫を視線で捉えた。

識からターゲットを引き割らすことには成功したものの、ここで攻撃を中断すれば陽動作戦だと看破されるだろう。被弾の危険を冒しても、技を最後まで完遂せねばならない。

心意技は、バーストリンカーの心の傷をエネルギー源とする。ゆえに、デュエルアバターと同様、あらゆる技が唯一無二の形態と性能を持つ。

だがそのいっぽうで、ほとんど全ての心意技に共通するひとつの制約も存在する。技と無関係な拳動、すなわち喋ったり走ったりしながらでは、発動成功率が大幅に低下してしまうのだ。それは心意システムの達人である楓子や、もちろん黒雪姫も例外ではない。

しかし今だけは、足を止めるわけにはいかない。心意技で攻撃しつつ、今すぐにでも発射されるであろうダーク・ショットは回避する必要がある。困難だが、やるしかない。

「はあああ……!」

疾駆しつつ、黒雪姫は右手の過剰光を増幅させた。同時に、キット本体の瞳孔に闇色のスパークが閃いた。

「——《奪命撃》!!」

黒雪姫が真紅の長槍を放ったのと同時に、眼珠からも漆黒の光柱が撃ち出される。意識の八割で心意の槍を十数メートル伸ばし、残り二割で疾走を続ける。困難極まるマルチタスクだが、

ホバー移動能力を持つブラック・ロータスは、走るために両足で地面を蹴り続ける必要はない。体を前傾させ、両足に力を含めるだけで高速移動できる。弱点もないわけではなく、ホバー走行中は急激な方向転換が苦手のだが、今はとにかく前へ——

「……」

赤と黒の心意攻撃がすれ違った瞬間、黒雪姫は両眼を見開いた。

ダーク・ショットが、螺旋状に回転しながら左に曲がってくる。光線技にホーミング能力は有り得ないと考え、すぐにそれが硬直した固定観念だったと気付く。心意技に、そんな常識は通用しない。

このまま真っ直ぐ走っていたのでは追いつかれる。右にターンしなくてはならないが、心意技発動中にそんなことをしたら高確率で転倒する。黒雪姫が兩眼みする間にも、漆黒の激流は低高二種類の振動音を共鳴させつつ迫る。

「……ロータス!!」

そんな声が聞こえると同時に、背中の右側を強烈な衝撃が叩いた。体がダーク・ショットの軌道から押し出された直後、ほんの一メートル離れたところを闇の大槍が通過した。いつばう黒雪姫の赤い長槍はキット本体の白目部分に突き刺さり、血のような粘液を大量に噴出させた。手応えは浅いが、一定のダメージは与えたようで、本体は何度も腰きを繰り返しながら巨体を激しく震動させる。

「……」

ここでようやく、黒雪姫は視線を右に向けた。視界に映し出されたのは、ゲイルスラスタを噴かして黒雪姫を押す楓子と、周囲に舞い散る闇の残滓、そして膝下から無残に切断された、ほっそりとした二本の脚だった。身代わりになつてダーク・ショットに接触してしまったのだ。

「楓子!」

押し殺した声で叫び、黒雪姫は体を回して楓子を抱き止めた。

無制限中立フィールドでの部位欠損ダメージ、しかも両脚の半分を一気に失うような下手は恐ろしいほどの痛みをもたらすはずだ。しばらく動けなくなるか、短時間の(零化)に陥つても不思議はない。

だが楓子は、「まだまだ!」と気丈に答えるや新たな強化外装を召喚した。黒雪姫の腕から抜け出し、ゲイルスラスタと入れ替わりでオブジェクト化された白銀の車椅子に着座すると、苦しむキット本体を指さす。

「わたしは大丈夫! 今のうちに取り付きましょう!」

「……解った!」

叫び返し、黒雪姫は右足で猛然と床を蹴った。体を限界まで傾け、最高速のホバーダッシュ。すぐ右側を、楓子の車椅子が軽々と追隨してくる。更に右奥には、同じように走るあきらの姿がある。

ISSキット本体に、近接戦用の心意技《ダーク・ブロー》があるのはほぼ確実。問題は、手足のない巨大眼球がそれをどのように発動するかだ。仮に何らかの事前動作が存在するなら、それさえ見落とさなければ回避は可能。万が一ノーモーションで、しかも全方位に撃たれたら——その時は、その時だ。

十数メートルを瞬時に詰めた三人は、臉のある正面は避け、左右から攻撃態勢に入った。まず、あきらが全身に純粋なブルーの過剰光をまとう。彼女にしては最大級のポリウムで、技名発声。

「相転移」——《鋭》！」

細身のアバターを包む水流装甲が瞬時に凍結し、青く透き通った鎧と化す。技の発動によりシルエットが細くなっているのは、両腕に長大な手甲剣が出現しているからだ。剃刀のように薄く鋭い刃をクロスさせて構えると、あきらがISSキット本体の肉質装甲に踊るような動作で超高速の連撃を加えた。心意強化された水の刃は分厚い肉を軽々と切り裂き、鮮血を迸らせる。しかし大量の血は、刃が放つ冷気によって瞬時に凍結し、無数の赤い結晶と化して床に散らばる。

かつては《純水無色》——水と無色をかけた二つ名——と呼ばれたアクア・カレントの特性は、希少な水流装甲をステージの属性に合わせて自在に変化させることだ。氷雪ステージでは水の武器と鎧を作り出し、火山ステージでは高温の蒸気を操って範囲攻撃を行う。

その水は水と蒸気という変身を自らの意思のみによって実現するのが、アクア・カレントの第二段階心意技《相転移》。黒雪姫が知っているだけでも五つのバリエーションがあり、《鋭》は水の軽装甲とカッターで武装する近接戦用の変身だ。

黒雪姫のアビリティ《オーバードライブ》と似ているが、現象はいっそうドラマスティックで、心意強化された二振りのカッターは近接型顔負けの攻撃力を発揮する。水のアバターが華麗に舞うたび、キット本体の左側面は青い剣光に切り裂かれていく。

あきらに少し遅れて、車椅子に座る楓子も攻撃を開始した。

両手を前に突き出し、不可視のボールを包み込むようなポーズを取りながら技の名前を叫ぶ。

「——《旋回風路》！」

手の中から生み出されたのは、緑色に輝く小型の竜巻。破壊の心意を己に強く戒めている楓子は、この技を原則として身を守るためにのみ使うが、《超高速で渦巻く心意の旋風》などというものが無害な防御専用技であるはずがない。

楓子の両手から解き放たれた竜巻は、みるみる巨大化しながらキット本体の右側面に接触し、無数に内包された真空の刃で分厚い装甲を抉り始める。大量の肉片と鮮血が竜巻の真ん中から高々と巻き上げられ、天井近くで真紅のライトエフェクトとなって蒸発していく。

左側からあきら、右側から楓子の強力な心意技に攻撃され、ISSキット本体は直径三メートルの巨体を強く衝撃させた。ほとんど閉じられたままの臉の奥で、赤黒い光が不規則に明滅

する。

最初に黒雪姫が命中させた《奪命撃》と合わせて、平均的なデュエルアバターならば体力ゲージが三回は消し飛ぶほどのダメージを受けているはずだ。しかし、苦しみながらもまったく消える様子がないのは、やはりあらゆる部分で規格外であることの証明だろう。加速研究会がどうやってこれを作り、どうやってレッド・ライダーの影を憑依させたのか、直接戦闘に突入した今もまったく解らない。

だが、今なすべきは、分析ではなく破壊だ。

あきらと楓子に続いて、黒雪姫は思いきり跳躍すると、キット本体の真上で宙返りを決めて逆さまの状態から高らかな雄叫びを放った。

「はあああああっ!!!」

両手の剣に、ほとんど白に近いブルーの過剰光が宿る。大きく両腕を広げながら、体を高速で雑採み回転させる。漆黒のアバターの周囲に青白い光が環となつて進み、あたかも皆既日食で観察される太陽コロナの如き姿を作り出す。

「——《光環連旋撃》!!!」

イマジネーションに導かれ、両腕の剣が凄まじい速度の連撃を開始する。

黒雪姫の剣の師であり、旧ネガ・ネビュラス《四元素》の一人でもあるグラファイト・エツジは、実に二十七連撃にも及ぶこの大技を、わずか二秒で放ち終えたものだ。秒間十三・五発、

と考えるとブラック・ロータスのレベル4必殺技《デス・バイ・パラレンジング》の秒間百発に大きく見劣りするようだが、一撃の威力がまるで違う。そして何より、必殺技は強力なシステムアシストが体をほぼ自動操縦してくれるのに対して、心意技は己のイメージのみによって連撃速度をブーストせねばならない。

——速く……もつと速く!

ただそれだけを念じながら、黒雪姫は小太陽と化して灼熱の剣撃を放ち続けた。一撃ヒツトするたび、分厚い肉質装甲が爆発にも似た規模で千切れ飛ぶ。それが超高速で連続するので、剣で斬られているというよりも、大口径の機関砲で撃たれているに等しい。一秒、二秒……と半分で二十七連撃を放ち終わり、黒雪姫は再び宙返りすると、楓子の傍に着地した。ほぼ同時に二人の攻撃も終了し、あきららの装甲が氷から水へと戻る。

ISSキット本体は、上部と両側面の装甲をほとんど失い、滑らかな黒い曲面——恐らくは内蔵されている眼球の一部——を露出させていた。あまり強靱には見えないその殻の一部でも破壊できれば、たとえキット本体を消滅させられずとも、中に閉じ込められたポータルに接触できるかもしれない。

しかし黒雪姫は、そして恐らくは楓子とあきららも、使える中では最強レベルの心意技をフルパワーで発動させた反動によってすぐには動けなかった。ただでさえ、VS四神セイリウウ、VSマゼンタ・シザー軍、VS大天使メタトロン、VSレッド・ライダーの影、と強力極まる

敵を相手に四連戦もしているのだ。途中で休息を挟みはしたものの、魂のエネルギーそのものが消耗してきている実感がある。

だが、ここからが、ハイランカーたる者の矜持の見せ所だ。

「……ハルユキ君たちも……」

黒雪姫が呟くと、楓子とあきらもすかさず頷いた。

「今頃、頑張っているはずよ」

「私たちも負けれないの」

三人揃って闘志に再点火し、ぐいっと背中を伸ばしてから、黒雪姫は一瞬だけ後方に視線を送った。

能面をつけた小柄な巫女は、純白の扇子を片手にしずしと舞っている。巫女の周りだけが板張りの舞台になってしまったかのような静謐さだが、見る者が見れば、ただ事でない現象が進行中であることが解る。舞いによって練り上げられ、研ぎ澄まされていく深甚たるイマジネーションが周囲の空間を陽炎のように揺らめかせ、大理石の床にさえも水面の如き波紋を広げている。

「……あと一分、何としても……」

前に向き直り、黒雪姫が呟いた、その時。深手を負って停止状態に陥っていたISSキット本体が、いきなり腹をカッと開いた。巨大な瞳孔から漏れる赤黒い光が、三人の装甲を血の色

に染める。

三たびダーク・ショットを撃つか、それとも——と考えながら、黒雪姫はキット本体の眼球に起きるであろう変化を見逃すまいと精神を集中した。

そのせいで、気付くのが遅れた。変化が起きたのは、前面に露出する瞳孔ではなく、後方に残る肉質装甲だった。

ずるつ、と粘つく音を響かせ、装甲から二本の長い触手が飛び出した。瘤のように膨らんだその先端には、漆黒のオーラがまとわりついている。

「近接攻撃だ！ 回避！」

叫び、黒雪姫は思い切りバックジャンプした。楓子も車椅子の車輪を逆回転させ、あきらは足裏の水膜を滑らせるスライドダッシュで素早く後退する。

だが、二本の触手は、黒い大蛇のように身をくねらせながら瞬時に十メートル近くも伸び、黒雪姫とあきらを軽々と射程に捉えた。先端の瘤に膨大な量のオーラが凝集し、外壁の割れ目から差し込む夕陽すら吸収してフロアに薄闇を広げた。

真上から轟然と振り下ろされてくる触手を見て、黒雪姫は回避不能と判断した。着地するや否や頭上で両手の剣をクロスさせ、叫ぶ。

「オーバードライブ！ モード・グリーン！」

数メートル右側で停止したあきらも、タイミングを揃えて叫んだ。

「(相転移)——(硬)——」

二人のアバターを、まったく同じ色合いの、緑色の過剰光が包む。厳密に言えばブラック・ロータスのモードチェンジは心意技ではないが、心意システムと同時に使えば強力な相乗効果を発揮する。二本の剣の交点を中心として緑の輝きが広がり、円形の盾を作り出す。

直後、これまで体験したことのないレベルで凝縮された純粹なる(負の心意)が、黒雪姫を猛然と打ち据えた。

防御が間に合わなければ、超高威力の虚無属性心意攻撃によってアバターが周囲の空間ごと消滅していただろう。それは辛くも免れたが、かつて四神ビャツコの爪牙を受けた時と同じかそれ以上の衝撃が訪れ、意識の半分をアバターから叩き出すと同時に体力ゲージをこっそりと奪った。

視覚と聴覚、更には重力感覚までもが阻害され、またさらにブラックアウトした世界の中で、黒雪姫は半ば朦朧としつつも巨大な圧力に抗い続けた。

永遠にも思われた数瞬が過ぎ去り、ようやく重圧が去り始めると同時に、視界も回復した。まず見たのは、先端が十センチ以上も欠け落ち、エッジ部分もぼろぼろに刃毀れた自分の両手と、その向こうでゆっくり引き戻されていく黒い触手だった。足許に視線を移すと、両足の剣が大理石の床に膝近くまで沈み込んでいる。

右腕のあきらかに状況は似たり寄ったりで、両腕に生成した水の重装甲は彫形もなく砕け散り、

加えて左腕の手首から先が欠損している。両脚は床に突き刺さってこないが、深く陥いたまま立ち上がれないようだ。

「ロータス、カレン、大丈夫か？」

触手に狙われなかった楓子の切迫した叫び声に、黒雪姫はどうか右手を動かして応えた。損害は甚大だが、ダーク・ショットに続いてダーク・プロウも何とか凌いだ。話と約束した二分が経過するまで、あと三十秒。もういちど三人で全力攻撃を行えば、それくらいの時間は稼げるだろう。

そう考え、まず左脚を床から引き抜こうとした黒雪姫は、不意に異様な戦慄を感じてさっと顔を上げた。

そして見た。二本の触手でダーク・プロウを撃った直後のISSキット本体が、いっばいに見開いた瞳孔に、黒いオーラを集中させつつある。ダーク・ショット……狙われているのは、恐らく楓子。

——こいつの心意エネルギーは無敵か？

内心で呻きながら、黒雪姫は叫んだ。

「レイカー、避け……」

しかし、その言葉は途中で凍り付いた。違う。血の色に輝く巨大眼球が照準しているのは、楓子の過か後方で舞い続ける謡だ。今すぐ舞うのをやめて走れば回避できるかもしれないが、

それではせっかく練り上げたイマジネーションが無駄になる。

真つ先に覚悟を決めたのは、眼珠の正面わずか十メートルの所にいる楓子だった。いったん握った車椅子の車輪から手を離し、左右に広げる。防衛姿勢というよりも、幼い妹をかばう姉を彷彿とさせる凛とした姿だ。しかし。

「無茶だ、レイカー！」

喉から掠れ声を押出ししながら、黒雪姫は左脚に続いて右脚を引き抜こうとした。静止する車椅子の向こうでは、あきらかに傷ついた体を起こそうとしている。先のダーク・プロウを、ぎりぎりではあったがどうか防げたのは、威力が二つに分割されていたからだ。単純に考えて二倍の威力を持つであろうダーク・ショットを、楓子ひとりだけで防衛できるとはとても思えない。せめて三人の心意を束ねなければ。

だが、黒雪姫とあきらがようやく一歩踏み出すかどうかのタイミングで――。

ずわああつと空間そのものを振動させて、漆黒の大箱が撃ち出された。

単身迎え撃つ楓子は、ゆるやかとも思える動作で両手を前へとかざした。二つの華奢な掌が、渦巻く闇の先端を、ばん、と叩いた。

過剰光すらほとんどとわない、文字通りの素手と見えるレイカーの掌が、キット本体の超ダーク・ショットを正面から受け止める光景を、黒雪姫は呆然と見詰めた。触れるもの全てを引き裂き、呑み込み、無に返すはずの虚無エネルギーは、二つの掌の前で巨大な球体となって激しく震え、重々しく震え続けている。時折散出される黒いスパークが、床や天井、そしてレイカーの体や髪に当たって弾ける。

現在の加速世界に存在し得る、ほとんど最大威力と言っている攻撃を、いったいどうやってガードしているのか。驚愕の眼を見開いた黒雪姫は、直後、気付いた。

防衛ではない。中和しているのだ。底無しの餓えに荒ぶる負の心意に、純粋なる正の心意を注ぎ込むことで、虚無属性の攻撃力をオーバーライドしている。超威力のダーク・ショットを恐れることなく受け止め、融合する――これは、心意システムに於ける《柔法》だ。

楓子が生み出している膨大なイマジネーションの源は、諺を守らんとする強い意思力だろう。両手が無防備に見えるのは、過剰光が輝くひまもなく漆黒の闇に呑み込まれてしまうからだ。心意エネルギーの生成が追いつかなくなった瞬間、楓子はアバターごと虚無に貪り尽くされ、消滅する。

一秒足らずで眼前の現象を理解した黒雪姫は、顔を上げ、あきらかと素早く頷き交わした。

楓子と諺の絆は、《四元素》の中でも特別なものがある。《ICBM》スカイ・レイカーとコンビを組み、散々敵陣へと投下された《緋色弾頭》アード・メイデンだが、そんな戦法が可能だったのは二人が強い愛情と信頼で結ばれているからだ。

——でも、仲間を想う気持ちなら、私の中にもある。一度は忘れかけた……しかしハルユキ君が思い出させてくれた、大切な気持ちだ。

「レイカー」

黒雪姫が呼びかけ、

「私たちも」

あきらが繋げた。

二人は楓子の左右から近付き、傷ついた両手を持ち上げた。

楓子とあきらを、遠く離れた場所で戦っているハルユキ、タクム、チユリ、レバードを……そしてニコと日下部編を、守る。その気持ちを両手に集め、光の球に変えるイメージ。

折れた剣先に挟まれた空間に純白の過剰光が生まれ、星のように瞬き始めた。黒雪姫はもう一歩前に出ると、小刻みに振動する漆黒の巨塊に、両手ごと光をそつと触れさせた。



有田先輩。

ハルユキをそんなふうと呼ぶ——いや、呼んだバーストリンカーは、たった一人しか存在しない。

しかし、有り得ない。《彼》は二ヶ月以上も前にポイント全損し、ブレイン・バーストにまつわる記憶の全てを失って、加速世界から永遠に退場した。最後の「太刀」を浴びせたのはハルユキ自身だ。アバターを真つ二つに断ち割られ、最終消滅エフェクトに包まれながら《月光》ステージの夜空に吸い込まれていくさまを、ハルユキは確かに見た。

だから、ウルフラム・サーベラスの右肩に宿る第三人格、サーベラスⅢとして出現したのが《彼》であるはずがない。ハルユキを有田先輩と呼び、声や口調や笑い方にどれほど聞き覚えがあろうとも、それだけは絶対に、絶対に……。

しかしその時、更に数センチ右手を下ろした灰色のアバターが、完全に閉じたバイザーを左に向けて更なる声を発した。

「……ああ、然先輩と倉嶋先輩もいらつしやったんですね。なんだか思い出しちゃいますねえ……あの夜のことを……」

紫の鉤爪を宿した手で口許を隠し、肩を揺らしてクツクツと笑う。そんなⅢの姿を、リアルネームを呼ばれた二人も呆然と見詰める。

謎のコマンドでⅢを召喚したアルゴン・アレイと、ニコの拘束を続けるブラック・パイも沈黙が続いている。豹の体を低く身構えさせるバドさんは、アルゴンたちを警戒しつつも、時折サーベラスⅢに胡散臭そうな視線を送る。

刹那の沈黙を破つたのは、タクムの押し殺した叫び声だった。

「……悪趣味な物真似はやめろ！ きみが模倣しているバーストリンカーは、今はもうそんな喋り方や笑い方はしない。彼は加速の呪いから解かれたんだ。きみもバーストリンカーなら、ちゃんと自分として戦ったらどうだ！」

するとサーベラスⅢは、ようやく顔から離した右手を、あたかも悪臭を追いやるかのように左右に振り払った。中庭の薄暗かりに、紫の透射光が複雑な残像を描く。

「ああ、何度言えは解るんですか？ ポクをその気色悪い汎称で呼ばないで下さい。それに、他人の猿真似みたいな趣味ありませんね。ポクはポクですよ、黛先輩。——戦闘前に名乗りを上げるなんて鳥肌モノですけど、ま、今日は特別な日ですからよしとしましょう。ポクの名前は……」

嫌味たっぷりの口調で饒舌に語り続けるサーベラスⅢの声を、耳を塞いで遮断してしまいたいという強い衝動にハルユキは襲われた。名前を聞かされれば、脳裏で必死に否定してき

たことが真実になってしまふような気がしたからだ。
しかし、《彼》の名前を口にしたのは、眼前のメタルカラー・アバターではなく、いままで沈黙していたチユリだった。

「——ダスク・ティカー」

静かな、よく通る声で名前を呼ばれた瞬間、サーベラスⅢはぴたりと動きを止めた。
体ごと少し左に向き直り、正面からチユリを見るとぬるりとした仕草で一礼。喉の奥に笑いを含ませながら、滴る毒液にも似た語りを再開する。

「くっく……またこうしてお話できて嬉しいですよ、倉嶋先輩。楽しかったですねえ、二人でタッグを組んで新宿や渋谷エリアを蹂躪するのは。ま、先輩は、従順なベットのフリをしてボクを裏切るチャンスを見逃さず狙ったわけですけどね。アハハ、かわいい顔としおらしい態度にすっかり騙され……」

「やめろ能美!!」

ハルユキは反射的に一歩踏み出し、

「お前がチーちゃんの名前を呼ぶな!」

タクムも蒼刃剣を構えながら叫んだ。サーベラスⅢは、やれやれとばかりに両手を広げなが

ら肩をすくめた。

「先輩がたが現実を認められないみたいだから信じさせてあげたまでじゃないですか。でも、もうお解り頂けましたよねえ? ボクが、本物だってことを」

そう、最早認めないわけにはいかなかった。いかなるロジックがこの怪現象を引き起こしているのかはまるで不明だが、サーベラスⅢ、あるいは《三番》、もしくは《ミーちゃん》は、全損退場したはずの能美(能美)——《略奪者》ダスク・ティカーなのだ。

しかし、こんなことが有り得るのだろうか。ハルユキは、休感時間でこそ一日前だが、現実時間ではほんの数十分前に見たばかりなのだ。梅郷中学校の文化祭で、剣道部の出し物である《侍ダンス》を一生懸命踊る能美の姿を。彼がいつの間にか記憶とブレイン・パーストを取り戻し、ハルユキたちを追いかけて無制限中立フィールドにダイブしてきた……? いや、だとしても、なぜ本来の夕暮色のアバターではなく、ウルフラム・サーベラスに寄生する形で出現したのか? そして何より、タクムのことを《タク先輩》と呼び、剣道部の練習に真面目に打ち込んでいた能美の姿は偽りだったのか……?

ハルユキを呑み込みかけた疑念の間を払ったのは、能美でも、彼の背後に控えるブラック・バースとアルゴン・アレイでもなく、再び発せられたチユリの落ち着いた声だった。

「本物? それは違うでしょ、ダスク・ティカー」

「……どういう意味ですか、倉嶋先輩?」

「さっき、サーベラスはこう言ってた。《二番》はもともと、サーベラスじゃない名前を持つ、独立した一人のバーストリンカーだった、って。なら、《三番》のあんたも仕組みは同じよね。もともとはダスク・ティカーっていう名前のバーストリンカーだったけど、今は違う。今のあんたは、ウルフラム・サーベラスのアバターに寄生する影……ダスク・ティカーの記憶をコピーした幽霊、そういうことでしょ！」

「びしっ！ と右手の人差し指を突き付けながらチユリがそう喝破した瞬間、サーベラスⅢから嘲笑の気配が消えた。

再び右手で顔を覆いながら、呟れた声で呟く。

「……相変わらず小賢しい人ですねえ。ボクを裏切ってくれた時のこと、思い出しちゃうじやないですか。ああ……あれはムカついたなあ……冗談じゃないですよまったく……」

左手も顔に当て、深く俯くサーベラスⅢを油断なく凝視しながら、ハルユキは小声でチユリに囁きかけた。

「……記憶のコピーなんてできるのか、チユリ……？ だって、能美はもう二ヶ月も前に、その記憶を丸ごとなくしてるんだぞ。コピーしようにも原本がないんじゃない？」

「……そりやそうかも知れど、でもそれしか考えられないでしょ」

チユリが早口に言い返してきた、その時。

心意剣を両手で構えたままのタクムが、びくりと全身を震わせた。

「あつ……ま、まさか……いや、そうか、そういうことなのか……」

「な、何だよタク、何がそういうことなんだよ」

そう問い詰めてから、ハルユキは自分が敵地で仲間たちのリアルネームを口にしてしまったことに気付いたが、能美に散々《右田先輩》だの《熊先輩》だのと呼ばれたあとでは気にしても詮無いことだ。加速研究会も本拠地の学校が露見したわけで、リアルアタック合戦のようなことにはならないだろう。

タクムはちらりとハルユキを見てから、張り詰めた声で言った。

「……ポイント全損したバーストリンカーは、加速世界にまつわる記憶を消される。ばくらは今までそう信じてきたよね」

「あ……ああ。実例だって見ただろ」

と相づちを打った時、ハルユキの念頭にあったのはもちろん全損直後の能美征二だ。学校で顔を合わせた時、「すみません、ボクもう、ネットゲームはあんまり興味ないんで」と申し訳なさそうに言った、あのシーンが全て演技だったとは到底思えない。タクムもそれは認めるというように頷いたが、すぐに逆接の接続詞を口にした。

「うん。でも、もしかしたら……記憶は消滅するわけじゃなくて、奪われるんじゃないかって思ったんだ。バーストリンカーの頭から抜き取られて、ブレイン・バースト中央サーバーのどこかに保存される。そして、誰かが……恐らくはばくらがまだ知らない加速研究会のメンバー

が、何らかの方法でその記憶を呼び出して、サーベラスに宿らせたとしたら……」

ばち、ばちばち。

不意に、短い拍手が聞こえた。

さっと顔を動かすと、両手を打ち合わせているのは、〈分析者〉アルゴン・アレイだった。すぐに手を止め、薄い微笑みを浮かべて言う。

「青い子もなかなかええ勘しとるやん。勘は大事やで、結局最後に頼れるんは度胸と逃げ足とソレやからね。……で、ウチの勘がゆうとるわけや。そろそろええ頃合いやろな、つてな」

ひらりと両手を広げ、小首を傾けて――。

「ミーちゃん、積もる話もあるやろけど、お喋りタイムは終わりやで。パーやんも、たまには本気出してや」

その言葉にも、サーベラスⅢは上体を俯けたままだったが、ブラック・パイスは肩に相当する薄板を軽く上下させて答えた。

「心外だなあ、わたしはいつだって本気だよ。しかし、確かにここが今回の最重要局面のようだね。それでは、努力してみよう」

漆黒の積層アバターを、灰色の影にも似た過剰光が包むのを見て、ハルユキたち四人は素早く身構えた。

サーベラスⅢの正体が、あのダスク・テイカーだったことの衝撃はいまだに去っていない。

状況を説明し得るのはタクムの推測だけで、アルゴンも大筋では正しいと認めるような口ぶりだったが、にわかには呑み込みがたい話だ。ポイント全損したバーストリンカーの記憶が、実は加速世界のどこかに保存されている――そこまでは何とか受け入れられるが、ハルユキたちと立場を同じくするバーストリンカーに、その記憶を取り出し誰かに悪化させるなどという真似が本当に可能なのだろうか。それはもう、ブレイヤーの域を遥かに超えた所業ではないのか。

しかし、眼前の現実是否定できないし、果たすべき目標が消えたわけでもない。

ニコを助ける。そのために、今この場所ににいるのだから。

残る唯一の気がかりは、ダスク・テイカー、いやサーベラスⅢと戦闘になった場合のことだ。バーストポイントの残量10という状況は、ⅠからⅢに人格チェンジしても変わらないはずで、つまり仮に勝利できても、その時はウルフラム・サーベラスという希有なバーストリンカーが

加速世界から永遠に去ってしまう。

サーベラス自身は、それを望んでいるような口ぶりだった。そして、時には全損がある種の救済となり得ることを、ハルユキももう知っている。

……でも、僕は……。

胸中で複雑に絡み合う感情を、ハルユキは冷たい空気と一緒に腹の底へと落とし込んだ。悩み、迷うための時間はもう残されていない。あとは、ベストを尽くすだけだ。

ニコと、繪のために。サーベラスIのために。ここまで共に戦ってくれたタクムとチユリ、パドさんのために。ミッドタウン・タワーで戦っているであろう黒雪姫、楓子、諷、あきらのために。

——メタトロン。これが最後の戦いだ。もう少し、僕に力を貸してくれ。

背中に折り畳まれていた新たな翼に向けてそう念じ、ハルユキは両手をしっかりと握り締めた。拳に銀色のオーラを薄くまとわせ、静止するサーベラスIIIに向けて一歩踏み出そうとした、その瞬間。

ブラック・バイスの体から、灰色の過剰光がうねるように伸び上がった。右腕と右脚を構成する数十枚の薄板が、次々に分離、浮遊した。バイス得意の拘束技に備えて、ハルユキたちは素早く身構えた。

「……（八面断絶）」

発せられた技名は、以前、六代目クロム・ディザスターと化したハルユキを捕らえた拘束技とよく似ていた。しかし、正方形のフエンスと化した薄板たちが取り囲んだのは、技を使ったバイスとアルゴン、サーベラスIII、そして祭壇で磔にされるニコだった。

突如、パドさんが弾猛な咆哮とともに跳躍した。わずかに遅れてハルユキもバイスの意図に気付いた。これは拘束技ではなく、防御のための隔離技なのだ。即座に破壊せねばならない。タクムと同時に、思い切り地面を蹴る。

三人の爪と拳と剣が接触するよりも、一瞬早く――。

きん！ と硬質の音を響かせて極薄のフエンスが上下に伸び、内側に折れ曲がり、二つの頂点を作って閉じた。出現したのは、一辺が二十メートルにも及ぶ正八面体だった。巨大すぎるサイズのせい、板はスモークガラスのように半ば透けていて、以前の（六面正縮）に比べれば脆そうだ。

——割り砕く！

決意を込めた右拳を、ハルユキは八面体を構成する正三角形のひとつに叩き付けた。

鈍い衝撃音が轟き、強烈な反動を吸収しきれずに、手首と肘、肩の関節から火花が散った。だが、厚さなどほとんどないように見える半透明のガラス板には、かすり傷ひとつついていない。パドさんの心意の鉤爪も、タクムの蒼刃剣も、結果は同じ。三人は更に数回攻撃を加えたが、八面体の絶対的強度を確認するだけに終わり、やむなく一度下がった。ピーストモードのパドさんが、豹の口で低く呟く。

「……これは、絶対的な《拒絶》の心意。たとえ心意技でも、ただ殴ったり引っ掻いたりしてただけじゃ破れない。」

パドさんにしては珍しく長い台詞は、むしろ胸中の焦りの表れと思えた。「そんな……」

ハルユキが愕然と叫んだ、その声が開こえたかのように――いや、実際に開こえたのだらう。

ゆらりと顔を上げたサーベラスⅢの声も、障壁を通してのせいか奇妙に歪んではいたが、ハルユキの耳にしつかりと届いた。

「……本物だとか偽物だとか、そんなことどうでもいいんですよ」

鉤爪状のオーラを宿した両手を、顔の前で小刻みに開閉する。

「ボクは、ずっとこの瞬間を待っていたんだ。《一番》からデュエルアバターを奪い、もう一度あなたがたと戦う、この瞬間をね。ボクからたくさん、たくさん、たくさん奪ったものを……ポイントも、ブライドも、そして力も、全部返してもらいますよ、先輩たち!!」

ぱつと両手を広げるサーベラスⅢ、いや能美を、ハルユキは息を詰めながら凝視した。まさか、八面体の中から外には攻撃が通る? いや、そんなはずはない。ならば能美は、いったい何をするつもりなのか。

口も眼も全て隠すフェイスマスクの奥で、能美がにやりと嚙うのをハルユキは感じた。灰色のメタルカラーは、左足を一歩引き、焦らすようにゆっくりと体を回転させた。タクムの前も、チユリの前も通り過ぎ——正対したのは、中庭の中央、正八面体の右奥に存在する小さな祭壇だった。

「……………!! 能美……お前!!」
瞬間、ハルユキは再び八面体に飛びかかっていた。両拳でガラス板を無茶苦茶に乱打しながら、吼えるように叫ぶ。

「やめろ!! お前が戦いたいのはオレだろう!! 望み通り戦ってやるから、今すぐそこから出てこい!!」

しかしもう能美はハルユキを見ることなく、更にもう少しだけ体を回すと、右肩を祭壇に——そこに立つ漆黒の十字架に——その上で意識を失ったまま拘束されるニコへと向けた。

頭部と酷似したデザインの肩アーマーが、重金属の牙をいっばいに開いた。内部から漏れる光が、正八面体の内部を薄紫色に染めた。

「能美! やめろおとおお——ッ!!」

ハルユキが絶叫し、バドさんが八面体のエッジに噛み付き、タクムが剣を突き立てる中。かつてハルユキを底無しの絶望へと叩き込んだ、あの技名が高らかに発せられた。

「……………《魔王……微発令》——ッ!!」

右肩のあざとから、粘性の質感を持つ夕闇色の光線が、ずりゆうっ! と音を立てて進った。それはニコの胸部に命中し、装甲のあらゆる隙間から内部へと入り込み……刹那の静寂を経て、再び能美の右肩へと逆流し始めた。

恐れや敵意や拒絶心をわずかにでも抱けば、危うい均衡はその瞬間に崩壊し、黒雪姫も風子もあきらも、恐らくは誰も大口徑ダーク・ショットの餌食となる。

その予測すらも心から追い出し、黒雪姫は仲間を守るという強い意思だけを光のイメージに変えて、そつと漆黒の巨塊へと触れさせた。

衝撃も痛みもなかった。感じるのは、絶対的な引力。ブラックホールにも似た冷たい虚無が、黒雪姫の生み出す正の心意エネルギーを貪欲に吸い取っていく。

……いいさ、いくらでも呑み込め。お前の飢えは底無しかもしれないが、私の気持ちだって無限だ。

……かつての私は、仲間、いや友との絆を無条件で信じていることができなかった。両脚を切り落としてまで空を望む楓子の、能舞台に立ちたいと希う諺の、理不尽な全損のない世界を追い求めるあきらの気持ちを真に理解しようとせず、自分の欲望だけにとらわれて、レギオン崩壊の引き金を引いてしまった。

……本当は、ただ信じればよかったのだ。私を思ってくれる友の気持ちを。友と互いに支え

合いたいと欲する私の気持ちを。自分をさらけ出し、相手を受け入れ、ただひたすらに手を伸ばす……それだけでよかったのだ。

……何もかも失われ、二度と戻ることはないと思っていた。でも、停滞した私の庭に舞い降りてきた小さな銀色の鴉が教えてくれたんだ。何度だってやり直せる。なくしたものは取り戻せる。ただ一歩踏み出し、名前を呼べばいい。あの日、環七にかかる歩道橋の上で、フーコの名前を叫んだ時のように。

……あの時、フーコと抱き合いながら流した涙……諺が、あきらが戻ってきてくれた時の涙、そして、ハルユキ君がぼろぼろになりながら私を守ってくれたと知った時の涙は、今も私の胸のいちばん深いところで宝石のように輝いている。それが有限、私の心より生まれいづる意思は無限だ。

無限だ。

黒雪姫のその思考は、実際には一瞬にも満たない、集合的イメージの爆発として存在した。だが、それは確かに楓子とあきらに伝わり、三人の心意を繋ぎ、融合させ、何十倍ものエネルギーを生み出した。同じ姿勢で手を伸ばす三つのアバターが純白の輝きに包まれ、巨大な闇を中和し、薄れさせ……ふと我に返った時には、猛悪なまでに渦巻いていたダーク・ショットの塊は、跡形もなく消え失せていた。

全身から力が抜け、椅子たちと同時に床に崩れ落ちながら、黒雪姫は心の中で呟いた。

——二分、凌いだぞ。

それに対する答えが、頭の中で声なき声として聞こえた。

——あとは任せてください、なのです！

直後、実際の謡の音が、ミッドタウン・タワー四十五階の広大なフロアに朗々と響き渡った。

「〈あわれくるしき願志の炎〉……」

黒雪姫は、床面に転がったままどうにか頭を動かし、後方の謡を見やった。

小柄な巫女を包む過剰光は、今や紅蓮の炎となつて天井にまで立ち上っている。本物の火炎ではないはずなのに、数十メートル離れた黒雪姫のところにまで確かな熱が届いてくる。渦巻く火柱の中でゆるやかに舞い続ける謡の姿は、劫火の巫女の名にふさわしく、神々しいまでに美しい。

左手の扇子がふわりと掲げられ、再びの〈歌〉が強いエコーを伴って響く。

「……〈土中の塵とぞなりにける〉」

こうつ！ という途端もない轟音が、黒雪姫たちの背中を激しく叩いた。疲労も忘れて反射的に体を反転させた三人が見たのは、ISSキット本体を下から照らす赤い光だった。周辺の床が、直径十メートルにわたって真っ赤に輝いている。

いや、違う。融け始めているのだ。百二十秒を費やして練り上げられた謡の心意が、床を構成する分厚い大理石をオーバーライドし、融点を超える超高温にまで熱して液体へ……つまりマグマへと変えつつある。

キット本体は、肉質装甲を間のオーラで包んで熱を遮断しようとしているが、夕陽の赤から烈日の白へとグラデーションを作つて輝くマグマはオーラすらも蒸発させ、分厚い装甲を容赦なく灼く。やがて漆黒の巨体は、マグマの池へと少しずつ沈み込み始める。内部にポータルを捕獲することで三次元座標に固定されているが、一、二メートルほどのあそびはあるようだ。そして座標固定は、マグマから離脱できない理由ともなっている。

仮にキット本体に口があれば、今頃はとんでもない大ポリウムで吼え狂っているだろう。そう確信できるほど、本体の反応は激烈なものだった。前面の臉を痙攣じみた動きで開閉し、二本の触手を滅茶苦茶に振り回す。時折触手の先端に黒い過剰光が凝集し、不完全なダーク・ブローがマグマの池に叩き付けられるが、膨大な熱エネルギーのはんの一部を奪うだけで、何の破壊も引き起こさずに消えてしまう。

「これは……対〈四神ゲンブ〉を想定した心意技ね……」

「反対側で舞い続ける謡をちらりと見やった楓子が、密やかに囁いた。黒雪姫も頷き、掠れ声で応じた。

「間違いないな……。マグマの直径がああ四倍は必要だろうが、ゲンプの巨体を丸ごと落とす込むことができれば……」

「そのまま、焼き尽くせそうなの」

あきらの声も、かすかな緊張をはらんでいる。

三人を戦慄させたのは、マグマの池の恐るべき威力もさることながら、四元素の中では最も温和でおとなしい謡がこれほどの心意技を編み出したという事実だ。直交座標に分類すれば、第四象限の力——「範囲を対象とする破壊の心意」ということになるのではないか。

破壊の心意技は、怒りや絶望、憎悪、悲嘆といった負の感情をエネルギー源とする。ゆえに、正の感情から生み出される創造の心意技と比べると、使うことで《心の穴》に引きずられる度合いが圧倒的に大きい。黒雪姫の《奪命撃》を初めてとする心意技も、結果を見れば広範囲に大きな破壊をもたらすが、イメージの核となるのは《自らの剣技の強化》という創造の技でもある。だが謡の、言わば《炎の舞》は、明らかに対象を焼き尽くすことを目的としている。心に跳ね返ってくる反動は、威力に比例して巨大なものとなるはずだ。

「……うい……」

楓子が痛みに耐えるような声を出し、床に突いた両手をきつく握った。

本心では、今すぐ謡に心意攻撃を止めさせたいのだろう。気持ちには黒雪姫も同じだ。しかし、ISSキット本体の破壊が成せるか否かは、今や謡の小さな双肩にかかっている。

三人が息を詰めながら見守る先で、キット本体はついに全ての装甲と二本の触手を喪失し、硬質の光沢を持つ漆黒の眼球という真の姿を露わにした。分厚い肉が焼け落ちたぶん、眼球の直径は二メートル半にまで減少したが、異様な存在感はむしろ増している。マグマの池に巨体を半ばまで吞まれ、各所から炎を噴き上げながらも、血の色の瞳孔から迸る敵意はいっこうに衰えていない。

「……………!?」

その瞳孔が、不意にぐりつと左に回転し、フロアの南側を見据えた。黒雪姫はつられるようにそちらへ視線を向けたが、ギリシャ神殿ふうの円柱と大理石の壁が連なるばかりで、誰の姿もない。

しかし、キット本体は、明らかに何かを見ている。もしかしたら、壁の向こう……遠く離れた場所に存在する何か、あるいは誰かを。

赤い瞳孔が、あたかも焦点を自動調節するレンズのように、直径を絞った。

刹那のち、マグマに炙られる眼球から、一筋の赤い光線が放たれた。

ダーク・ショットに比べればずっと細いし、発射音もしない。真横へと伸びた光線は無傷の壁に当たったが、そこを破壊するでもなくすり抜けてしまうようだ。まず間違いないく、攻撃の

ための技ではない。

にもかかわらず。

黒雪姫は、床に倒れ込んだままの全身が、氷水のような怖気に包まれるのを感じた。楓子とあきらも体を強張らせ、喉の奥から小さな声を漏らした。

あの赤い光、あれは、良くないモノだ。それどころか、かつて加速世界で眼にしたあらゆる現象と比べても、最悪と言っているいい代物。

あれは……ISSキット本体が、これまでに生み出した全てのキット端末を通して蓄積した、膨大な悪意そのものだ。

9

「うああ……ああああ——ッ!!」

ハルユキは、両拳を振りかぶりながら、喉も裂けよとはかりに絶叫した。

《魔王微発令》。《略奪者》ダスク・ティカーが持つ、唯一の必殺技。ハルユキが知る全ての必殺技と比べても、飛び抜けて恐ろしくおぞましいその効果は、他のバーストリンカーのアビリティ、必殺技、強化外装の、半永久的な強奪。

余りにも遅まきながら、二度目の対戦で、サーベラスⅡがアビリティ《能力捕食》を発動させた時に口にした言葉の真意を悟る。「安心しろ、俺の力は《強奪》じゃない。あいつと違つてな——サーベラスⅡはそう言つたのだ。あいつとは、サーベラスⅢことダスク・ティカーのこと。そして《強奪》とは、《魔王微発令》のこと。

「や、め、ろ——ッ!!」

二つの拳を頭上で握り合わせ、ありつただけの力を込めて薄黒色の半透明障壁に叩き付ける。しかしブラック・バイスの心意技《八面断絶》は、まるで空間そのものが断たれていくかのような絶対的強度でハルユキの拳を跳ね返し、銀色の装甲をわずかにひび割れさせる。その時、ニコからサーベラスⅢに逆流する紫の光が、ひときわ大きく脈打った。眩く輝く球

体がニコから吸い出され、サーベラスⅢの右肩の口に喰われる。ニコの力、恐らくは強化外装《インビンシブル》を構成する火力パーツの一つが、とうとう奪われてしまったのだ。

愕然と眼を見開くハルユキは、更なる驚きと戦慄に打たれ、喘いだ。

ニコから流れ出す光は、まだ消えていない。ずるずると粘液質の音を発しながら、尚も貪欲に力を吸い取ろうとしている。

「あ……ああ……」

驚愕が、目も眩むような憎悪と憤激、そして絶望へと変わり、ハルユキは再び叫んだ。声は八面体の中にも届いているはずなのに、略奪の快感に打ち震える能美はもちろん、現象を無言で見守るバイスもアルゴンも、もはや顔すら動かさずとしない。

ハルユキは、ひび割れた拳をもう一度振り上げようとした。しかしその寸前、鋭い声が全身を打った。

「落ち着いて、ハル！」

同時に、右手首を掴まれる。振り向くと、すぐ目の前に、凜とした光を放つライム・ベルのアイレンズがあった。

「ヤケになっちゃだめ！ 考えて……ハルならきつと、ニコちゃんを助ける方法を思いつけるよ！」

「でも……でも……」

闇雲に喚きながら、掴まれた手を力任せに振りほどこうとした、その時――。

背中に折り畳まれた新たな翼が、小さく震えた気がした。まるで、ハルユキを叱りつけるかのように。

……そうだ。こんな時こそ……落ち着いて……視野を広く。

……全てを視て……為すべきことを……考える。

全身を貫く発作的な憤激を、懸命のイマジネーションによつて小さな球へと凝縮し、意識の奥底に沈める。怒りは、今は必要ない。そんなエネルギーがあるのなら、少しでも速く、深く考えるべき時だ。

どうにか冷静さを取り戻したハルユキは、チュリに掴まれたままだった右手をそと外しながら言った。

「……解った。ちょっとだけ待ってくれ」

眼前にそびえ立つ巨大な正八面体を、あらゆる感覚をフルに使って見る。

底知れぬ実力を持つブラック・バイスの心意技といえども、緑の王ダリーン・グランデの心意技《光年長城》ほどの絶対的強度はないはずだ。もともとは腕と脚だった薄板の集合体なのだから、強度は平面部よりも接合部の方が劣るのではないか。だとすれば、攻めるべきは――。

「……面じゃない、角だ！」

ハルユキの叫び声に、即座に反応したのはバドさんだった。

「任せて」

答えるや否や、心意の牙を大きく開きながら跳躍し、八面体の頂点の一つに噛み付く。今度は弾かれることなく、四本の牙が四つの面を辛うじて捉える。獸身のあらゆる筋肉がうねり、発生した途轍もない咬合力が、巨大なシエルター全体をみしつと軋ませる。

割れる、とハルユキは確信した。しかし。

いきなり八面体が、右に四分の一だけ素早く回転した。地面に深く食い込む下部が大理石の破片を撒き散らすと同時に、微妙なバランスで固定されていたバドさんの牙を角から振り払う。がちん、と顎門を鳴らしながら弾き飛ばされたバドさんは、着地するや否や再び飛びかかり、新たな角に噛み付こうとした。だが今度は左に回転した八面体に、またしても牙を外される。

「タク、チュー！」

ハルユキは叫び、八面体を固定するべく面のひとつを両手で押さえた。タクムとチュリも、バドさんを挟んで反対側の面に飛びつき、脚を踏ん張る。しかし、まったく手がかりのない平面は指で掴むことができず、三度回転した八面体に三人とも振り払われてしまう。

「……………」

ハルユキは歯噛みした、その時。

ニコの体から、二つ目の光球が引きずり出され、サーベラスⅢの右肩に吞まれた。

このままでは、「ヘインビンシブル」を構成するパーツ——ハルユキの推測では、主砲、ミサイルポッド、機銃つきコクピット、背面スラスト、脚部の五つ——が全て奪われてしまう。

膨れ上がるうとする焦燥を懸命に押さえつけ、ハルユキは尚も考える。

八面体の頂点が弱点なのは間違いない。しかしそこを攻めるためには、回転をどうにかして止めねばならない。四つの角を四方向から同時に攻撃する？ いや、それでも回転そのものを妨げることはできない。回転の支点となっているのは正八面体の下端の角だが、そこは大理石の地面に深々と食い込んで触れることもできない。

……………地面に、食い込んで……………

「……………!!」

ハルユキは、いつばいに見開いた両眼で上空を振り仰いだ。

六つある角のうち、真に弱点と言えるのは、文字通りの頂点——天辺の一つだけだ。八面体は、水平には回転できても垂直には回れないはず。なぜなら下の角は、地面にしっかりと固定されている。しかし天辺を攻めようにも、バドさんの咬み付き攻撃では、やはり水平回転によつて振り解かれてしまうだろう。真上から真下へ、一分の狂いもない鉛直方向の圧力を加える必要がある。

そこまで考えた瞬間、ハルユキの脳裏に、数十分前に聞いたとある言葉が甦った。勢いよく振り向き、その言葉の主を確認する。

「……タク！ 必殺技グージは!?」

シアン・パイルは何も問い返すことなく、即座に答えた。

「まだたっぷり残ってる!」

「よし、お前を八面体の真上まで運ぶから、真下にアレを頼む!」

それだけで、タクムにはハルユキの意図が全て通じたようだった。フェイスマスクに刻まれたスリットの奥でアイレンズを一瞬見開き、力強く首肯。

「解った、任せて!」

ハルユキは、タクムの体を後ろから抱えると、背中の銀翼を広げて思い切り震わせた。上空二十五メートルまでそびえる正八面体の真上に一瞬で到達し、中庭を四角く区切る心意の隔壁を見下ろす。

まさにそのタイミングで、三つ目の光球がニコから離れ、サーベラスⅢの肩に呑まれた。

あと、たった二つ。全ての強化外装を奪われた時、ニコは、《不動要塞》と呼ばれた圧倒的火力を失う。

寸時の恐怖を振り払い、攻撃体勢に入る。

まず、ハルユキがタクムをがっちりと保持しながら体を水平に倒す。同時にタクムは心意剣を杭打ち機に戻し、砲口から露出する鉄杭を、八面体の頂点へと向ける。

「いくよ、ハル!」

「ぶちかませ、タク!」

技の反動を受け止めるべく、ハルユキが翼をいっぱい展開した、その直後。

タクムの、全身全霊の技名発声が広大な敷地に響き渡った。

「スパイラル……グラビティ………ドライバ——ッ!!」

青い輝きに包まれた杭打ち機の砲口が、がしやりと音を立てて拡大。いちど収納された鉄杭が巨大なハンマードリルに変わり、後方に火炎を噴射しつつ撃ち出される。

先端が平らになった鋼鉄の柱は、猛然と回転しながら、正八面体の頂点を正確に捉えた。周囲の大気全てを圧縮するかのような、途轍もない轟音。心意シエルターを構成する八枚の半透明ガラスがびりびりと震え、衝突点から迸った膨大な火花が、傾いた平面上を流のように流れていく。

ここでついに、八面体を維持するブラック・バースが、ちらりとハルユキたちを見上げた。鋭なき顔を軽く傾げると、それが合図となったかのように、巨大な八面体が反時計回りに回転し始める。シアン・パイルのドリルとは逆方向なので、衝突点から生み出される火花と轟音が倍増し、タクムを抱えるハルユキの体にも、強烈な振動が伝わってくる。

仮に、ハンマードリルの射出角度が垂直方向から一度でもずれていたら、高速回転する八面体の頂点を捉えていられずに滑って外れ、ハルユキともども地面に転げ落ちていただろう。

しかし、シアン・パイルのレベル3必殺技《スパイラル・グラビティ・ドライバ》は、真

下にしか繋てないという制約がある。それは逆に言えば、本人が苦勞して微調整せずとも、射出方向を垂直に固定できるということなのだ。

「う……おとおお——ッ！」

吼えるタクムの全身から、青い過剰光が進った。心意の輝きは右腕からハンマードリルへと流れ込み、鈍色の鋼鉄を超硬度の鋼玉へと変える。渦巻きながら進むオレンジ色の火花が青いオーラと混じり合い、中庭を眩く照らし出す。みしっ。

かつて聞いたことのない、異様な軋み音が大気を揺らした。圧力に耐えかねたか、正八面体の回転数が低下していき、やがて止まった。対して、サファイアと化したハンマードリルは、かつてハルユキを屋上から一階まで叩き落とした時を遥かに超えるであろうパワーで八面体を圧迫し続け——。

二度目の軋み音は、甲高い硬質の悲鳴を伴っていた。正八面体の頂点から伸びる四本の辺を、微細なクラックが稲妻のように貫いていく。だがひび割れは次の頂点で停止してしまい、完全崩壊にまでは至らない。

「もう……少し……なのに……！」

苦しげなタクムの声を聞き、ハルユキは意を決して叫んだ。

「オレも手伝う！」

タクムを保持する両腕にいつその力を込め、アバター同士を一体化する。背中から伸びるシルバー・クロウ本来の銀翼に加えて、新たに与えられた白翼——（メタトロン・ウイング）をも展開。X字を描いて広がる四枚の翼に、あらん限りの意思力を漲らせ、叫ぶ。

「くだ……けろ——ッ!!」

巨大なロケットの噴射にも似た白光が、垂直に立ち上った。生み出された途轍もない推力が、ハルユキとタクムの体、そしてハンマードリルを通して八面体に伝わり、全ての平面を大きく撓ませた。

停止していたひび割れが、側面の角を通過して下へと伸びていく。更に角のところで左右にも分裂し、他の角から広がるひび割れと繋がる。

全ての辺にクラックが走った瞬間、ひととき甲高い破壊音がフィールドを突き抜けた。

スモークブラックの障壁が、無数の欠片を夕陽に煌めかせながら砕け散る。

同時に、サーベラスⅢが四つの光球を奪い取った。ハルユキとタクムはがっちり一体化したまま、いまだ轟音を放って回転し続けるサファイアのドリルを先頭に、真下に立つ能美へと突進した。

「うおおおおおお——ッ!!」

二人の力と意思が籠められたスパイラル・グラビティ・ドライバーは、ゆるやかに舞い散る障壁の欠片たちを触れるそばから微細な粒子へと変えて突き進み、サーベラスⅢのヘルメット

に激突――

する寸前で、左奥のアルゴン・アレイから発射された四本のレーザーに妨げられた。二本はハルユキが何とか《光学誘導アビリティ》で弾いたが、残り二本がタクムの脇腹と左肩を掠め、体勢を崩す。ドリルの照準が外れ、回転する打撃面は、惜しくも能美の左側五十センチの場所に激突して大理石のタイルを粉々に砕く。

タクムをノーダメージで着地させるため、翼でブレーキを掛けたその瞬間、ハルユキは親友の声を聞いた気がした。

――ハル！ ぼくは大丈夫、いまのうちに赤の王を！

――了解！

料那のやり取りを交わすと同時に両手を離し、ニコが拘束される祭壇に向き直るや、全力で飛翔。左側で、アルゴンの四つのレンズが再び紫色に輝く。だが、降り注ぐ破片の下を突進してきたバドさんに体当たりされ、発射されたレーザーは後方の校舎に空しく突き刺さる。

「ニコ――ッ！！」

名前を叫び、両手を広げ、ハルユキは漆黒の十字架に露にされた真紅のアバターをしっかりと抱き締めた。同時に両手で十字架を破壊しようとしたのだが、バイスが右腕に続いて左腕までも失うことを避けたのか、何枚もの薄板へと戻りながら地面に沈み込んでいく。

深追いすれば板の数枚は破壊できたかもしれないが、今はそれより先にすべきことがあった。

「おおおッ！」

気合いととも、心意の銀光を宿した右手を閃かせ、サーベラスⅢとニコを繋ぐ紫色のラインを断ち切る。まさにその瞬間、ニコから引き出されようとしていた五つ目の光球がびたりと停止し、再びアバターの中へと戻っていく。

――ニコ！

二度目は声に出さず、幾つもの感情が吹き荒れる胸の奥で、ハルユキは大切な友達の名前を呼んだ。

両手の中には、小さく滑らかなデュエルアバターが確かに存在する。ミッドタウン・タワーでブラック・バイスに拉致されてから、こうしてついに取り戻すまでに要した時間は約四十分。短いようだが、ハルユキの体感では数日にも等しい。

それに、奪われてしまったものも、途轍もなく大きい。

サーベラスⅢ――能美が《魔王微発令》によってニコから強奪した強化外装は、実に四つ。どのパーツかは解らないが、単純に考えて《インビンシブル》の八割にも達する。これまでのバタールから考えて、形勢不利と判断した瞬間、バイスとアルゴンはサーベラスを連れて逃走しようとするだろう。その前に何としても四つの強化外装を取り返さねばならない。

……ニコ、待ってて。僕がいますぐ、きみの大切な……

ハルユキがそこまで考えた時だった。顔のすぐ下にある小さなフェイスマスクがかすかに動

き、ブラックアウトしていたアイレンズに仄かな緑色の光が宿った。

パイスの十字架から解放され、意識が戻ったのだろうか。そう考えたハルユキは、腕の中のアバターに向けて、そっと囁きかけようとした。だが。

ニコの「二」の音を口にするよりも早く、予想外の現象が発生した。

スカレット・レインの小柄なアバターから、真紅の過剰光が、あたかも小型の恒星の如き勢いで放射されたのだ。強烈な熱をはらんだ衝撃波に、ニコの体に回した両腕を振り解かれ、ハルユキは大の字になって地面に墜落した。どうにか尻餅をつくことは回避したものの、腰を引いた中途半端な姿勢のまま、祭壇上空に浮遊するアバターを見上げる。

熱気の作り出す上昇気流の中を緩やかに降下してくるニコのアイレンズが、すぐ近くのハルユキと、能美に杭打ち機を向けるタクム、少し離れてクワイアー・チャイムを構えるチユリ、アルゴンと対峙するバドさんを順に捉えた。その瞬間だけ眼差しが少し和らいだ気がしたが、それも敵方の三人を睨むまでのことだった。

つづらな形のアイレンズが、本来の緑から、超高温の炎を思わせる青みがかった白へ変わる。全身から溢れる紅炎のオーラはいつそう勢いを増し、黄昏ステージの冷たい空気を熱して熾氣楼のように揺らめかせる。

強烈な熱気に乗せて、ドスの利いた第一声が発せられた。

「ためえら……。よくも好き放題やつてくれたよなあ……」

そこでゆるやかな降下が終了し、小さな四角い祭壇に降り立ったニコは、胸の前で両腕を組むと続けて言った。

「この借りは倍返しじゃ済まねーからな。十倍……いや、世話になったツレのぶんも合わせて五十倍返しだ。消し炭も残らねーくらいコンガリ焼いてやつから、覚悟しな」

……………ニコだ。

よろよろと立ち上がりながら、ハルユキは胸の奥から熱いものが込み上げてくるのを感じていた。

これが、《鮮血の暴風雨》、《不動要塞》スカレット・レインだ。たとえ四十分も擬似的零化を強いられようと、強化外装を奪われようと、二代目赤の王の魂に宿る炎は消えなかったのだ。

現実世界のニコが、時には弱音を吐いたり、涙を見せたりもする十二歳の女の子であることをハルユキは知っている。もしかしたらそれがニコの素顔なのかもしれない。でも、どん底の窮地で膝を屈して諦める代わりに、拳を握って立ち上がることができるなら、それは……いや、それこそが本物の強さだ。

そしてそれこそが、ブレイン・パーストのシステムすら超えた、本物の心意なのだ。アルゴンと対峙していたバドさんが、豹の体を反らせて高らかに吼えろと、大きく跳躍してニコの足許に陣取った。ハルユキも数歩移動し、祭壇の右側で身構える。タクムとチユリも、

素早く左側に並ぶ。

スカレート・レインを中心にフォーメーションを組む五人に対して、最初に反応したのはアルゴン・アレイだった。ゴードルの下に露出する口許に薄い微笑みを浮かべると、陽気さと冷やかさが同居した声を出す。

「威勢ええなあ、おちびちゃん。四つも強化外装バチられたゆうのに大したもんや。ウチなら、この帽子いっつこでもいかれたら速攻泣き入っとるとこやで」

「……なら、お望み通り、そのウザったい外ハネ頭ごと引ッpegして泣かせてやるよ」

ニコの言葉や口調に、現状への違和感は感じられない。きっと、バイスの技によって強制的零化状態に置かれている間も、意識は消えてはいなかったのだから。

一歩も引かないニコの舌鋒に、分析者は両肩を揺らして笑った。

「あつはは、おっかないなあ。でもウチかて女の子やからな、ツルッバゲは勘弁や。それに、久しぶりに戦闘つぽいマネして疲れたしなあ。あとは若いモンに任せて、高みの見物させて貰うわ。……てなわけで、ミーちゃん、よろしく頼むで。望みどおりに、新しいオモチヤも手に入ったことやし」

アルゴンのその言葉に、ハルユキは視線をサーベラスⅢへと移動させた。

灰色のメタルカラーは、タクムとハルユキに《魔王微発令》を中断させられた時から、もう二分近くも沈黙を保っている。両腕はだらりとぶら下げられ、顔も深く俯けられて、まるで電



確証はないが、恐らくは《心傷殺理論》に基づく《人造メタルカラー計画》によって生み出された、非業のバーストリンカー。アルゴンの命令で、ポイントを溜めるためにレベル1のまま戦わされていたにもかかわらず、素直さと懸命さ、対戦を愛する心を失わなかった希有なる天才。そして、ハルユキの、大切な友達。

そんなサーベラスを、たとえ本人が望んだことだとしても、全損などさせたくない。全てのしがらみから解き放たれた彼と、これからは拳を交えたい。何度でも。

ハルユキが、相反する二つの感情をせめぎ合わせるいつぼうで、ニコは自分の強化外装を奪った相手に向けて鋭い言葉を投げ掛けた。

「……なるほど、噂どおりのねじ曲がりつぶりだな。ためみみたいなヤツに《インビンシブル》は使いこなせねえよ。強化外装にだって、心は宿るからな」

「は、はははは！」

再び短い笑いを漏らすと、能美は大きく両手を広げた。

「いかにもバーストリンカーなどと称する連中の言いそうなことですね！ なら、証明してあげましょう……心などという代物は、加速世界でも、現実世界でも、何の力も持たないということ。唯一、ボクへの忠誠心を除いてね!!」

さつと左手を閃かせ、インストメニユーを操作する。そういえばあいつはシステムコマンドを叩ぶのが嫌いだつた、とハルユキは息を詰めながら思い出す。

他人には見えないボタンを、鋭く突る人差し指が、四箇所立て続けに叩いた。

ゴゴン！ と凄まじい轟音が広がり、中庭の地面を揺らした。

サーベラスⅢの周囲に、透き通った巨大な立方体が幾つも出現する。それらはディテールと質感をみるみる増していき、紫色の装甲板に覆われた武装オブジェクト群を实体化させる。

まず、細長いコクピットブロックが後ろからサーベラスⅢの体を包んだ。その左右に、長大なレーザー砲と一体化した腕が接続される。背面には四つの大型バーニアを備えるスラスターブロックが貼り付き、下からは逞しい二本の脚がせり上がる。

その合体シークエンスを、ハルユキたちも黙って見ていたわけではなかった。遠隔攻撃用の心意気を持つニコとハルユキは、強化外装のオブジェクト化が始まるや否や両腕に真紅と銀色の過剰光を宿らせたのだが、能美の後方でアルゴンとパイイスも同様のアクションを取ったので

技を撃てなかったのだ。

膠着状態に陥る二陣営の間で、ひととき強烈な閃光と轟音を放ち、四つの強化外装とサーベラスⅢの合体が完了した。

ニコ本来の《インビンシブル》とは形状も色彩も大きく異なる。パーツが一つ足りないのだから恐らく奪えなかったのはミサイルポッドだろう——ポリウム感はオリジナルに及ばないが、要塞というよりも人型フォルムに近いので、細身なぶん背の高さは周囲の校舎に迫るほどもある。

遠隔と近接の中間色である深紫の装甲が示すとおり、両腕の外側に装着されたレーザー砲はスケルダウンしているが、代わりに四本の凶悪な鉤爪からなる手が備えられている。両足からの先からも二本の長い爪が飛び出し、肩と膝にも巨大なスパイクが装着されて、全体のイメージは巨人を通り越して悪魔に近い。

分厚いコクビットブロックには、ほぼ完全に包み込まれたサーベラスⅢは、強化外装の両腕を高々と振り上げると、増幅されて金属質に歪んだ絶叫を迸らせた。

「どうだ……これが、力！　これが、支配するということだッ!!　略奪による支配!!　それこそが、唯一、絶対的な力なんだッ!!　はははは……、はははははははは!!」

かつて本物の能美から発せられた快哉と、一字一句同じ。その事實は、眼前の《能美》が抽出された複製記憶からエミュレートされた存在に過ぎないという事實をハルユキに強く印象づけた。

だからこそ、消し去らねばならない。

現実世界で、新たな道を歩んでいる本物の能美征二のためにも。依代として作られ、対戦の喜びを知らぬまま戦わされてきたサーベラスIのためにも。そして、何者かの意思によって、亡霊のように呼び覚まされ利用されているサーベラスII自身のためにも――。

「……チュ」

ぎりぎり屈かどうかの小声で、ハルユキは幼馴染に向けて囁いた。

「今回も、お前が頼りだ。タイミングは指示するから、それまでは自分を守ることに専念してくれ。タクは、チュウの護衛を頼む」

緑色の三角帽子と青いヘルメットがかすかに動くのを確認し、赤のレギオンの二人にも語りかける。

「ニコ、パドさん。(インピンシブル)と戦うことになるけど、大丈夫だよね」

「構わねえ。思いっきりやってくれ」

$$\overline{K}$$

即座に頼もしい言葉が返り、逆に背中を押された気分、ハルユキも頷いた。ずん、と重い地響きを立てて、紫の悪魔が一步前に出たのはその時だった。両手の鉤爪をゆっくり開閉させながら、舌なめずりするような声を放つ。

「作戦会議は終わりましたかあ、〈勇者とその手下〉の人たちいい。ボクをがっかりさせないで下さいよ……最低五分は楽しませて貰わないとねえ!」

巨大なブレッシャーに耐えて身構えながらも、ハルユキは悪魔の後方にも気を配り続けた。《合体サ・ペラスⅢ》は恐るべき強敵となるだろう。しかし、アルゴン・アレイとブラック・パイスの存在も忘れてはならない。アルゴンはまだ戦闘力をほぼ完全に残しているし、パイスは《八・面・断・絶》を破壊されたことで右腕石脚を失ってはいるものの、激痛に苦む様子もなく平然と立ち続けている。ハルユキたちが隙を見れば、残る左腕左脚を使つての攻撃

すら躊躇うまい。

——どんな時も冷静に、戦場全てを視るんだ。

自分に言い聞かせるハルユキを挑発するかのよう、能美が左腕のレーザー砲を持ち上げた。直径十五センチはあろうかという漆黒の砲口に、アメジスト色の光が宿る。ひゅひゅひゅ、というチャージ音がみるみる高まる。

背中上部の白翼——《メタトロン・ウィング》が、警告するかのようにはりつと震えたのはその時だった。

……解ってるよ、あんな見え見えの攻撃は喰らわない……

レーザー発射の寸前に離陸し、巨体に密着して連続攻撃を叩き込むつもりだったハルユキは、胸中で反射的にそう言い返した。

だが、メタトロンが警告したのは、合体サーベラスⅢの遠隔攻撃に対してではなかった。

「っ……!?」

すぐ左のニコがびくりと体を震わせ、

「なんや!?」

アルゴン・アレイまでもが戦場から注意を逸らして北の空を仰ぎ見た。ハルユキもちりとそちらに視線を動かし、そして唖然と眼を睜けた。

橙（だいだい）色から濃紺（のくろ）へとグラデーションを描く夕空を背景に、一筋の赤いラインが音もなく伸び

てくる。

遠隔系攻撃にしては遅い。物理的な威力はほとんど感じない。たとえハルユキたちを狙っているのだとしても、避けることも弾くことも容易にできそう。そもそも、いまのコースなら、赤い光は学校の上空を通り過ぎてしまいうさだ。

にもかかわらず——。

ハルユキは、突如、全身に氷水を浴びせられたかのような怖気に包まれた。アバター素体が指先まで強張り、仮想の呼吸も停止する。それなのに、今すぐ逃げ出したいという強い衝動に襲われ、動かない体が激しく震える。

ニコも、バドさんも、タクムもチュリも空を食い入るように見詰めたまま棒立ちになっているようだ。もし能美がレーザーを撃てば、全員まともに喰らっていたらう。しかし、主砲の発射体勢に入っていた能美もまた何かを感じたらしく、強化外装の巨体を仰向かせてコクピットブロックの隙間から空を見上げた。

ちょうどその時、中庭のまっすぐ上空に達した赤いラインが、あらゆる物理法則を無視した動きで真下へと曲がった。かすかな音がハルユキの耳に届いた。ひゅひゅひゅ、ぎえああああ、という、風切り音のような——大勢の悲鳴のようなノイズ。

「なんだ、あれは——」

能美が訝しそうな声を出した、次の瞬間。

コクビットブロックに、赤い光がうねりながら命中した。しかし爆発らしきものは発生せず、光はまるでスライムのように装甲表面にへばり付くと、隙間から内部へ入り込んでいく。

「う……うわあつ！ やめろっ……！ 聞いていないぞ、こんな……バイス！ アルゴン！ さっさとこれを止めろ——ッ!!」

悲鳴じみた、能美の絶叫。強化外装の両腕が滅茶苦茶に振り回され、両足が中庭のタイルを踏み荒らす。装甲が邪魔をして見えないが、コクビットの内側では、何らかの恐ろしい現象が進行していることだけは疑いようがない。描写のしようもないほどおぞましい、何かが。

暴れ回る合体サーベラスⅢから素早く距離を取りながら、アルゴンが珍しく愕然とした様子で叫んだ。

「嘘やろッ……早すぎるやろ、幾らなんでも！ まさか……速中、アレをやりよつたんか……さすがにこれは、会長はんも想定外やろ……」

言葉の意味は、咄嗟には理解できない。しかしこの展開は、加速研究会にとっても予期せざるものであるようだ。

「わあああああ——ッ！ こいつら……ボクの中にッ……やめろッ！ やめろおおお

ッ!!

甲高い悲鳴を迸らせながら、南側の校舎に激突した紫の悪魔は、もはや制御不能であるかのように両腕を振り上げると、三階あたりの壁を力任せに殴り始めた。建物全体がブレイヤー

ホーム属性であるがゆえに窓ガラス一枚割れないが、強烈な振動が地面を震わせ、ハルユキたちの体を揺らす。

その刺激によってハルユキはどうにか金縛りから脱したが、どう動くべきか判断できない。代わりに叫んだのは、すぐ左に立つニコだった。

「何がなんだかわかんねーけど……そんな時はブチかますのがプロミの流儀だぜ！ クロウ、攻めるぞ！」

「り、りり了解！」

強く拳を握ることで恐れや驚きを追いつ出し、ハルユキは両腕に銀色の過剰光をまとわせた。ニコも同じく赤いオーラを宿らせた拳を、ボクシングスタイルで構える。

「——〔光線投槍〕!!」

ハルユキの右手から白銀の槍が放たれ、

「——〔輻射連拳〕!!」

ニコの右手から炎の拳が十発近くも連射された。

二人の心意攻撃は、暴れ回る合体サーベラスⅢの左肩付け根に命中し、大規模な爆発を引き起こした。巨体がぐらりと傾き、ジョイント部を破壊された左腕がゆつくりと分離して、滝のように火花を迸らせながらズズンと地面に落ちる。

紫の悪魔は、数歩よろめいてから踏み留まると、動きを止めた。破壊不能の壁を殴りつける

騒音にかき消されていた能美の呻き声が、呪詛のように中庭に響く。

「……オマエたち……ボクを、騙したな……新しい力をくれるとか、復讐させてやるとか……調子のいいことを言って……最初から、こうする、つもりで……」

それに対するアルゴン・アレイの返答は、彼女にとっては最大限の謝意を表してはいたのだろうが、しかしやはりどこか軽薄だった。

「ごめんなあ、ミーちゃん。ほんまは、もうちょつとは遊ばせてあげられるはずだったんだよ。でもなあ、ウチらもほら、ざりざりの人数でしのいどるわけやし、たまあには計画が狂てまうこともあるわなあ」

「うる……さい、早く……コレを外して、ボクを助ける……さもないと、オマエらも……」

ぎぎぎ、と巨体の右腕が軋み、レーザー砲でアルゴンとバイスを照準する。しかし二人のレベル8erは動じるふうもなく揃って肩をすくめると、今度はバイスが発言する。

「困ったなあ。幾らなんでも、この状況でそれは難しいよテイカー君」

どこかで聞いたような台詞に、能美の声はいっそう深い怒りを帯びる。

「また……またボクを見捨てるのか、バイス……二度も……この、ボクを……」

「安心したまえ、テイカー君。二度あることは三度、とはならないと思うから」

飄々と言い放つと、ブラック・バイスは薄板の並ぶだけの顔をハルユキたちに向けた。

「最後に、黒のレギオン及び赤のレギオンの諸君にもひとつ忠告しておこう。強化外装を取り

戻そうなどとは思わず、いまずぐ離脱することをお勧めするよ。融合が少々早すぎたとはいえ、アレはもう君たちの手に負える存在ではない」

「てめえ、逃げる気か！」

ニコの鋭い指弾に、片腕片脚を失った積層アバターは、平然と頷いた。

「もちろん。わたしもアルゴンも、命は惜しいからね。作戦目標の達成率はせいぜい四割というところだが、ま、良しとしよう」

「そういうワケや。あんたらも無事に逃げられたらまた遊ばな。仔猫ちゃん、お喋り楽しかった」

アルゴンがひらりと右手を振ると同時に、バイスの体を構成する薄板たちがくるくる回転し、たちまち二枚の大きな板へと融合した。ハルユキがはっと二人の足許を見ると、南西の校舎が作る影にぎりぎり接触している。

「く……」

歯噛みをするが、今や最優先事項はバイスたちの追撃ではない。ニコの強化外装を取り返し、全員揃ってミッドタウン・タワーの黒雪姫たちと合流する。そのためには、紫の悪魔を破壊して、サーベラスⅢをコクピットから引きずり出さねばならない。

二枚の薄板がアルゴンを挟み込んだ瞬間、能美が怒りに満ちた叫び声を上げた。

「バイ……スウウウウウウ……」

ツ……

おうとしなかった。ひと言でも喋れば、より恐ろしいものの蓋が開いてしまうとでもいうかのうに。

静寂を破ったのは、ばたり、という粘りのある水音だった。見れば、巨人の左肩の傷口から、どす黒いオーラがまるで血のように滴っている。それは長く糸を引いて地面に落ち、ある程度溜まったところで粘性体と化してうねうねと這い始める。目指す先は、少し離れた所に転がる左腕。

黒いスライムを攻撃するべきなのかもしれないが、ハルユキは動けなかった。粘性体はたちまち左腕に辿り着くと、破壊されたジョイント部から内部に侵入した。

鋭い四本の鉤爪が、びくりと震えた。本体と左腕を繋いだスライムは、細長く伸びた体を収縮させ、腕を肩へと引き戻していく。果然と見上げるハルユキの視線の先で、巨大な鋼鉄の腕が空中に吊り上げられ、地上六メートルの高さにある左肩に湿った音を立てて接合する。

無制限フィールドで破壊された強化外装は、所有者の離脱、再ダイブを経なければ再生することはない。

その常識をあつかりと無視して左腕を再生させた合体サーベラスⅢは、ゆるゆると巨体を直立させ、左に九十度旋回すると、ハルユキたちと正面から対峙した。

中央にコクビットブロック、側面に両腕、下部に両脚、背面にスラストという構成ゆえに、巨人は首なしだ。しかしハルユキは確かに感じた。遥か高みから五人に注がれる、底無しのお

えに満たされた視線を。

「ル……ディルルル……」

獣のような、機械のような、異様な唸り声が響く。巨人の全身を這い回る影のオーラが急激に密度を増していく。金属質の軋み音を放ち、装甲の形状が変わり始める。直線的なラインが歪み、捻んで、有機的な曲面を描く。四肢の鉤爪も巨大化し、各所にエラのようなスリットが出現する。

中庭の真上の夕空に、いつしか分厚い黒雲が寄り集まりつつあることにハルユキは気付いた。雲の奥に青白い稲妻が閃くたび、どろどろと低い雷鳴が響く。光が遠ざかっていく世界の中で、巨人は尚も本物の悪魔への変貌を続ける。

両肩と両膝のスパイクは倍近く伸び、コクビットブロックの隙間は鱗のような金属板に完全に塞がれる。両手のレーザー砲は環形動物の如き姿に。背面のスラストは巨大な突起に。

最後に、コクビットの上部に、ぼこつと音を立てて半球形の《頭》が出現した。

半球の前面が瞳のように開き、中から現れたのは、血の色の虹彩を持つ巨大な眼球だった。今度こそ本物の視線でハルユキたちを射貫いた悪魔は、大鎌の如き鉤爪を備えた両手を高々と振り上げると、途轍もない音量の咆哮を轟かせた。

「ディルル……ルルロロオオオオオ——ッ!!」

黒雲から紫の雷が立て続けに迸り、悪魔の周囲に突き刺さった。

中庭に屹立するものは、すでに〈インビンシブル〉でも〈合体サーベラスⅢ〉でもなかった。サイズは違えど、ハルユキはこれと限りなく似た存在をかつて目撃していた。一度は過去のリブレイ映像の中で。一度は帝城で見た夢の中で。

そしてまた、シルバー・クロウ自身が変貌を遂げた姿として――。

ハルユキの脳裏に、三日前、黒雪姫及び氷見あきらと交わした会話の中で発せられた一つの単語が甦った。我知らず口から零れたその名前は、凍えるような戦慄と恐怖に彩られていた。

「……災禍の鐘……マークⅡ……」

(つづく)



(先に本文をお読み頂くことを強く推奨いたします)

アゼル担当⑬水キ



アゼル担当⑭水キ



⑬巻もよろしくお願いいたします!

「これは、ゲームであっても

《アインクラッド》編を第一階層から描き直す。
リブート・シリーズ第二弾!



電撃文庫

ソードアート・オンライン

『プログレッシブ』第2巻は、電撃文庫にて
2013年12月10日発売!!!

特報!!!

『アクセル・ワールド16』は
2014年春頃発売予定!!!

遊びではない」 天才プログラマー・茅場晶彦

アインクラッド第三層のボスモンスターを、激闘の果てに倒した(攻略集団)プレイヤーたち。
勝利に沸く剣士たちの輪から離れ、(ピーター)のキリトと、
その暫定的パートナーである縫製使いアスナは次なるフロアへの階段を上る。

第三層、

そこでキリトとアスナを待ち構えていたのは、
フロア全体を深く包み込む大森林と、初めての大型キャンペーン・クエストだった、
森の中で戦う(森(フォレスト)エルフ)と(黒(ダーク)エルフ)の騎士たち。

そのどちらかに加勢することで、クエストは開始される。

《ベータテスト》時は必ず相打ちになっていた三人のNPCだが、

キリトたちは黒エルフの女性騎士(キズメル)を生き残らせることに成功する。

ベータ時の違いに戸惑いながらも、NPCであるキズメルと交流を深める二人。

一方、他のプレイヤーたちは(新規)クエストを進行させ、

アインクラッド初となる三つの(ギルド)が結成される。

やがて開かれる、第三層初の(攻略会議)。

しかしその会議の場で、キリトとアスナは、

新ギルド(ドラゴンナイツ・ブリゲード)のリーダーとなったシミター使いリンドによって、

ひとつの重大な選択を迫られる……。

個人ウェブサイトながらも

閲覧数650万PVオーバーを記録した伝説の小説!

ソードアート・オンライン

イラスト abec

電撃コミックス『ソードアート・オンライン アインクラッド』1巻(作画:中村野矢)

電撃コミックス『ソードアート・オンライン フェアリーダンス』1巻(作画:黒川真)

電撃コミックス『ソードアート・オンライン』(1巻)(作画:黒川真)

原作:川原 電撃コミックス『ソードアート・オンライン』(1巻)(作画:黒川真)

『ソードアート・オンライン フェアリーダンス』(1巻)(作画:黒川真)

『ソードアート・オンライン アインクラッド』(1巻)(作画:黒川真)

発売中!!

さらに2つのコミカライズの展開が!!!!!!
ソードアート・オンライン フェアリーダンス(作画:黒川真)『電撃コミックス』にて連載中!!
ソードアート・オンライン アインクラッド(作画:黒川真)『電撃コミックス』にて連載中!!

●川原 礫著作リスト

- 「アクセル・ワールド1―黒雪姫の帰還―」(電撃文庫)
「アクセル・ワールド2―紅の暴風姫―」(同)
「アクセル・ワールド3―夕陽の暗黒者―」(同)
「アクセル・ワールド4―蒼空への飛翔―」(同)
「アクセル・ワールド5―皇影の浮き橋―」(同)
「アクセル・ワールド6―冷火の神子―」(同)
「アクセル・ワールド7―災禍の鎖―」(同)
「アクセル・ワールド8―運命の連片―」(同)
「アクセル・ワールド9―七千年の祈り―」(同)
「アクセル・ワールド10―Rebirth―」(同)
「アクセル・ワールド11―超硬の狼―」(同)
「アクセル・ワールド12―赤の紋章―」(同)

- 「アクセル・ワールド13―水際の手火―」(同)
「アクセル・ワールド14―激光の火天候―」(同)
「アクセル・ワールド15―終わりと始まり―」(同)
「ソードアート・オンライン1―アイंकラッド―」(同)
「ソードアート・オンライン2―フェアリィダンス―」(同)
「ソードアート・オンライン3―フェアリィダンス―」(同)
「ソードアート・オンライン4―ファントムバレット―」(同)
「ソードアート・オンライン5―ファントムバレット―」(同)
「ソードアート・オンライン6―ファントムバレット―」(同)
「ソードアート・オンライン7―マザーズ・ロザリオ―」(同)
「ソードアート・オンライン8―アーリー・アンドレイト―」(同)
「ソードアート・オンライン9―アリシゼーション・ビギニング―」(同)
「ソードアート・オンライン10―アリシゼーション・ニンク―」(同)
「ソードアート・オンライン11―アリシゼーション・ライジング―」(同)
「ソードアート・オンライン12―アリシゼーション・ディバイディング―」(同)
「ソードアート・オンライン13―プログレッシブ―」(同)